38

春城群譚採録

大正十五年九月

特別
イ4
1919
387

大正十五年八月春城随筆編纂の時旅録を多く切りぬきし不用となりしもの少からず或は其内に他日用立つこともあらんと爰に収めおく

特
明 イ4 號 1919 巻 38
明 イ5 號 1380 巻 38
昭和十六年十月二十七日 市島謙吉 寄贈

雑話（二）

市島春城

ので、鎌倉時代には地震は怪蟲の仕業であると信じた
のである。鯰の仕業であるとの迷信もかなり古いもの

名印の滅亡

先頃の大震火災で亡びた古書書其他の名品は夥だしい數で、誠に惜しいといふもなか／＼の感がある。自分の趣味とする古書籍の亡びたことも莫大なもので、就中帝國大學の圖書館に藏してあつた圖書中には到底再び手に入れることの出來ない貴重のものも多かつた。其れ此れを考へると實に愛惜の感に堪へぬ。

自分が趣味上特に其安否を氣遣つて居たものが二つある。其一は郷誠之助氏の先代郷純造氏が一世の力を盡して集められた印である。是れは松石山房印譜と稱して五六帙世に出で居り、其道の人はすべて知つて居るものであるが、其の原物は實に尊いものである。其中には明末の亂を避けて長崎に來た支那の文人の齎らし來つたといふやうなものが多いが、尚ほ郷氏は年々多くの金を授けて人を支那に遣はし、彼地に於て珍とさるゝ程の印を蒐集せしむること數十年に及んだので、其の結果は全く支那をも壓倒する程の名印に富んで居たのである。松石山房印譜は單に日本の印譜中に於て冠置とすべきものである許りで無く、支那に向つても誇りとするに足るもので、一箇人の寶と云はんよりも、國の寶と云つてもよい位のものであつた。其中には秦漢等の古い時代のものもあり、又唐宋元明等歷代の名人の刻したものもあり、唯に數が多いといふのみで無く、いかにも能く精撰されたもので、其點に於て最も尊まれて居た。此の多數の名印が先頃の大災に果して禍を免れたか否かといふことは自分の最も關心した所で、頗る其の消息を聞かんことを欲して居たのであるが、つひ此頃になつて、其れが災難を免るゝこと能はずして全滅に歸したといふことを聞いて、實に自分の大切なものを失つたやうにガッカリした。郷氏の本邸は災難を免れたのであるが、不幸にして此物が濱町の別邸の藏に在つた爲め、遂に此の禍に遭ふたのである。聞けば或る外人に之を三十萬圓で賣らうとして、未だ其運に至らざる中に災難に會したもので、別邸に持つて行つて置いたといふのも、畢竟賣買の便宜上からであつたさうだ。何にしても再び集むるに由無き數千の名印が悉く亡びてしまつたのは殘念に堪へぬ。

紙幣文學

今一つ自分が其安否を氣遣つて居たのは、豫ねて相識れる大阪の前田淳氏が、三十幾年といふ長い年月の間、萬事を犧牲に供して蒐集に沒頭した結果得た所の古來の有りと有らゆる紙幣である。此の前田氏は自ら藩札狂と稱して居た人で、其の蒐集の中には、政府の發行した紙幣は申すに及ばず、諸藩から出した札、或は色々の商店から發行した手形といふやうなものが殆んど殘らず網羅されて居ると云つてもよい位であつた。故あつて之れが安田善次郎氏の手に歸して居つた

のであるが、私は其の蒐集の苦心を思ひやつて切に其の消息を聞かんことを欲して居た。處が是れは常に[illegible]職を免れたといふことを聞いて、私は非常に[illegible]つた。

[illegible]

あるべき性質のものであるのに、或る時代に限つて其の必要を超越して、殆ど必ず此の銘を附するといふことが一種の流行のやうになつて居たやうだ。それ[illegible]十字もあり、無論漢文であつて、書いてある事[illegible]帶の運用の徳を頌したり、或は富國利民といふやうなことを述べたりしてある。其文は藩中第一の學者が之を撰び、且つ多くは立派な篆書で書かれて居る。紙幣の如き一般に流布するものに斯様のもの、あるのは少[illegible]れを各藩が競ふて行ふた[illegible]の装飾ともし、又之を以て[illegible]一法としたよう[illegible]が今一つは斯様の[illegible]

[illegible]けに[illegible]光然たる一節を成す程で、一種紙幣の文學ともいふべきものが出來上る譯である。[illegible]究して見るとなか／＼に興味が深い。

西國立志編の芝居

スマイルスの『セルフヘルプ』を翻譯して『西國立志編』が明治の初年我國上下の社會に非常に[illegible]ことは誰も知つて居る。其の翻譯は隨分間違もあるのではあるが、何分人格の高い學者として有名だつた中村正直氏が苦心して翻譯した相當の名文であるとの故

が前途を目指して急ぎ行く時「彼處」が漸やく「此處」と變る[illegible]時、吾等の目標が遙かなる彼方に在ることは最初と少しも[illegible]、吾等は本來の平凡境に立ちて斷えず失せゆく靈液にあこがる」で前途の世

秋冬雜[illegible]

秋の川沈めるものを木の實とす　[illegible]人
秋川や橋を尋ねて小[illegible]道　同
酒飲めばもの皆悲し虫の聲　同
小夜砧虫のしゞまとなりにけり　同
天高し芋掘る一人二人かな　同
[illegible]畠や芋の一[illegible]芋[illegible]に　同

井伊大老と茶道

井伊大老が相當の茶人であつたことは、多くの人の知つて居る所であるが、大老が茶道の心得に就ていふて居る事を見ると、成程と首肯される節が少なくない。其の一例をいへば、大老は人を招いて茶を立てる心得の最も大切なる一ヶ條として、如何なる茶でも一生一代のものと心得べしと云ふて居る。是れは單に一生懸命に立てよ、決して疎略があつてはならぬといふ丈けの意味では無い。一生一代、再び來らぬと心得よといふのは、事實茶道に於てはさうであるので、たとへば茲に甲なる人を招いて茶の會を催すといふ場合には、

すべての趣向を其の客人に、又其の季節に適合するやうにしなければならぬ。床の間の掛物、花瓶に生ける花、其時に使用する茶器等が皆な其の季節と客人とに當て嵌まり、もし其頃世の中に何かの事件あれば其れにも趣を寄せ、又時刻も朝とか夜とかいふことに付何等かの趣ある風にせねば面白くない。其の意味からすれば成程一生一代であつて、茶を立てることは生涯に何遍あるにしても、皆一度々々別のものである。萬遍無く同じ事を繰返すのは、茶の趣味を解せぬもの丶事だ。昨日の茶は今日の茶と同じからず、今日の茶は又明日の茶と異なる。かくして無窮に新らしい趣向を立つる所に、茶道の妙味は存するのである。

茶道に於ては靜寂を尊ぶ。如何にも茶人の態度は靜寂であり、茶席の環境も亦靜寂である。併しながら主人の心の働きは頗る繁劇であると謂はねばならぬ。如何にすれば月並に墮せず、客の心に協ふかを考へるには非常に忙しい。大老が一生一代と心得べしと敎へたのは、此間の心理作用をいふたもので此の一ヶ條、簡潔ながら意味甚だ深長といふべきである。

大老は又、茶會が果て丶客人を送る場合に、其の影の見えずなる迄立つて、今頃はどの邊迄行かれたであらう、雪が降るのに困りながら行くであらう、月が出て居れば興深く歩いて行くであらうといふやうな事を思ひやり、然る後座に立ち歸り、獨り徐ろに一服の茶を立て丶其日の事を味ひ、それが濟んでから靜かに茶器等を收むべきであるといふて居るが、是等も甚だ味ひのある言葉だ。普通には型の如く茶會を催して、客が歸れば形式的に見送り、座に戻るや否や茶器を取片付け、ア丶〳〵と兩手を伸して大欠伸するといふ風である。それを獨居の場合といへども茶道の精神を忘れてはならぬ事を說いたのは、流石に大老が此の道に造詣の深かりしを示すものである。

奇人中島棕隱

昔の文人が俗な名前を雅化して意外に面白い名を撰んだ例は少なくない。さういふ事にかけては、近世の文人では、何人も巖谷一六を推すのであるが、其の以前に於ては中島棕隱を推さゞるを得ぬ。

いふ迄も無く棕隱は詩人として有名の人で、曾て賴山陽と鴨川の邊りに隣り合つて住んだこともある。此人なか〳〵の變り者で、ある時は酒資に困つて娘を遊里に賣飛ばしたが、娘は其れを悲んで廓を逃出し、遠い親戚の家に身を寄せたなどの事もある。又ある時は懇意な鰻屋の料理場へ入り込んで、鰻を割く手傳などもした。丁度鰻を割く俎に向つて居る時に、知合の人が表を通つたので、オイ〳〵と呼び留めて、をれの手並

を見せてやらうと云ひながら、ヌラクラとした鰻を押へて頭に釘を打ち、見事に割いて見せたなどいふ話もある。かういふ俗才に加ふるに文才のある人で、其の雅俗の才を併せた點に於ては、流石の才人山陽も此の人に及ばなかつたと云はれて居る。

近頃何かの本に出て居る話を見て興味を感じたのはある時棕隱の知合の酒屋が來て、商賣にふさしはい額を書いて貰ひたいと頼むと、よし／＼と云ふて、直ちに『茂竹庵』の三字を書いて與へた。是れは酒屋の看板である所から『餅くわん』に音を通はせたものである。すると其の酒屋の隣に餅屋があつて其額の意味を聞き大に怒り、酒屋にのみ左袒して人の稼業の邪魔をするは以ての外だと怒鳴り込んだ。棕隱柳に風と受流し、さう怒るな、お前にも書いてやると云ひながら、筆を取つてさら／＼と『渉鷄軒』の三字を書して與へた。是れはいふ迄も無く『酒いけん』に通じさせたもので、餅屋の爲に今度は酒屋を排斥したのである。いかにも當意即妙で、斯樣の藝に於ては當時獨歩と稱せられた。

ケメル・バシャと徳川家康

土耳其の豪傑ケメル・バシャが國難に乘じて、遂に久しく列國の壓迫の下に立つて居た祖國を獨立の地位に置くに至り、其爲め天子は國外に放逐せられるといふやうな事で、土國の歴史に一大新紀元を開いた。是は獨りケメル・バシャの大手腕のみに因るもので無いのは勿論であつて、從來土耳其に對し最も強い壓迫を加へて居た露帝國が革命の結果全然崩壊したのと、歐洲列國があまり甚しく土耳其を壓迫すると或は再び大戰の端を開く恐れある爲め、ケメル・バシャに對抗することを差控へた結果、遂にバシャをして大業を成さしむるに至つたものである。

處で、ケメル・バシャは土國の舊都たるコンスタンチノープルに居て政治を執つて居るかといふに、さうでは無くて、曩に自分が苦戰をして多くの血を流したアンゴラ州内の一地域に今も居を構へて、茲に內閣もあれば、すべての政治機關も存して居る。此地は君府よりはあまり離れて居らぬ所であるが、此頃或る人訪問して驚いたのは、それが如何にも小さな村であつて、宿泊しようと思つても相當の宿屋が無い。漸く近頃になつて出來た宿屋といふのが、いはゞ東京のバラック式の宿屋である。すべての物が甚だ不十分で、何か買ひたいと思つても容易に整はぬ。特に水が甚だ惡るく、一度漉した上で無ければ飲料にならぬ。よくもケメル・バシャの如き大豪傑が斯樣の處に辛抱して居られると思ふ位であるが、バシャは此地を立派な首府にして見せるといふ意氣を以て、何と云つても他に移ることを肯んぜぬ。近頃はあまりに此地が不便であるので、國際上の問題にもなつて居る。それは追々各國から土國に公使を派遣することになつて居るのだが、君府の如く萬事整つて居る所ならば何でも無いけれども、今のやうな不便の土地では、到底外國の使臣は居たゝまらぬといふので、君府から通ふことを許せばよし、然らざれば公使を派遣することを差控へるといふやうな交渉も起つて居るさうである。

自分は此話を聞いて洵に案外の感をしたが、しかし豪傑の豪傑たる所以は恐らくそこにあるのだと思ふ。といふのは我國德川氏創業の時、家康の爲した所を見ると、恰も今のケメル・バシャの爲す所と符節を合する如きものがある。家康の江戸に入つた時はどんな狀態であつたかといふに、城といふも殆んど形ばかりのもので、朽ちた船板などで所々繕つてあり、見渡す限り沼地にて、滿目蘆が生ひ茂つて風に靡いて居るといふ有樣、場所は武藏野と云つて、廣いことは限り無く廣いけれども、人家は數ふる程しか無く、日用些細の事といへども辨じ兼ぬるやうの實狀であつたのである。當時の人は家康が覇府を開くのは、多分小田原か或は鎌倉であらうと考へて居た。小田原の如きは比較的發達して居て、後の江戸文明は小田原文明を取り來つたといふ程であつたが、其の小田原に覇業を創めずして、殊更に不便の江戸を撰んだといふのは、其の地勢を察した遠大の見識に因ること勿論であるが、一は又徒らに他人の蹤を踏むことを欲せざる英雄特有の心理に本づくものであらう。ケメル・バシャがいくらも距離の無い處に立派な舊都があるのに、少しも之に戀々たる所無く、飽く迄片田舍に頑張つて居るのも全く之れと同じ精神に出づるもので、古來英傑の爲す所は、流石に常人の及ばざる所ありと謂はねばならぬ。

趣味の頼倫侯

紀州和歌山の城の所在地を虎臥山といふて居る。其の舊藩主侯爵徳川頼倫君に、自分は久しく交りを辱うして居たものであるが、茲に語るべきは侯爵の雅號が虎臥山といふ地名に因んだものであることである。其の字は活字を捜しても無い字であつて、『臥』の下に『虎』を附けたものが一字、其下に『城』の字を添へて、『鬀城』といふのが侯爵の號であつた。侯爵は隷書を能くせられ、旅行等の場合に書を乞ふものあれば、見事な隷書を書かれて、いつも此の號を据えられる。其都度人から、是れは何と讀む字だと問はれるのが常で、中には拵へ字ではないかと疑ふ者もあつた。しかし此の『鬀』といふ字は確かに字典にある字で、侯爵は二年間康熙字典を模索して漸く之を捜し當てられたのだといふ。此字を見出した時は飛上る程喜んだと、嘗て笑ひながら話されたことがある。侯爵は昨年來狭心症に冒され病臥中であつたが、遂に先頃其の病の爲に他界せられた。發病後一回も其の謦咳に接することの出來なかつたのは甚だ遺憾とする所で、其の棺前に通夜をした時には、在りし日の侯爵の面影を思ひ出でゝ、萬感交々到つた。

其の通夜の晩に初めて侯爵の法名を知つた。それは『樹徳院殿鬀城高節居士』といふので、之れを見て又感慨を新たにした。此の法名にも、苦心されたる雅號が取入れられてあるのみならず、高節居士といふのが如何にも侯爵にふさはしいと感じた。此の高節の二字は侯爵の人格を如實に現はして居るものであるが、尚ほ其外に侯爵の體軀の非常に高かつたことが、『高』の字に依つて髣髴されて居るやうにも思はれる。又『節』といふ字は竹に因縁のある字であるが、侯爵は人の知る如く多方面に趣味を有せられた中にも、竹を非常に愛せられて、全國各地の竹を集め、尚ほ竹を以て製作した品物は何彼と無く蒐集して、一種の竹の博物館ともいふべきものを邸内に作つて置かれた。高節居士といふ法名を見ると、矢張り其の趣味をも包含されて居るやうな氣がして、何と無く面白味を感じた。

侯爵は早くより南葵文庫といふ圖書館を設立して、之れを公開せられ、又天然記念物を保護するといふ一種歷史的の趣味ある事業にも熱心に盡力せられ、華冑界に珍らしい人格者であつたが、僅に五十四歳といふ前途ある年輩で、一朝病の爲めに逝かれたのは、痛惜に堪へない所である。

北山と芝居

山本北山は有名なる學者で、朝川善庵、大窪詩佛等の大家が皆その門から出た。此人通稱を喜六といひ、孝經樓といふ號を以て聞えて居る。其の著述も少なくないが、就中『日本外志』といふのが此人の大著とされて居る。是は遂に出版に至らず、僅に寫本として傳はつて居るものであるが、此の北山の前に松下見林が『異稱日本傳』といふを著はした。此書は支那の多くの書籍に散見して居る日本の事柄を集めて一卷としたものであるが、其『異稱日本傳』に漏れたものを補つたのが即ち北山の『日本外志』である。それは殆んど『異稱日本傳』の倍もある程の事實を集めたもので、有名の著述ながら頗る得難いものである。

北山に就て語るべきことは、當時儒者の番付なるものが流行した。是れは多くの儒者が黑幕になつて、銘々勝手に自己を揚げ、他を貶すに力めたもので、自然其の番付の事から儒者間に種々の爭を生じた。さうして御互に爭つて居る間には勢ひ各自の私行に迄及んで、盛んに論戰したものであるが、其中に北山に對しての非難は、彼は儒者に不似合にも、芝居者に金を貸して高利を貪つて居る、尚ほ其上に彼の妻は門人と駈落をしたが、其の不義の女を再び入れて元通りにしたのは、儒者として有るまじきことであるといふやうな事を漢文で書いて、盛んに人身攻撃に及んだ。

自分は之れを讀んで、果して左樣の事があるものかと疑つて居たが、此頃になつて其の事實あることを知るに至つた。北山は芝居が非常に好きで、且つ其の容貌が、當時評判の高麗屋に酷肖して居た爲め、其の交友間に於ては、北山に對し高麗屋と云ふ綽名を附けて居た位であつた。斯樣に芝居好きであつた所から、自然芝居の金主にもなつたものと見え、『芝居秘傳集』といふ本を見るに、ある時河原崎座で、市川荒五郎といふ役者を舞臺に上せるに就て、誰も金主が無くて困つて居た處、北山が此役者を大層贔負にして居ることを考へ出した者があつて、あれならば山本さんに頼めば金主になつて具れるかも知れぬといふので、早速北山に話をして見た處、果して一も二も無く引受けて金主になり、其爲め此芝居大當りであつたといふことが書か

れてある。之に依て見ると、北山が芝居の金主をしたといふ攻撃は、假托の事で無いことが知られる。儒者が金を持つて居るといふ事は多くの例は無いが、しかし絶對に無い限りでは無い。たゞ芝居の資本主になるといふ程の裕福な儒者は、あまり多くを聞かぬ。孝經樓主人などゝ號する北山が大の劇通であつて、且つ己が最負の役者に金主となつたといふことは、當時に於て珍らしかつたに相違無い。今日でも北山といへば、嚴めしい經學者で、眞面目一方の人とのみ考へられて居るが、彼とても亦人間である以上、斯樣の事があると云つても、敢て怪しむに足らぬ。

Bijou Book

小型の本を、日本では寸珍本と呼んで居る。其の寸珍本の中でも、取りわけ小さなものを、俗に豆本と稱する。西洋では斯樣の豆本、いはゞ長(たけ)が五分で、幅が三寸位の小さな本を Bijou Book といふて居る。自分も物好きに、五六年前から、斯樣の小さな本を徹底的に蒐集することを志して、千四五百部程集めて見たが、それが殆んど極點であつて、どう探しても最早や其れ以上には無い。

茲に自分などの到底及びもつかない話がある。それは英國の現皇后の御所藏にかゝる所謂 Bijou Book である。英國の國民は皇后陛下の坤德を讃美する意味を以て、先年人形の家を作つて陛下に献した。此の人形の家は如何にも人形相應に小さなものであつて、極めて巧に作られてあるのは申す迄も無く、其の小さな範圍に於て、何から何迄剩す所なく備はつて居る。日々の生活の道具をいへば、自轉車もあれば、オートバイもあるといふ譯で、それが皆小さな人形に調和するやうな、至つて小さなものながら、しかも又それ〴〵の働きをするやうに精巧に出來て居る。其の中に室內圖書館ともいふべき一室がある。其處に備へられてある本といふのが如何にも小さく、殆んど吹けば飛ぶやうなものだが、何れも立派に裝釘せられ、その活字も小さいながら、甚だ鮮明である。書籍の種類はバイブルあり、詩集あり、美術書あり、わけて驚くべきは、近代名家の自筆に成る原稿二百種が極めて小さく複製せられ、其の圖書室に備へ付けられてあることである。勿論新聞雜誌に至る迄、悉く人形にふさはしい小さな格好にな

つて備はつて居るといふに至つては、是れは帝者に於て初めて爲し得ることであつて、之を聞けば我々は殆んど顏色無しと云はざるを得ぬ。

雅號の由來

古來文人が雅號を附けた其の源に溯つて見ると、隨分抱腹すべき事が伏在して居るものである。それが段々其人の有名になるにつれ、左樣の可笑しい由來を穿鑿するものも無く、又夫子自身も其の雅號に種々典故などを附けて勿體がる者が少なくない。曲亭馬琴は何人も知る如く德川期に於ける小說の大家であるが、其の未だ名を成さない頃、當時既に有名であつた山東京傳に會つた。其時京傳が、お前はどういふ志をもつて居るかと聞いたのに對して、自分は幇間になりたいと答へた。京傳、それは宜しくないとて、懇ろに其の不心得を諭したので、馬琴は、然らば幇間はやめて、講釋師になりませうといふ。それもよいかも知れぬが、一體どれ位講釋が出來るか、試みに自分の前で一席演じて見よといふたので、馬琴は鹿爪らしく扇子などを叩いて、何か辯じ立てたが、あまり上手ではない。其頃まだ若かつた、京傳の弟の京山が、其の講釋を聞いて思はず吹出したといふやうな事が、京山の筆に依つて書かれて居る。恐らく是れは事實であらうと思はれる。

それで、馬琴といふ號は、當時有名なる講釋師に馬の字を附けたものがあつたので、取敢えず其の一字を取つて馬琴と稱したのだといふ說がある。又、ある人の說には、曲亭とは廓といふ意味で、馬琴は和訓マコトである、卽ち廓に誠ありとかなしとかいふ事に引掛けた狂歌師じみた名だと云はれて居る。其の何れかは判明せぬが、馬琴程の後には非常に見識を衒つた人間の、抑も最初の志が幇間になることにあつたといふのも、案外に思はれることである。坪內逍遙博士が、嘗て之に就て自分に語るには、それは格別不思議の事では無い、苟も小說家にならうとするには、あの時分には先づ花柳の事情に通せなければならぬ、それには幇間になるのが一番の近道である、馬琴の志は當時既に小說家となるにあつたので、其の方便として幇間を志願したのではないかと云つた。或は然らんかとも思はれる。其れ是れを考へると、曲亭馬琴といふ雅號には支那に嚴めしい典故があるなどゝいふのは、後に至つて

故事附けたことであつて、廓の誠といふ位の事が其の眞の源であるかも知れぬ。之に比べると露西亞文學を最初に日本に紹介した長谷川辰之助君が、其の少年時代に親父から、貴様のやうな鈍物はクタバツテシメエと屢々江戶辯に叱られて、其れを記念する爲に二葉亭四迷と號し、後年文壇の大家となつても、淡白に其の由來を告白して居たのなどは、却々に奥床しい感がある。

尙ほ是れは雅號では無いが、序でなれば今一つ自分の友人の名の事を加へる。文學博士で京都大學教授の新村出君は頗る篤學の人であるが、君は一時官界で聞えた關口隆吉氏の遺子である。關口氏は前原一誠の亂に際し、山口縣の縣令を勤めて居た人で、其の意味に於ても有名であるが、出といふ、あまり類の無い名は、此の父君の命じたものである。其の由來に付新村君自身の語るところに依ると、自分の母が山形縣に居る時に懷姙して、山口縣へ行つて分娩した、之れが山といふ字を二ツ重ねて自分に命名された譯で、自ら其の經歷を現はして居るといふた。人の知る如く此人は言語學專攻の學者で、何事についても言葉の典故を調べることに沒頭して居る。自分の名については、勿論其の專門の取調をした譯であらうから、よもやウソもあるまい。

此のシト筒なるものは餘程古い時代からあつたものと見えて、異本の平家物語に、古來降參の時の言葉として、もし今後相そむくやうの事あらばシト筒さしに能り成らんといふたと見えて居る。之を以て見ると、シト筒を携ふる如きは最も下賤の者のする事であつて、苟くも士分としては之を恥として成し得ないものであつたことが知られる。從つて主人に進めるのも、直接では無く、駕脇の近習を經て進めたものであることは、いふ迄も無い。

書簡趣味

自分は手紙を蒐める道樂をやつて見たことがあつて、手紙については頗る趣味を感じて居るものである。元來手紙ほど赤裸々に其の筆者の性格を現はして居るものは無い。恰かも其人を衣冠束帶を解いて、浴衣がけにして見るといふやうな趣が、手紙にはある。此の意味に於て、手紙は歷史や傳記などの缺陷を補ふ材料にもなつて、甚だ興味深いものである。

此頃或人から、手紙には色々の味ひがあるが、之を其の種類に從ひ分別すればどんなものであるかと問はれたのに對し、深く考ふる暇も無く三十則許り列擧して見た。其の詳しい事は玆に掲ぐる餘白も無いが、概略を述べて見れば、先づ能筆能文の手紙、是は書の美に於て、又文章美に於て、其筆者の如何に拘らず趣味を感ずるもので、別して筆者に面白い經歷でもある場合には一層其の味ひが深い。又筆者の性格が極めて能く現はれて居る手紙、是は平生の手紙の形式を離れて懇親の人などに與へたものに多く、自家の僞らざるの記とも見るべきもので、之を見ると宛ら其人の音容に接する如き感がある。次に、何事を問はず、稀なものには一種趣味を感ずるものであるが、手紙について云へば、中江藤樹とか、山鹿素行とかの手

紙は、自分の經驗によると頗る稀れなるものである。斷簡零紙といへども珍とせざるを得ぬ。それから、天下の大事を語つた手紙、是れは勿論國家の樞要の位置に立つて居るやうの人の手紙に多く、歷史の缺陷を補ふ程の材料となるのは、多くは此種のものである。之に關聯したやうな事だが、偉人同志の往復した手紙といふものも亦面白い。一國の宰相が商人か何かに贈つたやうな手紙はあまり興味を感ぜぬが、大臣同志往復する手紙といふ如きものは、其の內容頗る見るべきものあり、從て大に興味を唆られる。

又意外の事に觸れた手紙も、甚だ趣味あるものである。たとへば、道德堅固の君子と思つて居たやうな人が、妾を蓄へたいとて、其の世話を賴むといふ類は、此の意外の部類に屬する。文藝其他韻事に關する手紙は、いふ迄も無く頗る興趣に富んで居る。此種の手紙は全く俗事を離れて、同好の範圍に風流を通信するといふ部類のものである。やはり之と似たものであるが、近作の詩歌俳句等を錄してある手紙、わけても中に戲書を書き込んであるといふやうな手紙になると、愈々興味を覺える。次に婦人に宛てた手紙、是れは婦人に宛てたといふ丈けでは別に趣味を感ずることも無いが、それが情事に關するもので、且つ其男子が地位ある人である如き場合には、甚だ面白い。又婦人の手紙は、あまり多く殘つて居らぬもので、殘つて居ても必ずしも悉く興味を感ずる譯でないが、たゞ或種の婦人の手紙、たとへば勤王の志深かつた望東尼の手紙とか、世に知られた名妓の手紙などになると趣味がある。諧謔を弄した手紙、是は勿論懇意同志の間に交換したもので、讀んでみると局外者が頤を解かざるを得ぬやうなものもある。又すべて絕筆と見るべき手紙は、其後には其人の筆が無いといふ意味に於て趣味あり、別して其人が最後の感懷でも述べて居るやうのものに至つては、最も感じが深い。

書簡を認めた年月に意味あるもの、たとへば旅順陷落の日に戰況を報じたとか、或は條約改正危急の場合に、時刻迄書込んだ、黑田總理大臣より大隈外務大臣に宛てた手紙とかも興味がある。手紙の外には絕對に其人の墨蹟の傳はらぬといふ人の手紙、たとへば工藝界の名工、則ち名ある陶工、塗師、鑄金家等の手紙は、頗る珍とすべきものである。光琳の如きは書はいくらも殘つて居るけれども、字は落欵の外は、手紙以外に傳はつて居ない。此の意味に於て、其の手紙に格別の趣味がある。又獄中から發した手紙、是はいふ迄も無く其の悲慘なる境遇が偲ばれ、一種の味ひあるものである。たとへば渡邊華山が獄中で認めた手紙の如きは、普通の場合の手紙よりも一段の興がある。發信地の珍である場合の手紙、卽ち大名が吉原から發した手紙などもおもしろい。一通の手紙に往復の文の備はつて居るもの、匆卒の場合、懇意の間柄などでは、先方から來た手紙の餘白に、直ぐ返事を書くことが、間々ある。時には臣下から差上げた手紙に對して、君侯が筆を取つて、此事は可とか、此事は否とか認め、或は別に說を立てゝ居る手紙の如き、對照して見ると甚だ興味がある。又貴人より奴僕に與へた手紙、是は頗る稀のものだが、たまにはある。平生は階級に非常の懸隔ある事故、多くは代筆位で濟まされるが、ともすると褒賞の意味にて自筆の手紙を與へることがある。或は他人をして代筆せしむることの出來ないやうの場合に親簡を與へることがある。

謎の文、或は隱語の手紙といふやうなものは概して興味のあるものである。是れは他人が見て分らぬやうに、殊更に物を蔽ふ必要あつて書かれた場合が多い。維新のやかましい時節に、同志の間に交換した手紙に此類のものがある。勿論斯樣の手紙には、名前なども變名を使つてある。又重要事件に關係した人々の手紙、卽ち赤穗の義士の互に往復した手紙、又は水戶の浪士が櫻田事件の前に往復した手紙等が之れで、それが歷史の材料として非常に役立つこと、いふ迄も無い。高僧が俗事を書いて居る手紙、たとへば僧良寬が米や味噌の無心を云つて居るといふ類は、其人が高僧丈けに特別の面白味がある。旅況を叙した紀行體の手紙、是は概して長文の手紙であつて、旅行先の色々の見聞を錄し、或は詩歌、繪畫等を加へて趣味を添へたものもある。對話に代へての手紙、是れは今日のやうな忙しい世の中には無いことだが、昔し交通の不便な時代には、事實行はれた。馬琴の手紙の如きは其の適例であつて、一年に二度か三度出す手紙には、恰かも其人に逢つて、何ヶ月分もの事を、數時間に亘つて話しするといふやうなものがある。卽ち自分の起居の樣から、家

庭の事、仕事の事、或は其時分に行はれて居る世上の風聞等までも書加へて、材料の豊富な丈けに興趣も亦饒かである。學藝などに關して辯難論議、互に往復する手紙、是れも一種の手紙の證と見るべきもので、新井白石が色々の考證家に與へたもの丶如きは、即ち之である。やはり長文のものが多く、學問上の價値も少なくない。

外國人が日本語で書いた手紙、是れは勿論興味のあるものだが、あまり多く殘つて居ない。長崎に居た支那人が、日本の書簡文の體裁を覺えて、候文や假名交じりの手紙を書いたといふやうな事は、强ち珍しいことで無かつた。西洋人が曲りなりに日本語で書いて居るものも稀れに無い譯で無い。何れも一種の趣のあるものである。懺悔或は謝罪の手紙、是はいふ迄も無く自家の秘事を現はすことであつて、相手方に對して丈け告白するものである。すべて自分の秘事を現はして居るものは面白味あるが、別して其の懺悔が醜行に關係して居るものは、中々に興味が深い。又極めて簡單なる手紙、即ち僅に二行三行位の短い手紙に、寸鐵殺人的の妙味あるもの往々ある。是等は長文の手紙よりも、却つて興を發する場合が多い。書畫骨董等の來歴を叙し、或は其の眞贋を鑑定した手紙、是は前述の風流韻事に關する部類に屬すべきものかとも思ふが、特に玆に一類を設けたのは、其の書き方に依つては、其の書畫、器物に對する鑑定書ともなるので、趣味あると共に頗る貴重なるものと目せられて居るからである。

斯様に數へ來れば、手紙の種類も頗る多い。最後に今一つ附加ふべきは用ゐられた書簡箋或は封筒等より生ずる趣味である。昔は書簡箋や封筒に大に意匠を凝らした時代があつて、色々面白い畫などを字模様にして色彩を施した封筒もあり、北齋、廣重等の大家に畫を書かせて、版に押したものなどもある。又鞘形を押した、両端に紅のある半切は、婦人用として作られたものであるが、男子も之を使つて居て、今日殘つて居るものもある。是等が又文字を離れて、手紙に趣味を添へる一つの要素となつたものと云へる。尚ほ考へたならば、之に附加ふべきことも色々あるであらうが、以上述べたのは、自分が長い間に觸れた種々の手紙につき、大凡その分類をして見たので、決して空なものを設けたのでは無い。たゞ斯様の手紙も、其の筆者の如何に依つて趣味を發するもので、筆者が平凡であつては、趣味も何も無いこと、勿論である。

されても、絶えて見る機會も無く打
は、實に今昔の感に堪へない思があ
全體、川開といふものは、群衆の
先づ煙花が三分であれば、人出が七
るのである。本年の川開は、人出が
止し、見渡す限り陸上は人を以て埋
に、數限りも無く橋の左右に集まり

川開の今

隅田の川開は江戸時代に於ける年
しである。鍵屋といふ煙花の製造師
古いものであることが知られる。鍵
てしまつた。自分が川開の火戲を見
其頃まだ江戸時代の川開の趣を繼

川開の状況を、江戸時代に比べると、
を認めざるを得ぬ。
いふものは、二ヶ月以上も續く水
ことが本位で、煙花は只だ其の餘興
のである。川の上に浮ぶ船は、只だ
いふ許りで無く、屋根船に[illegible]
[illegible]する、其間の興を導ろ主とした
時期に於ては、色々に裝飾された川
れで、それが先づ一種の趣をなした
の多くの船から起る、騷くが如き[illegible]
ふへた。兩岸には川開の爲に、特に
[illegible]るものを設けられて、頗る
にも多くの[illegible]が浮べられて、客
供給した。斯様の[illegible]、若い間每晩

盛じたのは、屋根船の如きものは殆んど一艘も見えな[illegible]の英國
い。無論物賣船の如きものも認め得ぬ。多數滿載され
[illegible]船の客は、たゞ煙花を見ることと許りが目的で、
中に[illegible]酒を飲む[illegible]、絃歌を弄するでも無い。殊に
不思議なのは幾十百發の煙花、中には激賞に値するも
[illegible]無い譯で無いのに、昔ならば思はず知らず、鍵屋！
[illegible]玉屋！とか呼ぶ可き所を、今は何れも沈默して、
[illegible]の聲も聞かぬ。是れは一つは看客が酒氣を
[illegible]らでもあらう。此煙花が鍵屋なる者に
[illegible]れて居ることとすら知らぬ、時代の推移もあ
[illegible]場合の[illegible]子を用ふる
を知らぬといふ氣味もあるであらうが、何と無く世の
拔けた感じを免がれなかつた。[illegible]今日は如何にも時
世がやかましくて、少しく贅澤な事をする者があると、

明の時代に、我が倭寇が盛に支那の東南諸國を[illegible]
て、其の地方の豪族や、地位ある官吏等を屠り殺し、
其の財物を掠奪した。其時に持歸つた書畫骨董は實に

川開の今昔

兩國の川開は江戸時代に於ける年中行事の一つで、江戸の氣風にかなつた、最も陽氣な催しである。鍵屋といふ煙花の製造師は萬治年間の開業と標榜して居るのを見ても、其の中々古いものであることが知られる。鍵屋と同業で、玉屋といふ製造家もあつたが、是は今亡びてしまつた。自分が川開の火戯を見たのは、書生時代のことで、今より五十年の昔である。其頃はまだ江戸時代の川開の趣を幾何か存して居たと思はれるが、其れ以來、川開は毎年催されても、絶えて見る機會も無く打過ぎた。此度、即ち七月二十五日に催された川開を見ては、眞に今昔の感に堪へない思があつた。

全體、川開といふものは、群衆の雜鬧といふことが、其の行事の大なる要素となつて居る。先づ煙花が三分であれば、人出が七分といふやうな譯で、雜鬧そのものが、大に景氣を添へるのである。本年の川開は、人出が三十五萬人と註せられ、電車は六時を限として運轉を中止し、見渡す限り陸上は人を以て埋もれて、五六十人を滿載した傳馬船は、日の沒すると共に、數限りも無く橋の左右に集まり、其の盛んな有樣は、流石に大都會の大娯樂とも見られるが、併し今日の川開の状況を、江戸時代に比べると、其間に非常の相違を認めざるを得ぬ。

第一、昔の川開といふものは、二ヶ月以上も續く水の上の納涼といふことが本位で、煙花は只だ其の餘興に過ぎなかつたものである。川の上に浮ぶ船は、只だ煙花を見物するといふ許りで無く、屋根船に酒や妓を乘せて、墨江を上下する、其間の興を寧ろ主とした。

それ故、此の納涼時期に於ては、色々に裝飾された川船が無數に水に浮んで、それが先づ一種の趣をなしたものである。又其の多くの船から起る、湧くが如き絃歌が、一段の興を添へた。兩岸には川開の爲に、特に種々なる見世物や賣店の如きものを設けられて、頗る繁昌を極め、水面にも多くの物賣船が浮べられて、客船に色々のものを供給した。斯樣の事が、暑い間毎晩續けられて、それが三伏の炎熱を凌ぐ大都會の趣味ある娯樂となつて居た。

然るに、近年の川開なるものは、僅に一日と限られて、煙花は打揚げられるが、それとても昔の如く大金を掛けたもので無く、其の趣向も昔に比すれば必ず劣つて居るであらう。兎に角、今回久し振りに見て最も感じたのは、屋根船の如きものは殆んど一艘も見えない。無論物賣船の如きものも認め得ぬ。多數滿載された船の客は、たゞ煙花を見ること許りが目的で、船中に酒を飲むでも無く、絃歌を弄するでも無い。殊に不思議なのは幾十百發の煙花、中には激賞に値するものも無い譯で無いのに、昔ならば思はず知らず、鍵屋！とか、玉屋！とか呼ぶ可き所を、今は何れも沈默して、殆んど喝采の聲も聞かぬ。是れは一つは看客が酒氣を帶びて居ないからでもあらう。此煙花が鍵屋なる者に依て製造されて居ることすら知らぬ、時代の推移もあらう。又斯かる場合の喝采に如何なる言葉を用ふるかを知らぬといふ氣味もあるであらうが、何と無く間の拔けた感じを免がれなかつた。又、今日は如何にも時世がやかましくて、少しく贅澤な事をする者があると、之に對して嫉妬的に妨害を加へる者が無い譯で無い。それ故今度の川開の如きは、水上警察の手が非常に伸びて居て、云はゞ監視付の見物ともいふべき光景を呈して居た。眞逆に警察で禁じた譯でもあるまいが、事實禁酒的の遊覽で、船の中には酒などは絶對に無いやうに見えた。兩岸とてもまだ復興が十分で無く、半ばバラック式の酒樓が幾何か起つて居るに過ぎず、洵に潤ひの無い川開であつた。之を江戸時代の川開に比べると、其の相違の餘りに甚しきに驚かざるを得ない。

英皇帝と煙草

近頃、煙草禮讃といふ本が出た。其中に、今の英國皇帝が、まだ皇太子であられた時分、即ち一八五九年に、加奈陀地方へ旅行せられた。ある日、人家を遠く離れた、漠々たる大平原に出た。其のあたりの風色は如何にも荒寥たるものであつたが、一行が休息して、煙草を喫まうといふ段になると、生憎燐寸が一本しか殘つて居なかつた。此の一本の燐寸を萬一擦り損つては實に大變であるといふので、一行の君臣が籤を引いて、之を擦る役目を定めることにした。すると、皇太子が運惡くも其の籤を引當てられたので、頗る興奮の體で、全身緊張し、顏色も眞赤になつて、此處一生懸命の場合と、其の燐寸を擦りつけたが、折節風も吹いて居たけれども、幸に火が點いた。後年、皇太子が皇帝の位に卽かれてから、時々此折の事を話され、あの

すことにもなる。

支那人の浄瑠璃

支那人は他國の言葉を學ぶのが頗る[illegible]であつて、[illegible]年位外國に[illegible]人が十年も十五年も居て[illegible]は覺えられ[illegible]て操つる。そ[illegible]日本人[illegible]外國語に[illegible]ものは無い[illegible]てよい。[illegible]の如きは、普通の[illegible]はちが[illegible]よほど外國人が學よ[illegible]かしいものであるが、[illegible]れすら支那人は多少の心掛か[illegible]と、日本人よりも[illegible]かに長ずるものがある。現に[illegible]四年前支那に行した時、奉天に於て多數の支那[illegible]た。其[illegible]

日本石油株式會社 全越後軍對全秋田軍

羽越線の開通は、以前から懸案になつて居た日本石油會社全越後軍對全秋田軍の庭野球戰の問題を手もなく解決してしまつた。第一回は先輩國に敬意を表して秋田から越後に遠征することになつた。[illegible]來年は越後から秋田に遠征し、以後交互に往來しやうと云ふのである。

八月十四日夕刻、秋田軍は新潟に着き、宿舍に當てた新津鑛業所の二階に陣取り、越後軍も各[illegible]から集まつて來て、[illegible]事は忘れて兩軍一所になつて親睦快談した。十五日の朝には本社から大村副部長が景氣を添へに來られた。御土産には[illegible]ら贈られた大トロ[illegible]び奨勵金若干があ[illegible]

[illegible]は東京の三田稻[illegible]居るものと同質同[illegible]の仕合には過分で[illegible]い。兩軍の選手が力んだのも無理は[illegible]

籠球

[illegible]

その筆頭は左表の如[illegible]

時位自分が眞劍な氣持になつたことは、未だ曾て覺えぬ、自分が燐寸を擦る役目に當つたのは、皇帝の責任を負ふよりも更に重く感じたと笑はれた、とあるが、愛煙家には之に似たやうな事が屢々あつて、喫煙を思ふ時に、點火の道具がないといふことは、實に非常なる苦痛である。自分は青年時代に、亡友岡山兼吉といふ人と淺間山に登つた。其頃自分はまだ喫煙の趣味を解せなかつたが、山中の跋渉でいゝ加減疲れた時、岡山は石に踞して、一服喫まうといふ事になると、山中の濕氣で、燐寸が何としても點かぬ。段々擦り損つて、遂に二本の燐寸を剩すのみとなつた時は、岡山は血眼になり、非常に狼狽の體にて擦つた。其時は煙草を解せない自分も同情に堪へず、どうか發火させたいと、袖を以て風を遮つたりして、こちらも一生懸命になつたが、其の念力が届いて、最後の一本の發火した時には、萬歳を叫びたいやうな氣持であつた。

煙の生涯

右の煙草禮讃に、如何にも振つた話が一つ載つて居るから、之を借用することにする。今から五十年程前た。此人は煙草の王と云はれた位の大喫煙家で、其の和蘭のロッテルダムにワン・クレースといふ人があつ書齋は、世界中のあらゆる種類の煙草やパイプの類で充され、丸で煙草の博物館といふ有樣であつた。八十一の高齢で死んだが、殆ど六十年間といふもの、間斷なく煙草を喫んで、其の一週間に費した量は平均十封度だと云はれて居る。全く此人の一生涯は、煙の生涯ともいふべきであつた。そこで此人の死んだ時に、柩は葉巻の箱を材料として作り、中には最も上等の煙草を一杯に詰め、又其の愛玩したパイプ其他の附屬品をも納めた。葬式には、故人の遺言だといふので、其の市内に於ける多量の喫煙家を悉く招待した。參列者には、記念の爲め、最上の煙草十封度と、二本のパイプを贈つた。その式場に於て、參列者は何れも煙草を喫んで、濛々たる紫煙をあげた。さうして、人は灰より灰に、土より土に歸るといふ祈禱をなし、銘々の煙草の灰を其の柩の上に落した。尚ほ葬式後、同じく遺言によつて、市中で、煙草の喫めないやうな貧民に、年々幾何かを喫み得る資金を與へて、永久に喫ませることにしたとあるが、是れなどは最も徹底した愛煙家と云はざるを得ぬ。

小料屋雑載

大正十二年三月上浣起筆

〇昨十二日早大図書館の紀念日に報の凡宴席上余も図書館生活の苦楽を云はんとして時分の無い為め除外状方面の事を挙けて見ん、然のイントロダツシヨンとして「自分も図書館長の職を去つては早幾の着ぐの毎日図書の蒐集と發募しそめ、拾ふち物中毒に罹つてゐることときもの[illegible]ある、図書蒐集を其の目録を作つて解題を心つける日余しようすることも拾ふ館員のやつてゐる通ぞに、自分の日常生活を館員の[illegible]と用[illegible]ある、余の図書蒐集生活と自分の愉快と思ふことを推

雅名くさぐ

今はあまり行はれぬことだが、ある時代には支那風の雅名を撰ぶことが頻りに流行して、料理屋の如きはとりわけ風流の名を附けることに骨を折り、其の雅名が遂に本當の名になつた例も澤山ある。向島を夢香洲といふたり、新潟の花柳の地たる古町を森春濤が風流欄干とつけたりしたのは、土地に名けられた雅名であるが、同じ新潟の待合で田川といふ家を、多佳話楼と名付けた詩人があり、又向島に入金といふ待合があつて、是れは入谷のお金といふ女が始めたといふので其名が附いてあるのだが、それを俗だといふて、迻邐錦といふ名をつけた詩人もある。是れは錦の屏風といふ意味であつて、自ら待合といふ意が寓されてある。故人島村抱月がある園遊會に抱月亭といふ額を書いて園中の東屋に掲げ、是れはダキツキタイと讀むのだと云ふて笑はせたともある。同じやうな事に、京都のある料理店に鈴木松年が書いた花蓮亭といふ額が掛つてある。ある人が花蓮亭とは俗な名でないかといへば、松年曰く、是れはハナレン亭と讀むのだといふて笑はせた。今一つ同じ家の三階に、同人の筆に成る奇勝閣といふ額がある。成程是れは雅だといへば、松年笑つて、其の意味は分るまいといふ。分らんでも無いといふたが、筆者の解釋によれば、三階だから上りつめては起請を書くといふ所から來たものださうだ。

又、昔し深川の全盛時代に桝屋といふ大きな料理店があつて、大名などもよく遊びに行つた。此家は海に臨みて風景に富み、相模の望陀郡なども一目の中に收めることが出來るので、松平冠山といふ大名が、其楼に望陀欄といふ名をつけた。之れが評判になつて、當時の文人達は桝屋と云はずに皆望陀欄といふたが、之れにも隠れた意味がある。其の時分醉拂ひの事を棒鱈といふた。望陀欄は卽ち棒鱈に通ずる處から來て居るのである。

も図書館員も適用さることが多いのである、唯此
相違を一個人の作ると営業の作るのであるのと大小の
別があるが従を同じうするが、外容から見ると毎もく
書籍を工夫り曲りしてみるのに味も何もない抜ける丈
へることくうのであるが、実際をやるのでなく、図書館生活
に後人の知る能のやうな愉快もある、又愉快に感ずる
こと出来のあるものである、其の醜は是底も承知するを忘られるので
ある、今自分の挙げる廿五快と云ふのもホンの一端
を挙げて、あまして云ふのであるのまゝ書して戯文で
書きてあると云ふ評ではない、志りし同じ境遇にある
館員も自分余の列挙と同感であらうと信ず
る、と云ふて挙げれのも左の如くである

二十五快

一　新館完成せし時
一　図書費の増額を輸ち得たる時
一　不時の収入を得たる時
一　数年を費し居た目録カードの脱稿
一　数年を要したる写本の出来たる時
一　図書整理に数年を告げたる時
一　図書数十萬を突破の報有
一　欠本の完本となりたる時
一　紛失図書の発見されたる時

一 雑本より貴重書を見出したる時
一 新購書に蔵印を捺する時
一 修理成りたる製本に簽題を貼する時
一 不備を感じたる図書の備はりたる時
一 便宜に佳書を購ひ得たる時
一 会心の陳列をなし観者を喜ばしめたる時
一 練達の館員（司書）を得たる時
一 図書調への結果一冊の「欠込」もなき場合
一 館本の他館本に比し優りたる時
一 他館に無き稀覯書を得たる時
一 珍本の寄贈寄託を得たる時
一 整理法分類法等に新工夫を得たる時

一 閲覧者満員並図書の収獲多き日
一 近火に災を免かれたる時
一 或る重要事件に館本の大なる働きをなしたる時
一 年度末に顕著なる成績を発表し得たる場合

故阪口氏の事ども（九）

各方面諸家の感想

五峰君の印癖（一）

市島謙吉氏談

五峰君は頗る多趣味な人であつたが、しかしその中で何といつても詩が最もその長所で君の趣味の集注したものが詩であつたといはねばなるまい。この文藝關係の意味合から書畫などにも多少の嗜好はもつてゐたがあへて必ずしもそのおもなる趣味であつたとはいひ難い。興動いたときには往々書畫の品隲もやつたがそれも多くは自己のこのむところにしたがふといふ程度のもので、名畫と聞けば價を論ぜずして購ふといふ類ではなかつた。

骨董にいたつては殆ど全然趣味がなかつたかの觀があつたが、たゞこれに近い趣味のあるものでは大なる印癖を有してゐたことで、なかく蘊蓄も深かつた。君は曾て印を選ぶのにそれは極めて嚴であつたが、藏印の數もまた多かつた。一々數へたら恐らく二百にも近からうとおもはれるほどで歿後その遺篋を開いて見たら六函に充滿して燦爛として眼に映じた。

その中には自己の氏名印の外にいろくな印が藏されて、頗る貴重なものもあつた。君はかつて自分が多方面の趣味家たるを知つて「君のやうに種々のものに嗜好あるものもないものだ、この點については遥に企て及ばぬが、唯だ吾輩には印癖がある、これだけは君に讓らないつもりだ」といはれた。多年の知交たる自分は君と種々話し合つたことも多いが、これまで印のことだけはついぞ語つたことがないのに、このとき初めてこの點に觸れたりであつた。そこで自分は案外に感じ「ハヽア君に印癖があつたのか」といひ出し「實は自分も印癖家だ」とかねて所藏の印を出して君に示すと、今度は君が驚いて「コイツは全く恐れ入つた。マサカ君にこの道樂まであらうとは……」と互に呆れ合つたのが機會で、爾來兩人は印を通じて更に一層深交の間柄となつた。

もち論自分は君を驚かすに充分な程多くの印を藏してゐた。しかし君の如き文人でないから、自ら揮毫して、それに捺すなどの場合がない。稀にその機會があつても自己の印を作らずに濟まして來たから所藏の印は種々な人々の印を蒐集したもので一つも自己の氏名や雅號を刻したものでなかつたから人にも示さずに過ごして來たので自然君も知らなかつたのであるが一たび君にも印癖のあることを知るや、その後は互に斯道の同好者として話し合つた。實際自分はこの道について君に負ふ所が甚だ多い。

元來自分もこの趣味は有してゐたといふものゝ君と交はるまで餘り印人との交渉がなかつたのに幾許もなくしてこれと交際の端を發したのは偏に君の紹介によるので、そのころ君の最も交情深かつた印人は歿した濱村藏六であつた、藏六は人格ある面白い人であつたから君も友人として交はつてゐたもので君に伴なはれて自分も屢當時墨堤の藏六の居を訪ひ、三人鼎坐して印話に耽り、主人は置酒して歡待する、興つきずして君と自分とで藏六を拉してまた他の酒樓に上るといふことも頻々であつたかうした關係で一層自分の印趣味を深からしめた結果、遂にはしきりに藏六を煩はして自家の印を刻して貰ふやうにもなつた。

故阪口氏の事ども（十）

各方面諸家の感想

五峰君の印癖（二）

市島謙吉氏談

君の遺印を調べて見ると、十の六七は藏六の手に成つてゐて殊に全部その傑作に數ふべきものである、おもふに藏六は君に對して特別の手腕を揮つたものらしい、自分がのちに中井敬所、山本拜石、下つては圓入や半迂などにも交はつたのは、あるひは君の紹介に因つたり、あるひは自分から君を紹介したりしたといふ如き極めて錯綜した關係から生れてゐる、こんなわけで久しい以前から印を藏してゐた自分ではあるが、君を得て斯道に一隻眼を開き得たといふべきであらう。

かつて君と藏六と相携へて自分を來訪したときのこと、自分は藏六に藏書印を頼んだことがあるので、五峰君にそのときのことを話して藏書印の語を選んで貰つた。自分はまづ「全体支那の例では藏書印に子孫これを寶とせよとか何とかおきまり文句があるものだが自分にはどうも感心しない。いかに寶とせよと敎へたところで子孫その人を得ぬときは何にもならぬそこでむしろこれを賣つて一杯の酒に代へるを欲するなら賣るもまた妨げずといふ意味で一つ簡明な語を選んではしい」と乞ふたのであつた、そのとき藏六は傍らで微笑して聞いてゐたが、これより先自分は敬所に頼んで藏書印に「得其人傳不必於子孫」といふ普通よくある語を刻して貰つたこともあつて、このことは君もよく知つてゐた。ところでこの印語は「子孫之寶とせよ」式の常套語を脱し得たつもりであつたが、後に考へるとこれでもまだ滿足出來ぬのでさらに進んで今少し露骨に何か面白い語はないかと君に相談したのである。

ところが君の選んだ語は「子孫換酒亦可」の六字で、これは面白いと自分も滿足し、藏六が二つの異つた字体で刻して寄せられたのを今も自分は珍藏してゐる、君は餘りに物に執着のない人で、ときにその珍藏のものをほしがる人にサツサと與へることもある豪放な人であつたが、しかし印にかけては往々猛烈な執着ぶりを示したものであつた。動もすると人の秘藏品を殆ど強奪して行つたりするほどで、これについてつたふべき一話がある、自分の同郷の漢醫故三浦桐蔭（新潟に醫業を開き詩によつて君と交はつた、いはゞ君の門下の人）はその家が歴代文藝家を出しただけに名家の印を多く所藏してゐたので、桐蔭は君に印癖あるを知り、二三の印を君に贈つたその中に、高芙蓉の刻した印が一つあつた、これは桐蔭の殊に珍藏してゐたもので、君に贈るにつけても一詩を添へたといふほどであつた。「鶴鳴于九皐」といふ印文の長い楕圓形の印で君はこれを得て喜ぶとゝもにまた一つ慾が出て來た。

桐蔭の所藏品中、高芙蓉の刻した印は今一つあつて、それは方形のもので「滄浪」の二字が刻されてゐる。ところが桐蔭は自分もまた君と同樣に印癖あることを知つてゐたので、あえて自分から懇望したわけでもないのに、これを自分に贈つてくれたので、自分も好きな印ではあり頗る感謝してゐた、しかるに君は窃に食指を動かしてゐた印が、自分の手に歸したと聞いて、心中少からず遺憾に感じたものらしい。

あるとき遂に自分に向つて、極めて露骨にこの印のことを持ち出し「アレはどうも吾輩の手に歸すべきものだ」と君一流の論法で希望のあるところを言ひ出したが、自分は「折角だが老友の厚意で寄せたものであるから日夕その人と親しんでゐる君のところへ呈上するわけには行かぬ」と謝絶した、しかし折に觸れては要求して來るのであつた。

追餘懷錄

故阪口氏の事ども　(十一)

各方面諸家の感想

五峰君の印癖(三)

市島謙吉氏談

あだかもそのころ、自分はあるところから血の石を三十ばかり一括して得た。この鷄血石といふのは一見鮮血の滴つたごときめて美麗な紅色あるもので殊に俗眼にはうけのよいものである。自分は強ち俗眼を眩せしめるやうなものを喜ぶといふわけではないが、兎も角三十から纏まつてあるのはいかにもまれであるところから、つい手に入れる氣になつて望みを遂したのであるが、これに對しては一詩なかるべからずと考へた。そこで自分は五峰君から、鷄血石の印を望まれるについて、に詩を求めてその詩と印をかへやうと考へた。よつて君に向つてこの意をつげると言下に「よろしい」といはれるので、自分はさらに「もつともそれには條件がある、自分のいふ通りの結構で詩を作つて貰ひたい」と前提して、「賴山陽は喀血詩がある、自分も十數年前に新潟において喀血したことがあつてその時幾何かの血を失つたしかるにこれだけ多くの鷄血を得たのは曩に失つた血を償つたものであるからその意を詩中にふくませてほしい」といふ君も「成程面白い着想だが作るには骨が折れるしかし兎に角やつて見るが、短句では駄目だから長篇で作らう」とのことで、それから數日後、初稿をもつて來て示されたのを見るとそれは非常な大作で甚だしく自分の意に投じたので「これは結構」と感謝して收めやうとすると「イヤこれはまだ不可ぬ、ホンの筋だけで、この上更に鉋をかける必要がある」、實はこれまでにするには一週間も議會を休んで苦心したが、これから大久保湘南にも相談した上、槐南にも一通り見て貰ふ」と例によつて凝りに凝る君の性質を現はした挨拶であつた。

爾後一週間ばかりでいよく定稿といふのを持つて來たので、それを見ると、なるほど初稿に比して一段とよくなり、自分も大に喜んだのであるが、そのとき君はこれが出來あがつたについては是非共一會催したいから何月何日墨田川の枕橋の八百松に來いといはれる。興あることに考へて自分も招きに應ずると答へ、當日は誰が來るのかと問ふと、君の答へに「これは君の手にある印を吾輩の家に貰ひうける一種の婚禮といふべきものだから、是非媒妁人を要する。そこで詩の方面の立會人は湘南で印の方は藏六ときめた。兩人とも向島に住んでゐるから枕橋に會場を定め兩人の出席を求めて置いた」と話で頗る趣向が振つてゐる。

その日定刻に會場へ行つて見ると立會の兩君も來り會した。自分は「滄浪」の印を持參して交換の式をあげたのであるが、まづ立會人たる湘南が吟聲を得意とした人だけあつて、朗々として五峰君の長篇を三誦すると、その聲が水に響いて余音長く一座に詩味を漲らせた。湘南は、この詩に手を入れた關係深い人ではあるが、一切草稿につかずして長い詩を暗誦したのには敬服した。この日自分には別に何の腹案もない。マア演說でもやる外はないと態々起つて一席辯じたその趣旨は

此兒は自分の愛兒であつたが今回阪口家から懇望されて緣づけることになつた。實はこの割愛については頗る躊躇したのであるが熟ら考へると既に姉妹たる一つの印が阪口家にあるのだから、此兒も共に阪口家に養はれることになれば、おそらく其身の幸福であらう。斯く考へて口家に送るのであるが、唯だ貧寠なる自分は嫁入仕度の余裕がないので着のみ着の儘といふよりも此の通りの赤裸々であると述べて箱もない印を振り翳しつゝ挨拶を終つた。かくて五峰君も自分も立會の兩君も盛んに盃を擧げて痛飲した

追餘懷錄

故阪口氏の事ども　(十二)

各方面諸家の感想

五峰君の印癖(四)

市島謙吉氏談

この事あつて數日後、今度は自分の方で一會やるから某日某刻赤坂の三河屋まで來會を乞ふと案内した、但し諸君の外に更に一人を加へたい。それは自分は書を欲するので寺崎廣業君を招きたいのだといふと、一同皆知り合だから異議なく同意されたのでいよく自分が主人となつて雅會を開いた。その席上に君は鷄血石の長篇を一幅の掛物にすべく揮毫した外に卷物一卷にも筆を染めたが、掛け物の方、對幅とするために立會人諸君が別に合作の筆を執つといふ譯でそれには廣業君が丹青の痕を殘し藏六君が又これに一作を添へたもとより湘南君の一詩はこの際なかるべからざるものであつたが生憎同君はその前日から痘瘡に罹り遂に當日來會し得なかつたのみならずその一日後(?)に病歿したがこの前後雅筵は當時文壇の一佳話としてつたへられた。

君のこの長篇作は君の詩集中においても壓卷といふべき大作で元來君の辛苦も凡でなかつた。印癖と詩才とがあつてこの作をなしたものでこれは恐らく槐南といへども印癖を欠くだけに我五峰君以上の作をなし得まいとおもはれる。實にかくの如き詩は君をまつてはじめて發し得べきものであらう。

この詩が動機で今一つ君が苦心を再びしなければならぬことがおこつて來た、それは三桐䕃が最初君へ印を贈るときに矢張り條件があつたさうで、その條件は自分とおなじく君の詩を欲したのであつた、しかるに後から注文の自分の分がさきに出來て先口の方はなかく出來ない。これは畢竟「滄浪」の印がほしさに五峰君一番奮發して自分のために彼の傑作をなしたのであるが、桐䕃としてはこれを耳にして不滿に堪へず、しばく責められるので止むを得ずその作詩もやうやく成つたが、これまた長篇で傑作と稱せられた、印の關係で君の集中に錄された佳作はこの二つを數へざるを得ない。

なほ君が自分に寄せられた詩についておもひ起す一話がある、自分が紅霞山房といふ雅號であつてゐるのは矢張り君の賜である刻自分はそのころ赤城下に住んでゐたが君から寄せられた詩中に「紅霞」の二字があつたその字は槐南から得た言葉で支那の詩人は印を捺した模樣を「紅霞」の二字で形容すると聞いたので、鷄血のやうな紅い石にも應用出來るから用ひたといふ。自分はすでに幾十顆の紅石を有し、かつ赤城下といふ地にゐるので紅霞山房と號するにいたつたのであるが、丁度こんな話の出てゐるとき、折柄傍に湘南がゐて、「赤城といふ名を入れるのもわるくはない」といつたので自分は「あるひは然らん、兎に霞といふ字が氣に入るから赤城霞客としたい」といふと、五峰君も贊成して、藏六が他日この二字を刻したのを持つてゐるが、印を通じて君と交渉の深かつたことは他人の想像以上であつた。

○「感情と勘定」と云ふは音和通で滑稽味しあるが、これは近代曼荼羅的労働問題のフオルミユラである。労働問題も本体を糾ぬれば労銀の勘定に帰するのだが、此の問題のやかましくなるのは多くは感情から来てゐる。そして其の感情を激すると往々勘定を忘れて争ふことは往々ある。日本の如き労働者はまだ訓練なく争議の際、それは紀律の乏しい所は別して感情に駆られて勘定を忘るのと一つ事で数多傾向を見せる。それは労働者其自身に取り甚だ不利益なることである。一考を要すべきことだ。勿論それは其の首領神経に俟つが考量すべきことである。又資本家に於ても因循で早く勘定のみ打算して解決をつければ結局自己に利益の場合もあるのに、これ又多くの場合に於て感情に支配せられ無用の紛争を事とするが、これも決して褒むべきではない。斯く争議を決するには冷な感情を去つて勘定の重きを置き十分算盤づくで折衝する法を早く採るのも、双方のためにもよろしいのだ（七月十一日）

○多紀茝庭の醫賸附録時還讀我書二冊を
讀む、やゝ俗に無味を覚ゆることあり、一二左に
抄す

近日醫家の著述名儒の手を假ることの多し内藤
希哲の醫経解惑論は太宰徳夫の筆に
賀川玄悦の産論は皆川淇園の筆に(産論
翼は柴栗山の筆なりと)片倉鶴陵の産科は
多く亀田鵬斎と錦城先生の添削に出づる
こ

芝安中南紀の善菴道慶の吟能旅稿中の
則詩人の所謂先獲其心ことあり今左に録す
云ふ 萬葉集和名鈔並用漢字而不用倭字

蓋古之人多識漢字而不識倭字至乎東継
復亦有、空海造以呂波以便童蒙、是故後
人通用不識漢字殆如盲聾今則結縄上
世乎不可笑、至醫亦然翠竹道三撰済民記
等用倭字欲使蒙昧知治療、可謂其志懇
矣、然由是世人用其易解者、不讀醫経
河多為唖聾亦一の措也 また山脇浴園先生
読ま、道称門左衛門少年の時放縦なるを
以て兄弟不睦ならしめて往来もさせざりしに齢
や、積りて其行格実に卑しかりしが、ハ其弟子本
一挫子これと和しもしを 一把の云ひしの語
才を以て心を無益の詭劇綿続と費へすと云

惜む哉げんざいその精神を醫術に施し玉はゞ
許多の用をなさんことあらしかバ此校の答
は書きまじ事と先へきこととあり第明て通玉
の講解を聞んとす其の心得ぬことどもこ哉
ま此ゆる方ハ後世庸醫輩の講解の文
を讀て医の容易なる為へき事と思ひて軽々
精く此の問をす浅薄の術を以て人の生
命を誤ることあるまるゝらんかといくりし一
抱深く其言は感涙して其時方は素靈
の講解を排し半ハ稀を読んとする其人
ましく薬を擱ひる益此校の卓見ハ美益(?)
の言と今しも識て後世の亀鑑となす

べきこと
狩谷棭斎の云古昔ハ湯藥のことを称すること
あり建保七年源顕(?)基入道の著せる續古事
談ま出れ後朱雀院かさをやみ給ける其
藥頭相成よろしく成給くりなとむへき
よし申けるを雅忠いまさとわかゝりけるが只
おてまつりて、この御瘡いつなとむへしと
みへすと申けりと云ハ古事是なり又棭斎の説
せる出る年前の古文書ゆ被止ぬとあるも
湯藥のことなる其古文書ハ今余の
知れ修(?)しぬ、
原雲庵ハ六七十年前ゝ都なる行ぬし醫

なりし河恩ありしといふ寄りて中橋速一斎の
書の序を診して交て其文を兼用せよと
云へり其揚て其序を聞かれ河の婦の序、
然るを遂てなるを得ず如何す陽首藍翁
なるべしと云しかハ其屋脇して薬をたふ
因て處療して書の序も薬せましてさ金と
りとぞ

銭の穴中へ入りたるを挽出すに挽けハ力
を極むれとも出ることなし尾をおりかへし
挽けバ易らすに出ることなり仍て帰人陰
中へ入りたるもかくなして可なりんと云し人あ
りき

◯活字を組立まて書を為りまその便利をいふに
古来ありしも其の難きをいふものあまたあり佛と聖語述（活字の本斎に掲けたりもの）を獲て、布字を指し
な元冲の序を讀むに始めて布字の難をいふ
左に其の全文を録す

布字聖語述序

校書之難、古人比之拾秋葉。是謂著之
之不容易、非校讎成書者之言也。校書

姑置焉、布字之雅、余以爲猶樹秀綵春
華也、一針誤穿、華不成形、一字訛印、
書不可讀、況字皆左字、行盡左行、世尋
常書亦自力工夫大不相同、而其便猶園
丁掃寒林也、一字常立淨、若能布了一
板二百七十餘字、百千立印、且庶乎
無訛傳、眷弟重光喪妃新除、草草
之際未暇校刻先書也、冲也刀圭餘閑
敢越樽俎、爲代布字以告世、折傷之
恐敢有二事、

時

弘化四年十月哉望

種豆（拉希）醫 元冲 謹識

一 聖語述　一冊

此書伊藤東涯の著すところにて數志
敷ハ珍らしからされど、此書ハ錦
城王府の活字を以つて刷行のもの
也、弘化丁未十月東厓の玄孫伊
藤重光の跋と撰されし兄の元冲
（種豆醫）錦城大王の教旨を
奉し活字の工を督するの協力
此書数部を印して同好に贈ると
あり、而して巻首に元冲の序を
收む、此の活字ハ勅版活字に酷似
するものあり、或ハ錦王府に蔵せる
の古活字存在し、之れを以て之れ
を刷行したるか、極めて珍本とす

日本紙の特長と優雅とが頗る的『テースト』に富むでゐるものは鳥の子紙と奉書紙であらう。しかも印刷應用に適する點になると奉書紙の方が勝目がある、然れども堅牢無比耐力が羊皮紙に亞ぐと云ふ方になると鳥の子紙に一籌を輸せざるを得ぬ事にもなる、それは兎にも角にも用法に於ける得失であつて趣味と實益とから見れば優劣はないのである。茲に最も憂ふべき事は近時其の原料の三椏及楮の産額が土佐其他の産地に於て次第に減少する事である、今にして之が奬勵法を講究せずとならば終には趣味があつても實益が之に伴はなくなつてくるのを我輩は、いたくなげかはしく感ずるのである。

沿革　奉書紙は檀紙の一種である、其の紙の名の因て起つたのは、室町時代に於て將軍の命令を奉じて奉行人より下したる文書を奉書と稱した、此の紙を德川時代の奉書用紙に採用したから奉書紙と命名された事は何等の疑ひはない。

德川將軍から朝廷に奉る文書若くは諸侯に下す親書即ち御墨付と稱する自署あるもの及黑印を押捺した重要なる文書には依然舊例によつて皺の入つた檀紙を使用したが其他の公文書たる立文、折紙、半切の類に至る重なる書簡には渾て此の奉書紙に限られる様になつて來た、就中女房奉書の類から奥向一切の書信には皆此の奉書紙を使用する所となつて來て、元和偃武此の方は奉書の需用が一層盛大となつて其の紙の製造元であつた越前の五箇の庄には、幕府からして五軒の御紙家と唱ふる漉元管理人を命した、即ち之が造紙庄屋であるから五箇の庄と稱した譯で庄園の名から來たものではないらしい、それが寛永年間になると御紙家五人衆は任官受領が行はれ、三田村豐前大椽、同筑前大椽、加藤河內大椽、清水山城大椽、小林丹後大椽となり、江戸城下に役屋敷を給せられ、世襲して維新に至るまで幕府に於ける奉書紙の御用を一手に引受所理したものであつた。其の奉書紙の東海道運搬には大勢力を振つたもので其の荷宰領の如きは沿道の問屋宿役人から歡待を受けて只管に無事傳遞を祈つたといふ事である、我輩は宇治の御茶壺御用、備後の御疊表御用荷物が道中に於て人間以上の尊敬を受けた話は傳聞ゐるが奉書紙が、かばかりの勢力を振つてゐたといふ事は、左の書類によつて、紙の荷物に迄當宿御立遊ばせられとあるに始めて承知したのである。

《德川幕府御用奉書道中通行符文書》

（三田村富治郎氏藏）

（挿入せる寫眞版）原書の文言左の如し

急度申遣候

御用紙御荷物七駄今月九日當宿御立被爲遊候如例道中人馬遲々不仕其用意可有之候御急用ニ付晝夜御通被爲遊候條少茂油斷御座有間敷候此配符武州品川迄無滯可被相通者也

卯十月六日　越州府中問屋　平澤新三郎㊞

東海道

宿々問屋中

因に此の文書の所藏者は曩に本誌で既に紹介せら我樂他宗寶船の本山船舶寺の住職三田村氏其人

で君は五箇庄の御紙家三田村筑前大椽の後裔であつて、今では趣味の紙商として努力の人である。

奉書半切 小文即ち鳥の子、杉原紙などに書た折紙も奉書紙を半分に切つた今の巻紙式のものが段々と行はるゝ様になつて來て、それに木版色刷で以て繪模様を刷込んだものが行はれて來た、是れは物語、紀行文、和歌詠草乃至は連歌等の巻物に、地紙に繪かいたものより脫化し始たものであるかに考察されるのである。其の故は詠草類に此の繪半切を使用したものが、手簡の繪半切より早くある様だ、それが化政時代になると支那の詩箋の様なものが加味されて手簡專用の繪半切が發達した、隨つて文宮用のものばかりでなく、量の輕い雁皮紙の樣な薄い紙の色半切と繪半切なども出來て來た彼の幕末の偉人佐久間象山などは、手簡は後世に遺されるものであつて等閑に筆記すべきものでないとの見識からして其の文章に意を用ふるばかりでなく、用紙も亦小奉書半切の外は使はなかつたと云ふてゐる。

此項も切抜物としてかき直すことは宗のら子存れ

○むかし男色が流行して野郎が珍重されし頃より其の反映をも見るべき絵画が多く世に出た、即ち浮世絵である。美少年の主人公は配するに荒くれ隷僕奴を配した画なども錦絵や絵本にもおびただしく出た、これは美と醜と繊と剛と白と黒との對照から一種の諧を為すもの絵画が有いことと単純に解しては困る。いくぶんかは封建的社会の實寫でもある、荒くれ奴と云ふ一種の人物があつて荒[illegible]嚴の隷使に任じたのも事實である、志のしかんでもあつてはまた實を男色流行の反映で、男色をそそる以色でもあつたのである、五條の橋の上は美少年の牛若丸があらくれ偉大の弁慶坊頭と戦つてみる圖なども、矢張り男色をそそる上から

此以下
除ん
記隠

ユスへされし構図であるも云ふまでもないが、これが終に後世まで一種の型を為すに至つた程、此図の歓迎されたのは此が全体男色も男女の関係のごとく能動者と受動者とハきつて極めて交であるから、能動者の飽くまで進撃的で威迫的であらねばならぬ、其の相貌ハ必ずしも美なるを要せぬ、否な寧ろ美に遠ざかる程醜格に大きく骨がごつごつしく、毛が黒くて粗硬が多く、皮膚が赤銅の如くで四肢なり腰部まで一面に毛のある様な恐ろしげなるが、寧ろ受動者が情人として喜こぶ所のものである、勿論年齢も受動者よりも遥かに超てなければならぬ、畢竟受動者は相手が自分に比して種々の點で隔絶すればする程、それと女性的態度

を感ずる、其女性に近い程に感ずる所に、受動者の満足があるのである、凡そ男色の對手なる受動者ハ本来女性的傾向のあるものである、其の容姿が優しく其の肌膚が白く、眉目が秀でゝ、所謂美少年であることが必須の条件であるが、女性的傾向を意味するものである、畢竟さうして同性の愛を受くることになるのだが、それが情交を累ねるに随つてますます女性的傾向を濃厚にするのみ、自分ハ男性であるのに女性の代用をつとめるからである、此の不自然なる交接は受動者に苦痛のみを與へる残虐の行為と見做すものもあるが、実際を知らぬものである、昔し上野の東叡山全盛時代僧侶が男色にうき身をやつしたは、其頃上野に大悦と云ふ茶屋の行はれたのであるが

性の交接は二人喜ぶから天悦であるのは又しも、之は二人喜ぶのを大悦と云ふ。ナゾもどきの隠語が行はれて居た、然るには男色は（一人悦ぶのを）ぎぬこともあるを云ふ、決してさうではなく、受動者も亦窮る快感を与へられて天悦を感ずるものは両性間の本質であると云はれてゐる、勿論受動者が快感を覚ゆるまでには多少の径路があるのもある、進んで女性的即ちエフイミニヨンが或る程度まで進めば、受動者の心理作用が女性に近くなるので、心理的に攻動者の相手を喜こび、又性理的にも交接に快感を生ずるまでになる、個頬なる受動的男子は進んで男性の特徴を失ひ、髭鬚が薄くなり終には無くなる、且肌膚も軟弱の如く全く無毛となる、そして女子のごとく色白く滑らかにキメ流

かゝる事あるなり。
努音が愛して物色の到を缺き、挙止
の静かならず、物に恥らひて面を赤らめる抔の事が婦人
に媚を呈しなどして秋波を送りなどし、嫉妬を生じなどすること
のあるが、甚しきに至りては同性の交接を請ひ、酒色を嗜み放射すること
行ふ者あり、女性にて男性に等しき多くの場合、性慾の念を起さ
ず、亦交接不能となる例もあるなり。如斯きの女子を
捨する例は極めて多く、且つ我が旧時の野郎にて多かりしの如く
まじきものなるが、日本にて飾り極端なる例は多からず、流
れに西洋に男色の本場丈ありても、女人の相想像を寒し切
り、女性的傾向を有する一種の病人と見るべきものゝ類
なる多いと少く、薬等を男子にして女装をなし、男子
◎同性に愛せらるゝを本願とし、◎一生異性の交わらず

○自今以前年水に関する種々のことを二百則書いたことのあるが、ぬなことゝなる外の滋味を識し簡潔と書いて見るも容易に百則を得れ、更に又百則の續篇を識して以て時々ゆるしく取調べても見、種々の図書をも漁つたが、而して終に医術上のことのみに及んでゐるところでが、実に水療法まで及ぶべきであつた、近年の西洋医家は醫術に氷塊を用ゆることに常套で、解熱の用として缺く可らざるものと為し、素人でも聊かの病理を知るものは我医者の来る前に氷をもつて手当を為す位行はれてゐるが、これは強ち西洋醫家の獨創とも云ふでもない、日本の古方にある療法と云ふがあつたが、それらは具体的に傳はらないのを惜しいきれと云はれてゐる、其の出来た古方も支那傳来であるか、日本特色のものであるか委しくは知れぬがいづれ支那にも古くからある此の療法のあることを推

うなハ、唯此支那の治法が多く日本に傳はつて、其れが日本の研究で大成したものもや、支那に亡びて日本にのみ傳はるものもある、日本の醫術も大變遷して、外國の感化が保存を要するものまでも掃き去つたなれども、かなり有るが、我療法の今日具體的に傳はらないのもと思ふし、或る變遷を經て棄つたのでもあるまいか、但し古書に散見する我療法の斷片的遺法を記したのも少くない、亦昔しから今日まで手足をも實に行はれてゐる我療法の治法も絶ちかないとは言へぬ、應急の手當に額を冷したり、又は頭部へ注いだり或は頭部を冷したりすることなどは西洋醫術の行はれない前から行はれてゐる、腦病の患者が瀧の直下の下に立ち頭部を打たせるなどは古くから行はれてゐて效驗があると云はれてゐる、勿論宗教的觀念なども幾分の手傳つてもゐるだらうけれども、理窟にも合した療法である、平淸盛が熱を病みて冷水の浴溝に全身を濡したことなどは歴史に著れた事實であるが、これも古代的の醫家の施した我療法と見らるべきものである、熱病患者が偶然の過失から水槽に陥り渾身を冷やした爲めに却つて平癒を得た例なども少くないのである、漢醫の說では冷却も極度に達すると反動作用で熱を生ずると云ふてゐる、又體溫を維持するためにそれに相應する藥劑を投して、我療

を施す時に冷静の心を以て患者の洞察することなく
病患は愈るものと云ふてゐる、何れも療法を施すとする試
ては体質の強弱や病患の深浅などを査察して
適薬を得ねばならぬのである、又施薬
の他の手当をするも言ふまでもなからう、必ず
ある時代に此等の研究も充分に届き実多く成
書もあつたものであらうが、今は唯断片的に
諸書に散見するのみで之れを窺ふの外は
ないが、維新後富田昌春といふ漢医が支那日本
の古医書を渉猟し、およそ療法に関すること
を見るに随ひ輯めて明治十二年「療志」と名づ
けて出版したのがある、五十巻もある経篇
のものであるから、不充分のものであるが、然れども古
来療法といふものの形式で行はれ、それの效を奏
してゐる片影が窺はれる、而してこれも療法を
洋医の為す前に早く行はれてゐたことが歴然と
してゐる、更らに努力して此の療志に大増補を加
へる人が出たならば、標試に帰した古法が後に流し
洋家を後く瞠若たらしめるものも出て見さうな
であらう、但し療志を読む所感を録す（七月
二日朝日新聞に掲ぐ）四巻の點漏を少きくし
録す

○前にお水奉の法を言ひしが、之れに就て思ひ起すのは或る時節に奈良の二月堂に行はるゝお水取の神事である。これは天平頃から少しも絶へ間なく今も尚行はれてゐる。此神事(佛事)は複雑の儀式にて頗る嚴格のものだと聞くが其の修法に依ると、或る地點の水を堂の縁下に伏せある甕に汲み込むのである。これが所謂るお水取と云ふので、此のお水取の日は何時も天氣が寒冷で、其の寒冷のはげしさはお水の日であることのよき證である。大坂や京都なども其の天候をお水と云ふてゐる。此のお水に病を醫するの效能ありと云はれ、之れを酌つけるとて群衆が二月堂の境内に充填して雜沓を極めると云ふ。

さて此の水取なるものは單に迷信であるか、或る時代のお水祭遁法を神佛のことゝして、コンナ行事が始まつたのか、之れを詳にすることは出來ないが、此二月堂のお水ひとつでなく、猶ほ神佛にあつたか治病のお水があるが、(皆迷信である)と云へば之れまでゞあるが、古代にお水祭法が行はれ、お水を病患を醫するに効ありとせられし、其の事を思ひ合すと、何等か之れに就附因縁のあるらしく思はれる、且らく記して後攷に俟つ

七月四日記

本文お水の水は何れから來るかと云ふに二月堂の附近に古井あり、之れより汲用の水にて、其日

修法の上新を取りたる後に小庭に瘞して他に用ゐることなしといふ、

○坊守に図書を請ひたる古き帳面一冊を得たり、表書に

乙文化十二年

西御丸
御鷹野 諸御用様并七類納割合覚帳

亥正月より
品川領上大崎村

即ち将軍家飼養の鷹に供する食料徴発ニ付右割合覚帳の原本なり、

初めニ三月廿六日ニ書留左の如し

三月廿六日
一 蠶出二千七百九十九疋　外百廿一疋　桐ケ谷村ゟ後台

同六日
一 同 千四百十二疋　外千四百三十八疋　下大崎村ゟ

一 同 六百廿八疋

惣合 四千七百六十九疋

高三百九十七石四斗四升二合五勺

高壱石ニ付　凡十二疋

高ニ割当計算すること左の如し　次ニ内譯あり採集人の名と数を録す

次ニ蚯蚓採集の見出あり

四月廿六日納
一 蚯蚓八百五十六筋

一 同日ましの分 二百六筋

同廿九日朝
一 同 千百八十四筋

同日まし分
一 同 弐百六筋

〆 弐千四百三十四筋

一 同七百四十四筋　右の納方九日手前ニ而受

〆 三千百七十九疋

高三百九十七石四斗四升二合五勺 刻

高一石ニ付　蚯蚓八疋ツヽ

こんなも内評あれと思召す
此お標茶の部ありよもきしとえこべしと云
外に杉の茶の勘定もあり、此记録應々の綱
料に関する丈興味ある、為も徳川家の者と
なりてハなまなく厄介なりしこと、これまた一班
を窺ふことを得ん

四月廿日记

一 丸之國の文野を市都をゆくとおよそ乗
ゆくゆく、日本の首府東京ぴもみしく溯つて乗り

物に馬と駕籠であつた時を考へて見るとどう
であつたらう、徳川時代封建の末路まで四民の階
級のやかましく、乗馬に鞭ち駕籠に乗るのハ
大名や士分であつて、大名の通行とあれバ叱唱の声
う途上に充ちれ、低い階級のものハ之れを避ける
に右往左往の狼狽をやつて子小児を泣き叫ん
此往のハ見るも流石におかしくもある人力車なるハ
う出来てから階級制度を漸やく破れ是に[illegible]
此叱唱の声ハ絶へ車上人の[illegible]
車夫の掛声ハ市中に満ちれ東西に馳せ違ふ
来田つて乗客の声いろいろの吹
聴も人語も市上に喧囂を極めれ、别して

若し是れらの掛聲も喧囂日一段の喧噪を加
へ、之が今も電車が縦横びに自動車公衆自動車か
と皆これに乘り、富豪大臣も自動車に乘り、
重量ある貨物も多くは自動車で運ばれるに至るの
であれば、人語は殆んど市上に絶へ、掛聲勿論なし
市中に一種の市聲がある、それもそろそろ騷々し
くなるが、市聲の種類が變つて来て、前は人語で
市聲であつたが、それは電氣や機械の聲が市
聲に代わつたのだ、乃ち文野國市聲でおよそ
トせらることといふのも此一例であるのである
つて支那の北京に旅した時に著しく市聲の喧囂
を感じた、北京の市中ほど喧騒の處は恐らく世界に

あるまい、各種の車の輪轆する、街上に掛聲の音聲
を出する、車夫などの叱咤する、掛聲を
太鼓や銅鑼を鳴らして、路に行き交ふ幾萬の人
の混雜する名状の外にあるが、およそ北京の市
聲ほど複雜のものはない、乃ちそれだけまだ文化に
遠いのであるが、まだし織聲も市
聲の代はるまでには可なりの年數を要するであらう

○前の修善寺湯治の折無聊を慰さんといろ〳〵思ひ
出すまゝに書きつけたるものゝ前にあり、其の折書かんと
して終に時間の足らざりしために残る一件あり、今
閑を得たれバこゝに書きつけて補遺とする、それと
云ふハ其の昔しと変りて甚だ複雑なる
意味の存する場所となりたることなり、昔し湯治場と
云へバ第一に養痾を目的としたるものなれ、或ハ山水の癖
あるものなどが訪ふなり、普通の遊旅に結ぶなら
ハ温泉場なとゝ迄しく騒路を離れたるところへ足を
枉げて泊りなどすることもありしが、養痾の為めの外ハ
無かりしことゝ云ふまでもなく、温泉場ハ種々のものが
入り込んでおり、男女ニ雑居してみる聞くに好ならぬ

人が起りたりしことゝて今も昔しも敢て変りハなし、温泉
場の昔しハ小説家の得意の場に材料を与
へしことも三馬や一九や京山などの著しれ戯作
を見ても知らる、此場所に云ふの人と絶え(?)て
つなり、思ひこみても面白き奇遇に邂逅しなどする
様なことも場所柄ありうちで、倶楽部的の意味
なども起る、此場所を称してゐるのも遠いことでハない、
し昔しの温泉場ハ多くハ辺僻の地にありて、
交通が容易でなかりしが、ノツピキならぬ場合でも
なければ遠くまで行くことも無かりし、即ち養痾と
云ふが主で、今よりも温泉の効験を過大に信ぜられ
しものである、而して温泉附近のものを養痾

の為めでなく遊びに行つては相違ないが自分なども学生時代に彼処あたり遊歴中松本の知れる温泉を訪問したしれぬがその時に[redacted]附近の浅間の温泉[redacted]へ立ち寄つて案内されたことがある。コンナ意味に於て言ふと温泉場には旅館もあり料理屋もあり遊び場もある、併し何んと言ふても単純のものであつた。然るに今の様に交通も充分ひらけ、温泉場と云へばどんな所でも便利労することなく行け、行けば相当の設備もあり、大抵の贅沢も出来る様に開けて来ては、養病の主なる目的ではなくなり、いろいろ新しい目的も当然加つて来る。寒候の避寒、暑中の避暑と云ふて行く、此等は養病の範囲内であることと云へるが此等も其の内容を解剖すると保養療病の為めでなく、人を避ける又は人と知り合ふ為との種々雑多の意味があつて決して昔しの様な単純なものでない。自分は九州の別府に二三度浴したことのある。あそこは日本に於て大連あたりの植民地に連絡もあり、西洋とも連絡があつて、内地に来るものはまづ先つここに足を留めて疲労を慰するのである。中な地形を占めて居る。其の丘にある所と此温泉場は国際一種の港とも云ふ所のものであつて発展するのも当然である。自分も此地の滞在中はいろいろ思を馳せて、此地にある浴客などコンナものではあるまいかと考へたことがある。辛我として見れば皆な

ノンキなことので飲食贅澤三昧に日を暮して
金の使ひ方に窮してゐる様なのもある。併し又
と成功者成金連などが主に眼に映ずるのことで、
で、こうした失敗者も破産者も皆な集つてゐるに
相違ない。或は身を遁すべく或は挽回の策を
盡すべく、人知れず苦心し呻吟してゐるものもここ
ある譯である。而して世界を股にかけた大詐欺師
や泥棒も居るであらう。國事探偵やロツこもの
ヌセなつの女流なども居るであらう。表面はさあらぬ
様子を見へても、此土地などは秘密を包藏する多くの人間
の集まる所とさへ思へば何となく危險不安の
氣も起る様であつたが、自分の此の觀察は想像で

なく、今の温泉場就中別府の様な要衝の地など
は温泉場の浴客中へ入込み複雑なものである。西洋で
も探偵の入り込む所も温泉場だと云ふが、日本も今は
さうに近くなつてゐる。此頃小説家が材料に
窮すると筆を載せて、温泉場へくと出かけて、何等の
の種を攫む。是迄こしは秘密があることである。秘
密があると云ふからも秘密が掘り得られること
であらう、小説家の云ふことを必ずしも當てに
ならずとも、温泉場は得難き材料と云はねばならぬ
と人の欲つく譯もない。温泉場が探偵の活動の舞
臺の極さい場所である。これが大抵小説家が
探偵小説を書く時に舞臺を温泉場に擇ぶるの

[redacted]此故であるから、温泉場は遊廓の鏡であつて浴客の暗黒面を暴露しながら、もはや人三化七であらう、これが進に温泉の開け往けば往く程、罪悪の巣窟となる傾向がある、これを昔しの單純な温泉場と比較したら実に驚くべき差があるの[redacted]と云はねばならぬ。男女の関係は殆ど西洋風となり、婦人の貞操が自動而非動的となり、自由結婚は追々行はれ、芸娼妓の如き女優なんと云ふものが出来、それ等の舞台となるものは悉く温泉場であるとすれば、単なる丈夫な温泉場などは昔の風化の注意場でもあつて、昔しと天壌雲泥の相違のあることであらう、

八月廿四日録

昔しの湯治場は糧を齎らし比住者であつて随分不自由なことを忍ばねばならなかつた[redacted]が、それが今の如きは贅沢になつて何不足もない[redacted]安楽になつた、旅宿も解説の旅館となり、進んでは三流になつて或は意味で松れた料理屋を営業し、芸者も来る、化け物も来る、自動車がある、あるいは電話も通ずる、金満来で大抵のことが出来る、然し此れ病なきものも家族をつれて温泉園楽を楽しみ、新婚旅行者も此処を選び、風流家は当に吟哦を説き、芸割に[illegible]旅に休憩をするとなる、病者の一泊するものもここに

廃頽をきたする、湯治場の繁華をきたすについての
設備を華美の方面に極むるが、目下の方面
本温泉場を見ると、こゝの贅を衒ふ客
である、身分不相応の散財三昧で、遊蕩
濫費財産を破ることもある、良家の
婦人が節操を破ると云ふことも起る、今まで
誘惑の地であるから、媾引の場所もここで
ある、罪悪の通難所もここである、詐偽犯罪
の策源地ともなる、何んの稼業もない技
術のごときものも、其の実恐るべき稼業の
伏在する所である、将凡の人、依然の人が好
んで云ふ處もある、全く交通の自在の

為め近くカフエーや寡婦の家や破倫の友人
の宿やら待合が連絡せずに却つて隠れたる
温泉場に連絡してゐる、温泉場の沿革を考
へて見ると僅かに五十年ならずして実に
驚くべき程の変遷である、犯罪ばかりか西洋
風になる、其の表はいつも女が居り、其の女の
傾向は盛んに西洋風になりつゝある側に温泉
場もますます開けゆくことを考へると、今後五
十年の後にはドンナに変化するであらうか、実
に寒心に堪へぬほどのものがあるが、研究の
初年に過ぎぬのであるから温泉の一囲論を唱
へるのであるが、其れが事実に現はれてくる

一　此温泉場でハ、會心のことに朝夕少く梵鐘の
四声ではあつたれ、撞き出す鐘声が銘々によつて
耳に徹するのハ散歩の際に距離を計つ
てみると、寺（修禅寺）ハ旅宿の隣家で、鐘
楼が殊に宿に接近したれバこそ裏口から出て見
ると十歩たらずで直ぐ鐘楼に達する、ここ
まで近くても鐘声と絶縁してゐるも同様だれ
と感じたれ、鐘声ハ近よりては遠く
聴く方が趣があると志りて終日佇み思いて
晩鐘をきくと響音の烈しい丈に情気を
一掃するの概がある、朝の五時頃に撞き出
す鐘ハどうしても寝ては居られぬ、この
禅刹では四時半に読経をやるのが例だと
云ふから鐘もその折りに撞くと見へる、近所
いる撞くのを見出て見ると、有髪の若いのが
撞いてゐる、鐘楼の一隅に椅子が一脚備

さい、此寺の開山として迎へてゐる臨濟の名僧蘭溪禪師といふ宋から渡つて来て此道の景色が本邦の廬山に似てゐるとこの寺を背廬山、前溪に架した橋を虎溪と呼んだと伝へてゐるが此鐘をきく毎に故郷を憶ひ出したであらう、名僧寧一山も一たびはこゝに住した、自分は鐘の音をきくごとに此の僧を聯想する自分は此僧を畏敬するのであるが、此地に謫せられた源家の二代頼家も朝夕此鐘をきいて如何に感じたであらう、栄枯盛衰は物の常理とは云ひ、彼の如き逆境悲運の命を臨濟の教によつて

へてある、一ツ撞いて次ぎに撞くまでに此男はなにか雑誌などを讀んでゐるのを認めた、今は真面目に僧が勤の一つとして撞かぬと見へる、此鐘は何年頃鑄造したものか、ツイ銘などを検せずに来たが、幾度も回禄の災に罹つてゐるらしい、鎌倉時代の鐘ではなからう、一見した所ではそれほどの古さも認めない、尤も一音響で判ずるとなかなかよい鐘である、此の鐘銘をよく見ると種々史的聯想を禁じ得ないのであつた、此鐘は縦令鎌倉時代のものでないとしてもその時分から同じ場所に鐘があつたとすれば相

果して慰めることとの出来たのであらうか、改
子も流れはその長子の悲運を閑却しつゝ尚て
徹行して此湯村を忘れく沈めれとそのが
朝夕の鐘をきいてドウ感じられたであらう
いくら実家本位の北尾氏も一身の罪業の深きを
思ひ戦栗を禁し得無かつたであらう、星
霜も幾百回代謝したも鐘の聲は絶へなく
自分の修禅寺も焼けて幾度も換枝の一つの八
り、八家も変遷して居る、樹木なども亦や
四時のまゝであつた、唯此鐘だけは縦令ひ其
輪は四時のまゝであつたしても朝夕撞くこと
八五歳年（本来）変りがない、自分の今聴
く聲を菅原院や一山や頼家や政子につたえたれ
声である、それを鐘聲を聴くごとに、昔し
鐘聲を聴いた此種々の人を思ひ出さずには
居られない、其の人を思ひ出すと其人の境
遇や其の人の性格なども共に追憶することを
禁じ得ない、此土地に昔しと謂はぬその
寺前にある一帯の渓流がある、鐘聲を
耳にして落ちて流れて行く、五百年
前の鐘聲を聴いたその北の渓流の外は
ないのだ、刻まれて今は
唯此悲緒を紀せるの外は無いのだ、岡本綺堂
（続く）
大正十二年八月十六日 修禅寺

○我等人間の本能である淫慾淫行」……性慾其に其行動
ミを抱きて蔽ふのを以つて文化の式としてゐるが性慾崇
拝が世界の宗教であつた時のことを思ふと世の中も妙
なる事であつた、上つハベの衣を隠すことを常となつたことを思
へば、うはべをよくするのが文化だと云ふから、偽善も公

けな歓迎を受け、芸術の世界となつてゐるのも不
思議な事で、志うし本能を隠さむとするから、性慾崇拝
の盛んな事し時代の事が段々変つて末世に迄及んでゐること
を段階コンシデレーションに入れて議論するかもしれぬ、
今日より其の必要がある、況んや今も西洋学者の研
究前の書物を見る時などは、一概に其の時代人物が欲得
が無いといふ、淫風が甚だしかつたなど、末世の事の様な
単純な解釈をしてすましてゐると正鵠を得ること
となる、西洋でも近頃性慾学が研究されてヤット本当の
解を得れので、それまでは矢張り古代の物を淫行の記事
の多いのを以て只曲解して粉飾しれたのであるから、
ヘブリユーの聖書などを尊く尊ます、教育として

付出しならドンナ物でもあらうが、今日之を見れば研究家
が思ふならば、之れならば霞ヶ関と性交のみなるが如くあつては、夫
者をこれからでも今あらいはまでもつとも謹さんであるものか
何等れ多章るまる、多と粉飾され聖石され息子が看
勝されてゐるが、之れども聖書かるいとして於るとして見
ば、すなはち春画の詞書を見る様なものだ。ソロモンの雅
歌なども婚姻の歌なれば又千首もある夫婦閨房の
のおのろけで、之れには多くの聖書学者も困り入つたので
ある、勿論取捨もあるであらう、之れは若者が康を得て
花を見る様な陽気の感じがあつても、之れは神聖の
又理座附けしてのるけれど、風俗壊乱として擯斥
滅ぼし、聞の位なものであるが、日本では古事記などの猥褻の

事が多い、之れら上代の記録を飾り物としてみぬので、姿をとつて
書なる、朝や夜の房事なども、所謂性慾の正しいことの
書なれどもみえる、之れら上代経に書かれてゐるが、今に解しうる
雅経に書かれたりしてゐるから、自ら之を見るが実を与へて役
ご目であるが、志かしこれも文明といふ衣布が覆絶されて
後のものが何にもみるのであるけれど、之れと云ひ乍ら文書にドンナ
露骨なものがあつたとしても、それはそのものであるが、ここに文書記録ではない
ものが、赤裸々な閨房の秘密を得ずとも、神を祭るの形式となつ
つてゐるものでありながら、露骨なものがある。後世之れを
見ると一概に神祠淫祠などと嘲笑して不浄蒙昧
の徒の迷信の如くしてゐる、上代の思想に接してゐ
るものは勤めて後世の考を以つて之を行くと附会の解釈

とつけてあるが、実ニ性殖器崇拝の紀念物で、それらから

ほかにも鮮明に存して居たと解するものもあるが、おゝし

な理窟をつけても其意を遂げんとする方が野蛮である。それと

言義を読む上の心得である。固より学者の者でもサバケた奴を

性の崇拝の理窟の無いものは、事実を事実として

猥ニ曲論し[illegible]たものがある。それ等ハ話する程である、

○性殖器崇[illegible]の起原ハ古く世界何れの民族も行はれ

た善悪両方面[illegible]今の我国ニある宗教ニ存する変体である

ハ其ハ住居のあるのもある、形之ハ色々変つて居るが崇拝

せる男女両神を現して居るので近世でも其しるしをつくり物

がいろいろある。処女を神に人身御供としたことなどは迷ひの

らぬ事しかあつても、ユニオン説を読んだ物にいろいろあつたに

といふ説もあつてゐる、それも生殖器崇拝から来たのでは蓋し

いろ実である。上古ニ処女ハ神ニ捧げ初めて生殖作用を

教へることもあつたが、神前ニ鉄の棒で処女膜を破る

式もあつたそうだ、先づ神ニ才一番を捧げてから結婚も

出来ることにしてある。それの為めニ処女の神聖の

ものとされも[illegible]馬鹿な法律ハ処女を尊重することの

出来るの[illegible]する時まで、何れの女の貞操を瀆

して初めて刑を加へたと云ふ住民もあつた。神を云ふても実

ならず実需でないこと、儀任の神の代理であつた坊主

など淫行を敢へのよいことの無つたのである。或る寺院ニて

多くの謝金を取つて公然貴族を行ひ、其の金を神に捧

げ且つ寺を維持する為め浄清の資としたこともある。本能

寺の坊さんが、釈迦牟尼佛とも云はれて三流の画家の婦女菩薩
あちらでもこちらでもお伽をすることを光栄として居た
近代まであつたことだが、これを淫乱と云へば淫乱で端ない自然の
こと、云へば実に其の通りでもあるが、生殖崇拝の上から
の遺風だと思へば強ち怪むべきでもない、唯然し文化の
殺布に操がれてゐるので、それが操のないから問題となる
のである。風化上のことは兎も角として性典崇拝の紀元を
すこしく生々しくも存在してゐることを云ふのである。
一休和尚が言ふと處女陰の事を露骨に口にし釈迦も
孔子もヒヨイと出るなど云ふたと伝へるが、あの僧な
どは性典崇拝の歴史をチト知つてゐたらしい
○岩のうは目ざす杖の竹節穴でも、穴さへ云へば女の生殖
器を連想するが人情で、之れを口にすれば甚だ不気味の如
らしく見ゆるその淫乱よりも妄想だと云ふを識るがよい
のしてコンナものを神聖として崇め且つ拝したので
ある。無花果や柘榴の三割して中に毛の実を女
らしいものを、陰器のごとく聯想するものも今もあるが
生殖器に擬して勿論これを崇拝の的としたのであ
ある。其形の男器に似てゐるものであるが、頗る多子で
あるから、崇拝の的となるも無理はない。若し之れを崇
拝の的としたらそれも形似から来てゐる、即ち其形の陰
器に似てゐる、其の勃起の状態が頗る似てゐるか
らである、若者も人情に変りがない、変らない人情と変
らない性典の根本となつてゐるから生殖崇拝教
も没合ひ其の形式を変へても人間の存在する限り何様
なるのである
一月三日稿記す

○古へハ川柳ニ「まさくらを貴く見たる俳偕師」と
あり、俳偕師の湯具、陰器の帳、奥まて人間を
通り出す不思儀のことあり、此ことあつ娃題談紀ニ
大勢力ある事承あり、柳里恭か「十二面の咄まて

常を常ひかる廿一の夢まて覚えし其の間惚れし
太夫の下帯とつりかへまはしけし」とまて
告命しを深く秘しまつりし遊女の名をさき俳偕
招き寄せ人を集め其の度々の褌しうつし俳偕
師の褌しと云へり

○喫烟ニ伴ふ遊戯 昔しハさまさくあり中に輪を
吹き烟管をもて其の輪を貫ぬき得たるを喜ひ
としたるを誰か知るならん、柳里恭の独寝ニ
云く、むかしのひまに輪をいくつとなく吹き出す人あり、
又は針をもて、其の輪をうける人あり、初めひとつ
吹き出して其内をまた吹くやうに小さく輪をふく
人あり、或ハ又烟を外へ出さず悉く内へのみて、

雅俗相半錄（九）

市島春城

獄中の演劇

坪内逍遙博士は何人も知る如く劇の大家で、苟くも劇に關する事にして、博士の通ぜざる所は無い。私は戯れに博士に向つて、君ほど劇に關する該博なる知識を有して居る人は無い、併し監獄の中で劇を見たといふ者は、恐らく私位のものであらう、獄中の演劇に就ては、多分君と雖も不案内であらうと云つたら、それは全く知らぬと云はれた。勿論その筈で、全國に監獄は澤山あるが、斯樣の事を獄中で許すといふことがあらう道理も無い。自分は曾て筆禍の爲め獄中に囚はれの身となつたことがある。それは明治十八年頃と覺えるが、信州長野の監獄で新年を迎へることになつた。當時、此の監獄では正月三ヶ日の間、囚人に休暇を與ふることになつて居た。囚人に休暇を與ふると共に、それを見廻る看守、押丁にも休暇を與へるのであるが、監獄で考へたのは、一ヶ所に千人以上の囚人を集めることになると、何か遊戯を許さなければ色々の弊害があるので、其方便として三ヶ日の間、各自好む所の遊戯をしてもよいといふことになつた。是れは此の監獄にて二三年前から新年の慣例になつて居た事で、自分の入獄した時も、やはり前例に依り三ヶ日間それを許された。其間千餘の囚人を容れて置くのは、敎會堂といふ場所で、それは一週一回づゝ、全部の囚人を集めて、佛敎又は耶蘇敎の說敎を聞かせる所である。斯樣に一所に囚人を集めて置くと、看守、押丁もさう澤

ほゝくと咲花の庭の相きらんと一首詠みし
まいて綱を吹き出す人あり、とあり、皆其綱の
遊戯し
○柳里恭それこのことを云ふ序に綱多く文のうち
またきてよりき奉書の紙に入れ候ふ、總
などかまはて出き候奉書を用ゆるもあれども、其張
白きこのよしとあり、奉書は日本特有の紙にて其
の上品なる點に於ては天下無比なり、奉書の
囊なりき綱帯を入れるより、此紙に包むといふも
高雅の工夫なり、昔し遊里にて奉書紙に帳等
遊びを遊客にも贈りしこともあり、これもよき工
夫なり

山は要らぬ譯である。そこで遊戯として許すのは色々あつて、相撲等も催されたが、就中最も大仕掛なのは演劇である。長い間獄中に在るものは、前に例もあることだから、その三ヶ日を待ち構へて居るので、愈々其日が來ると、突嗟の間に舞臺が出來る。それは長野地方では物を運搬するに車の上へ箱を載せ、箱の上に土とか、石とかを積むのであるが、多數の囚人が、監獄内にある其等の箱を運び來つて、敎會堂の一端に適宜に積上げる、さうすると其處に忽ち舞臺樣のものが現出する。玆に驚くべきはいざ芝居を始めるとなると、演劇に必要なる種々の調度が、何處からとも知れず現はれて來ることである。第一には引幕の如きものも揭げられる。それから武士の着用する鎧、兜の類から、お姬樣の衣裳は勿論、町人、俠客、遊女などの着物がすべて出て來る。それが悉く紙で作られてあつて、それに赤、黃、綠等の彩色が施されて居る。女性に扮するものは、其等の衣裳を着けて、何等か白いもので顏を彩る。又赤い色にて顏に隈取をする者もある。勿論眞黑な顏に胡粉などを塗付けるのであるから、白い所は馬鹿に白くて、所々に黑い生地の現はれて居るなどいふ滑稽もある。鬘の如きも矢張り紙で作られてあつて、粗製ながら兎に角も格好丈けは相當に出來て居る。斯樣に何も彼も皆囚人たちが作るのであるが、たゞ出來ないのは三味線で、それは皮が無いから、作つて見やうが無い。それで止むを得ず口三味線で義太夫を語るのであるが、中には玄人、若くは玄人に近い者も居るから、相當に聞かれる。愈々藝が始まることになると、すべて芝居の作法に從つて、件の紙の幕を明けたり閉ぢたりする。さうして三日の間、間斷なく色々の役者が現はれて、色々の狂言を演ずるので、それも全部でなく、その一節づゝをやるのであるから、一日に何十番といふ多くの數に上る。忠臣藏の一節を演つたと思へば、忽ちにして太閤記に移り、又忽ちにしてお染久松に移るといふ譯で、殆んど應接に遑ない程であるが、そこに又滑稽の味もあり、登場する役者は、白でも科でも、全くの素人と思はせない位に演ずる所が、甚だ珍であつた。それは囚人のうちには、田舍廻りの役者なども居つて、其等の者が長牢の者に看守等の眼を偸んでは少しづゝ練習してやるのであるから、極めて千切れ〲ではあるがある程度迄型のやれるのも尤もの事である。たゞどうしても不思議に感ずるのは、色々の紙細工の衣裳類が、如何にして作られ、何處に隱して置かれるかといふことである。是等の品は隨分嵩張つたものであるが、監房内には寢具の外は一物たりとも持込むことを禁ぜられてあるから、勿論その中に隱されてある筈はない。又囚人が毎日仕事をする工場は驅役場と呼ばれて居るが、此處には色々の物がある譯だけれども、毎日囚人が引上げると、看守、押丁が場内を見廻つて、嚴重に檢閱をすることだから、斯樣な遊戯に關係あるものが一つでも見當れば八釜しい問題になる。彼等はどんな場合に其等の品を作り、又其の作つたものを如何に藏ひ込んで置くかといふことは監獄内でも疑問として居た。新年の三ヶ日に斯樣の遊戯を許すとはいふものゝ、其爲めに豫じめ其れに必要なるものを作るといふことは、決して許してをらぬ。然るに一旦遊戯が許されるとなると、續々是等の品が現はれて來るのは、何としても不思議といふより外は無い。恐らく彼等は土でも掘つて、それを埋藏して置くものであらうか。さうでも考へるより外に、考へて見やうがない。尙ほ此の芝居の間に滑稽を感ずるのは物賣りの出ること、役者に饅頭を與へること等である。物賣りといふのはもつそう飯を團子に丸めて黃粉をつけ、色々の名稱を附して、丁度今の活動寫眞で物を賣り步くやうの聲を發して、冗談半分に賣つて步くのであるが、面白いのは饅頭を與へることで、是は全く實物でやるのである。といふのは囚人は三ヶ月以上監獄に居ると其の九十日後は日に三錢許りづゝの錢を、自分の工賃の中から、通帳を以て使ふことを許されて居た。多くは之れにて副食物等を買ふのであるが、右の饅頭を與へるといふのは、卽ち其の權利を與へることであつて、たゞ空に花を與へる眞似をするので無い。

元來監獄内に於て、如何に方便とはいへ、斯樣の遊戯を許すといふことは、得失大に考ふべきことに相違無い。さういふ監獄學者のいふやうな事は、玆に語る迄も無いが、兎に角之を見ても、人間の藝術的本能の非常に强いものであることを感じさせられる。人間の本能に、美を喜び、藝術を愛するといふ心あればこそ不自由な監獄内に於て、非常に嚴重なる監視の眼を偸んで迄も、芝居の練習をする、又同じ眼を偸んで迄も斯樣な衣類、其他の調度を作るのである。自分は此等の事を坪

內君に語つて、其の一笑を博したことがあるが、是れ丈けは劇通の逍遙先生といへども全く持つて居ない材料であつた。

趣味十話

（四）

印の趣味

市島春城

私は印を彫ることも出來ず、全く篆刻には素人である、然し印を玩び且つ之を愛し數多く印を集めてゐる上から印については聊か趣味を感じてゐる。

一體印ほど多方面に趣味のあるものはない。第一に金石趣味。第二に書趣味、第三に文學趣味、第四に工藝趣味、第五に骨董趣味がある。一つの物に、而かも其物の形が如何にも小さいのに、これ程多くの趣味の備はつてゐるものは恐らく他になからう。

凡ての物は實用から始まつて追々趣味のものとして取扱はれる、印も其通りで昔支那の秦漢時代には印は全く實用のものであつた、其一例を擧ぐれば選敍に之を用ひた。即ち某官に任ずると云ふやうな場合に辭令を渡すと同じ意味で其官名を刻した印を與へた。それだから戰爭中でも官名が變ると云ふと突嗟に印を刻して與へなければならなかつた、即ち陣中に於て印を刻したものである。斯樣な時代には印は實用本位で印材なども極めて質朴に、鈕なども極めて簡單なものであつた。然しその印が勳章同樣大切なものであるところから非常に重んぜられる[illegible]自然作者に名手を選んだに相違ない。從つて實用時代ではあつたが篆字其もの、妙味、及び其他の趣味が發達してゐた。

金石趣味

普通云ふところの金石とは深く說明する迄もなく石碑或は鐘鼎に刻されゐるところの文字をいふのであつて、これは古い時代の字を研究するについて唯一の材料となるのである。即ち文字が金石に刻されてゐる故を以て遺されてゐる、從つて考古學上から云ふとこれ程大切なものはない。

扨て印といふものは金石のうちで最も小さなものだ、他の金石の碑の如きは大きなものが多く且つ一定の場所に立つてゐるので調べるに容易でない、鐘鼎も重量があるので動かして見るに困難だ、印に至つては單に形が小さいばかりでなく大きな碑や鐘鼎の及ばない一種の特徵がある。

それは碑や鐘鼎の文字は多く職人が彫るものである、或は字を相當な人物が書くことはあつても彫りは石工又は金工が彫る、場合によつては文字其儘を彫らずに、原稿を見て刻したものも少くない。こに角字を書く人自らが彫るものでない印は必ず相當の學力あるもの、それ自身が自ら刻する、その意味から他の金石と大に相違してゐる。從つて他の金石に於ては字の形や筆法が職人の爲に崩されるこことがあるが印は書く人それ自身が彫る爲、少しも崩されるといふことはないのみならず印に彫るのは篆字[illegible]と極まつてゐる、他の碑の如きは大體楷書隸書が多い、印はこの點から篆書を研究するに最も豐富な材料を與へるものと云へる。

西洋版畫でも美術家自身が自畫自刻といふことが重要であつて此頃日本にも流行して來たが、昔浮世繪の全盛時代には繪師と彫師刷師とは皆違つた人が手を下したものだつた。從つて彫師の技術が盛んで彫師のうまい爲に繪がよくなる程進んだものだつた。浮世繪師が自ら描き自ら刀をとつて彫るといふことはないが、西洋版畫には自ら刻することは主要の條件である、自家の持味を充分に發揮する[illegible]には最もよい方法であるが古來之れを實行して來たものは何ぞといへば即ち印である。

近來この金石趣味が汎く理解されて來たが自分が考へるに印が他の金石よりも多くの趣味を存してゐるのは、作家自身が刻して文字がほりくずされない、作家の精神が嚴然として存するところに他の金石を壓する所以があると思ふ。

畫趣味

印に書の趣味のあることは前項に說いた通りだが畫趣味のあるといふのは何故かといふに、第一印の文字に畫趣が存してゐる、勿論印に畫を刻するものではないが篆字其ものに畫趣があると思ふ。印に朱白の刻法がある、朱字は峒起したもので山岳丘陵に例へることが出來る、白字は凹凸であるからこれを河海沼湖に比すべきである。朱白の二顆を上下に押した有樣は山河を併せた形をなす、又往々一顆のうちに朱白錯綜の刻法もあるが之などは一顆のうちに山河をあはせ備へるやうなものである。かやうな彫り方で自然畫趣を感ぜしめる。

元來篆字といふものは象形文字であるから文字それ自身に畫趣がある、例へば鴛鴦の二字の如きは鳥の形を備へてゐてこれを二つ合せて彫ると自ら鳥が抱き合つた形になる、全體似たやうな形であるからどれが上か下か判らないやうな味ひがあつてこれ亦畫のやうな趣をなす。この外月、山、林、雲

花といふ字は如何にも畫に近い象形文字で畫趣を感ぜざるを得ない。象形文字に非ずといふも其の布置按排で自ら畫趣を表す、その按排の配合が非常に六つかしいもので、ほんの少しの長さ短かさの不調和があつてもそれが全品の失敗になるので、恰も畫を描くに一石一木の不均整が畫面全體を破るに等しい。又この字の按排についても、字の極めて密なるものは夏樹の深綠を思はしむる、字の粗なるものは落葉飄零の秋を思はしむるものがある。極めて嚴正な字を見ると、位冠を正した莊重の人の如く思はれ、字の極めて飄逸洒脱を見ると何となく仙客に對する如き思がある。嬋妍窈窕の字體を見れば美人を見る如き思ひありといふ譯で、色々な連想も交つて畫趣を感ぜしめるものだ。

文學趣味

翻つて印に刻する印文、印語といふものを見るにここに一種の文學がある、姓名等を刻する印は別として、遊印には多く感情を錄してゐる、その言葉には種々雜多あつて或は敎訓或は諷刺、又は自家の抱負、或は禪味のある言葉、或は遊戯の言葉、茶、酒に關係する言葉等いろいろの印文がある。その文字の數も雜多で時に長篇を刻するものもあるが多くは、極めて簡潔を尊ぶ、或は詩とか、或は古い言葉でも全文を表さずあちこちを略する爲に一種簡勁の文が生れる、だから印語といふものは詩に似て詩でない、詩よりも蓋ろ含蓄の深いものである、言葉をかへていへば詩の滓を去り油をしぼつたやうなもので、寸鐵人を殺すといふ如き警語の多いのはその爲である。印語はたしかに一の文學である。僅か二字三字で百言にも匹敵する文章がある。印文に趣味を感ずる所以はこゝにある。

印に關する文字は獨り印に刻する文ばかりではない、書畫に長い落款を書くと同じやうに鈕に刻する。自分の抱負、その心持、誰にたのまれたとか誰々に贈る等を刻する、その文章も又非常に簡潔で自ら味ひあるもので、小品文として最もすぐれたものである、こゝにも又文學趣味があるので、丁度書畫に題讃があると同じ意味である。

工藝趣味

工藝趣味といふのは重に印材の製作に關することで一種の美術である、先づ材についていふと印材は多樣である、玉、石、金、銀、銅、鐵、水晶、瑪瑙、木、竹、牙、陶など種々ある。玉、石、木等にも種類があつて玉には靑玉、紅玉、翡翠等がある。石には凍石もあれば臘石もあり、壽山石、昌化石、の如く出産地の名を云ふものもある。木についていへば

紫檀もあれば黄楊もあり、梅其他一々擧げきれない程ある。

どういふものか支那はこの印材に富んでゐる、殊に玉と石に於ては到底他國の及ばない一種のものがあつて、その玲瓏な質とその燦爛なる光澤、五彩目を奪ふ色は、眞に何とも云へないものがある。就中凍石は纖維の絶對にないもので其品位が頗る高く、色は種々あつて貴いこと黄金以上である。昌化石とは普通雞血石と云ふものだがその斑が濃厚の血の如くであつて頗る人受のよいものである。臘石のよいものになると牛乳の固形體の如く見へるものである、これらの種々雜多のものを一の盆にのせて見るといかにも美しく燦爛として人の目を眩ずるやうだ。

この原料が擦つたり、磨いたり或は切つたりする加工を經ると一段の美くしさが加へられる、この加工が充分の手腕を要するので大切な美しい斑を取り去ることがあつたり、又切り方によつては表に現れない斑を出すことが出來たりする、然し加工の一番大切なことは鈕を作るにある、其の鈕も樣々で或は人物を彫り或は獸や鳥を彫り或は山水、或は羅漢の如き佛を、或は果物樓閣をほるもので益々こゝに美術的趣味を表現するものである。

鈕のほり方も矢張り支那が一番上手である、何となく一種の風韻と畫趣が存してゐる、日本でも根付などに纖細な技巧をこらす作者があり乍ら印鈕を作らせるとどうも風韻に乏しいうらみがある。

骨董趣味

前に印は金石の最も小なるものと云ふたがその小なる所に骨董趣味があるので、之を几案の上に置いて玩び、又掌上に撫摩するのも小形であるからだ。古い印には出土品も尠くないが古戰場などから往々掘り出すのは陣歿者の佩用したもので歴史上の紀念品である。中には往々聞えた人の氏名などがあつてそこに骨董趣味を生ずる。

又漢代の玉印は風化作用でその質が甚だしく變じて不透明になつてゐるがそこに蒼古の味ありとして骨董家に喜ばれる骨董は元來來歴を尊ぶものであるが印ほど來歴の確然たるものはない、その刻してあるものが直ちに來歴を語り同時にその人の手澤を經た珍藏品であることはいふまでもない。更にその材が珍材であつたり、鈕などの加工が秀でてゐるとすれば一層妙である。

印は自用のものでも文房として大切な位地を占めてゐるが稀覯の古印などになると文房の雄なるものである。以上で私の云ふ印の趣味は大略述べた。近頃ゴム印などが出來て用を足すには便利かも知れぬが、これらは趣味を問はぬ人の用ふるもので與に印を語る資格なきものと云へやう。

一温泉場味といふ事に就ていろいろなことの挙げらるゝ
が、根本は野味とか野趣とかいふある様な思ひます、何
ごと何まで都会化して、先づ都会の範囲のことば
当場にも満たし、唯だ時を選ばず入浴に出来ると
云ふ丈が温泉場だとするなら、寧ろ温泉場と云ひたくない
のである、それをも云ふ、熱海のことを考へ既に云ひならしてある
あるのである、修善寺などいくらか開けたとはいふものゝ
じ可なりに野趣を存してゐる、都会人がいや味を感
ずるに至る温泉場の味なのである、なほすこし
もう挙げて見んか

一男女の混浴　一みじだらの服装

一婦人が細帯姿で市中を歩く

一居りを慎まず　一茶碗や箸を室内に留めおく

一他人の室前を勝手に通る

一人の目前に矢鱈にものを干す

一とび出した菓子は其儘にしておく

一朝に梅干を多く持出す

一三食共に給仕なしに客に放任する

一厠の掃除が届かぬ　一履物の仕末の乏しさ

一赤裸の人物の横行する　一小児のあばれさわぎ

一昆虫蛇に侵されて入る

小野小町は男子か

小野小町といへば本邦の歌聖中第一の女流とされて居る。其の容貌に於ては絶世の美人といはれ、其の節操に於ては、男を知らぬといふ意味より、極端なる節操の標本となつて居る。しかし乞食小町などゝいはれて、其の晩年は頗る悲境に沈淪したらしく、其の點から美人の末路の標本ともされて居る。

元來小野小町なるものが如何なる人であつたかに就ては、歴史家の考證が區々であつて、未だ其の素性の分明ならざる所がある。處で、近來此の小町の研究を始めて居る人があるが、其の研究によると頗る奇拔なる結果になる。卽ち小町は女子にあらず、男子であるといふことになるのである。其のいふ所によると、小町の歌として殘つて居る小町歌集などを讀んでみると、女性的の弱い、柔らかな歌は少なく、何れかといへば剛健の氣味の勝つた男性的の歌の多いことが、第一に小町が女性であつたか否かといふ疑を唆る。次には、朝廷の御選にかゝる歌集に、婦人の歌を加へる場合、其の姓を附けてある例は殆ど無い。然るに獨り小町にのみ小野といふ姓の附けられてあるのが不思議で之れも女性か否かの疑の種になる。又紀貫之の古今集の序文にはどうあるかといふに、元來古今集の序は眞名で書いたものが正しいとされてあるのだが、それには小町は女であるとも男であるとも書かれてない。唯假名で書いた序に小町を評して『女なればなるべし』といふやうな事が挿入されてある。是れは眞名の序には無い事なので、或は後人の竄入ではあるまいかといふ疑ひも起る。後世小町を女性なりとするは、單に此の附け加への一句から來て居るやうにも見える。所謂六歌仙なるものは藤原信實の書が根本をなして居るのであるが、其の信實の書も或は『女なればなるべし』といふ處から小町を女として見立てたものであるかも知れぬ、といふのである。

此の研究はまだ徹底する迄に至つて居ないが、其のいふ所に一理ないでも無い。小町の時代を考へてみるに、男女間の風儀が殆ど前後に類のない位紊れてゐた時であるが、其間に於て獨り超然として穴無し小町といはれる迄節操を全ふしたといふのも、實は甚だ奇な事であり、又小町が眞に女性であつたとすれば、それ程の美人でありながら、後年に至りては顧みられなかつたといふのも頗る不思議の事である。尤も當時の女流といへども、男子風の氣骨のある歌を作つて居る者が絶對に無い譯で無いから、其の歌風の剛健なるを以て直ちに男子なりと判斷するのは、少しく早計に過ぐるかも知れぬ。しかし其れと同時に、小町といふ名が女性的の名であるからと云つて、之を男性に非ずとするのも矢張り輕卒の判斷たるを免れぬ。それは當時の男子にして、之れに類した優しみのある名を附けて居るものが少からずあるからである。何れにしても小町の正體については、尙ほ研究の餘地のあること、思はれる。

或人は曰く、小野小町の出身地は近江であつた、近江には昔癩病筋のものが甚だ多かつた、小野も近江の出身であるから忌まれたのかも知れぬ、美人であつたのも其爲かも知れぬと。之れも一說として揭げて置く。

然るに圖書館生活は、世間で考へるやうな慘めなものではない、頗る貴き意味もあり又趣味もあるのである。積み重ねてある書物は、言はゞ聖賢哲人の殘した思想の集合ともいへるのであるから、學校附屬の圖書館は、其學校の先生の又の先生が何百人何千人と集まつてゐる所ともいへる。是等の先生は勿論無言ではあるが、實は世界始まつて以來の哲人が悉く其處に集まつてゐる譯であるから、其事務を扱ふ圖書館員は、日々夜々に其偉い人に親炙してゐると同じである。此意味からいへば、倉番と見られる圖書館員は頗る崇高の境遇にあるものと云つて宜しい。日本の如く圖書館の位置が高くなく、隨て其館員の報酬の薄い所に於て、館員が敢て不平もいはずに滿足してゐるのは、一つは斯の如き境遇に立つて一種の趣味を感ずる爲である。卽ち其感じを報酬に換算するからして其位置に滿足し得られるのである。

自分も長い間、圖書館生活をしたものであつて、其間に愉快を感じた事は多々あるが、差向き十二快を數へることが出來るから簡單に擧げて見よう。然しながら此十二快の眞の味は、圖書館生活をしたもので無ければ恐らくは分らぬで有らうと思ふ。

第一、缺本を補充することの出來た時

圖書の局に當つてゐる者が、痛く殘念に感ずるのは、書物の完備を缺いてゐる事である。特に貴重の書籍或は稀覯の圖書に若干の缺本のある時などは頗る遺憾に感ずる。隨て偶然に何れよりか、丁度其處に當て嵌まる端本などを探し當てゝ、之が爲に其書籍が一部完璧のものとなつた時などは愉快である。

第二、圖書の寄贈を受けた時

圖書館員の欲望は書物を殖やすと云ふことである。特に必要の書籍卽ち圖書館に備はらねばならぬ書籍の寄贈を受けた時、或は一部何百圓何千圓といふ價のある貴重の書籍などの寄贈を受けた時、或は何百冊何千冊といふ澤山の圖書の寄贈を受け、之が爲に目錄が賑かになつた時などは無論愉快を感ずる。

第三、貴重の圖書を廉價に購ひ得た時

甚だ下司張つたやうにも聞えるが、人情は何れの方面でも同じであつて、時たま、非常に高くあるべき圖書を、場合によつては半價にも足らぬ價で買ひ得る事がある。こんな場合には普通の人情と同じやうに頗る愉快を感ずる。これは政府の經營に屬する圖書館などに於ては、價の如何などは格別構はぬやうな場合もあるが、私設の圖書館になると特に此愉快を感ずる。

第四、他の圖書館に無い書籍を得た時

圖書館經營をやつてゐると、他の圖書館に拮抗して負けまいといふ競爭の念の生ずるものである。圖書館員同志では、何處に何の本がある、何の本が缺けてゐる位の事は分つてゐる。勿論頗る稀なる書籍の範圍に屬する事であるが、何處の圖書館でも欲しがつてゐるがどうしても手に入らぬといふやうな珍書が手に入つた時は非常に愉快なものである。

第五、新に製本した書物の標題を書く時

これは書籍の整理に關する事であるが、表紙も缺け、如何にも反故同樣になつてゐるものを整理して書物恰好のものに仕上げて、それが幾十冊も幾百冊も整然として顯れ出でた時に、それに標題を書くのは、さながら自分の著述が出來上つて、それに標題を書く時のやうな心持がして、甚だ愉快を感ずる。

第六、數年を積んで謄寫した圖書の完成した時

謄寫の歩みは如何にも遲々たるもので、百冊二百冊の大規模のものになると、事によると三五年の歳月を費すこともあつて、それが甚だ待遠いものであるが、それが完成したとなると、其愉快は決して活版本の出來上つた類のものではない。

第七、新に造つた書架に圖書を排列した時

書庫が狹くなつて書籍の入れ處がないので、據なく澤山の書籍を床板の上に堆く積んでおくことは、何處の圖書館にも有り勝ちの事である。これは甚だ不快の感じがする。然るに漸く書架が出來して、其亂雜の書籍

をチャンと其新架に排列した時の心持は、宛も新築した自分の家屋に移つたやうな愉快を感ずる。

第八、久しく待つてゐた圖書の到着した時

外國へでも注文するとか、外國ならずとも隔絶した所から書籍を買入れようとする場合には、中々容易に到着せぬこともある。特にそれが必要の書であるとか、又は其册數が甚しく多い場合には、一日千秋の思をして其到着を待つてゐるものである。現在のやうに戰爭でもある場合には、動もすると其書物が途中に紛失すると云ふ危險が多い。之が爲に待ち焦れてゐた書籍が無事に到着した時などは愉快の念を禁じ得ない。

第九、閲覽室滿員札を出した時

圖書館も普通の商店の如き趣があるもので館員として其繁昌を希望することは言ふまでも無い。折角開館しても、人足が少く、閲覽室が寂々寥々であつては氣の乘らぬこと夥しい。それが其反對に、一席も殘らぬ程に多數の閲覽者がやつて來て、館内が頗る賑ひ、閲覽室滿員の札を出すに至つた時は、特に愉快を感ずる。

第十、曝書に當つて圖書の册數を點檢して一册の不足もない時

圖書館では頻繁に書物を貸出して其數が何千册何萬册に達しても、愈、期日になると、それが悉く戻つて來て一册の不足も出來ないやうにするのを以て事務上の誇りとする所である。が幾萬册の本を數へても、一つも不足が無いといふ事は實に珍らしいので、斯る場合に愉快を感ずるのは無論である。

第十一、圖書目錄の編纂其他圖書の管理上に一新案を工夫し得た時

目錄の編纂方、圖書の管理方に就ては、各圖書館にそれぞれの工夫が有るけれども、凡そは一定してゐて似たか寄つたかのものであるので、他の圖書館に於て工夫し得ない便方を考へ出して他の圖書館を凌駕せんと試みるのは圖書館員の自然の情である。そこで色々

と工夫をして見るが容易には成功しない。然るに何等かの新案が其圖書館員に由て工夫されたと云ふ事になると、それが取りも直さず其館の發明と云ふことになるのであるから愉快である。

第十二、重きを置かぬ書籍の中から貴重の書籍を見出だした時

其圖書館中の幾萬册の圖書を一々見分けをして置くのは容易の事でない。場合によると、鑑識ある館員も多年の間、一向に注意せなかつた書籍の中から、偶然に名家の自筆本、又は非常に古い珍らしい版本などを發見することがある。斯る場合は宛も沙石の中から寶玉を捜し出したと同樣であるから、其時までは紙屑同樣に扱つてゐた本を、俄に特別の貴重品扱にする。此時の愉快は非常なものである。

是等は單に思ひ出した儘を云ふのであるが、此外にも色々の愉快がある。假令へば特志家の寄附金などがあつて、其年度の豫算以上、時によると豫算の二倍三倍の圖書を買入れる事の出來た場合なども其一つである。兎角圖書館員は、其館の藏書それ自身が宛も自分の財產なるが如き感じを懷くものである。固より自分のものでは無いが、自然の物のやうな趣があるので、圖書を愛する上から、圖書の殖えるのは、さながら自分の財產が殖えたり、自分の利益が增したりした時の如き愉快を感ずるものである

書の價値

書は人生に新觀察を與へ、如何に生活すべきかを吾人に敎ふ。彼等は悲しめる者を慰藉し、頑なるものを諫め、賢をしてますく賢ならしむ(原文韻語)

クラップ

△高麗版藏經（上）

雙魚堂主人談

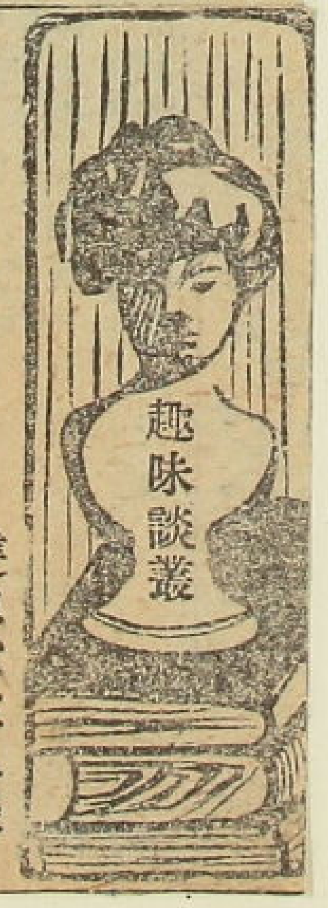
◎吾輩は圖書翫りに趣味を深く感ずる一人だが、いろ〳〵多方面に書物をいぢる中には趣味が向上して、圖書の範圍に於て、遂にお經の處に迄赴いた、それは詰り書物として現存して居る最も古い物はお經であるからである。書いたものでも版本でも、時代に於ては佛教に關するものが一番早く開け、佛教の傳布の必要上から書物が現はれたので、圖書趣味か古い時代に向上すると同時に、究竟お經に及ぶは當り前である。今日は別段之れと云ふ話もないから、一つ今の韓國の前朝、高麗朝時代のお經、即ち高麗版の一切經に就て話さうと思ふ。

◎高麗版の經は日本にもボツ〳〵ある、就中尤も有名なものは、京都建仁寺に在つたものだ。一体高麗版にも精粗の二別がある。精なるものは紺地の表紙がついて居り、普通の流布本は朝鮮特色の茶表紙のものである。建仁寺のも紺地のもので、日本に於ける一番佳いものであつたのに、前年經藏が火災に罹つて失せた爲め、何かの爲めに藏から取出したものだけ殘つたは未だしも、餘の大部分は悉皆烏有に歸したのは遺憾の極みである。近く東京に於ては、他にも一寸〳〵あらうが、芝三緣山增上寺に欠本のない高麗版の一切經が藏してあつて、之れは非常に貴いものになつて居る。增上寺には他に宋版、元版の一切經もあつて、高麗版と共に三大藏と稱し、同山では有名なものだ。同寺は德川氏の菩提所であるから、幕府の勢力を以て、諸方から三つの經を取上けたものである。宋版は伊豆修善寺に在りて平政子の奉納したと云ふものを朱印を與へて持て來たもの、元版でも高麗版でも、皆此流義で古名刹から召上げたものである。◎如此譯から增上寺の三大藏は、全く寺の寶什である。維新の變亂起るや萬一兵燹に罹りてはと云ふ處から、川越あたりを初め東京附近の末寺へ分けて嚴重に保護した。吾輩曾て增上寺に到り、同寺の好意により、三大藏を一見したことがある。

△高麗版藏經（中）

雙魚堂主人談

◎其時寺の方丈が、三大藏曝書の話をしたが、之が頗る面白い。元來同寺の學寮は其昔學徒三千と稱し、頗る盛なるもので、從て學識ある坊樣も尠くなかつた。ろれて三大藏曝書の折には、其多數の中から可成老年のものを、確か十六人かを選んで、一週間交代に日出から日沒迄やらせたものである。之等の選に當つたものは、其前から齋戒沐浴して、第一日より十六人が分課し、重なる老僧が立會の上行つたものだ。渠等は自立三禮し、一卷づゝを手に把り繰る事、恰も田舍の禪寺で、今日猶行はるゝ大般若を繰ると同じい樣にするので、即ち一種の式となつて居た。何故に老年の者を選ぶかと云ふに、若い者は粗漏だと云ふ處からで、又一週間としたのは、一週間毎に勞に代はるべく選定するので、非常に大切にされて居たものだ。◎何故に高麗版藏經は爾く尊ばるゝか。夫が古版であり、且つ一切經は宗教の根本的經典だと云ふ譯かと云ふに、事實別の意味が存ずる次第である。高麗版の藏經は今より八百年近く前、即ち高麗朝の最も盛なる時代に出來たものである。此時代に於ける彼地の文明の程度は殆ど支那と匹敵すべき位で、殊に宗教の盛なる時代である。無論當時の支那には宋版のもの、若くば其以前のものもあつたであらうし、宋版は尊むべきものである。併し宋版は廿種もあるけれども、頗る欠けて居り、元版にも間違がある。然るに高麗版を作る時に當つては、宋版は勿論凡ゆる方面から材料を蒐めて參考したものだ、高麗朝の國史に依ると契丹本をも參考したと云ふが、此契丹本と云ふものは今一本も見えぬ。又同國史には、日本の古寫經をも取寄せたとあるが、多分天平頃の寫經を取寄せたものであらう。兎に角如此あらゆる物を參考し、正を取り欠を補ふたもので、一切經の中で殆ど完備に近いたものは高麗版であるからである。



△高麗版藏經（下）

雙魚堂主人談

◎斯く高麗版の藏經が貴ふべき歷史を有して居る上に、三緣山に在るものは特に貴ふべき理由を有して居る。元祿の頃、同山に學識の高い僧があつて、其僧が此高麗經を非常に研究し、遂に京都に到り、此經を基礎として諸名刹につき、あらゆる古經に照して見た結果、高麗版が一番正しいとを確め、多年研究のものを、校勘錄と題して百冊を著述し、三緣山に於て版にした。之れにて種々なる經文の異動も明白となり、破天荒の大功績を顯はした。即ち三緣山の高麗經は、此點よりしても、非常に貴ふべきものである、況んや其版式の雄大にして字の頗る美事なる、法帖にしても見まほしき程なるに於て

をやだ。

◎更に近來韓國內部の事漸く分明なるに到り、海印寺所藏高麗版大藏經版の事も分つて來た。海印寺は慶尚北道陝川郡各寺面伽倻山中に在つて各市邑から玆に到るには、隨分困難なる道程てはあるが、京城から行くには、大邱驛から百三十韓里、高靈冶爐を經て行くのが、尤も便利てある。同寺は今を距ると千五百餘年前新羅哀莊王の第二年名僧順應の創立に係るものだが、其後數回の火災に罹り、現今の伽藍は九十餘年前の重建で、昔は現在のものよりづつと規模大なるものであつたと云ふ事だ。

◎藏經閣は二棟あつて、之れは李朝に至て改造されたものであるが、大藏經版は高麗朝に出來た儘藏してある。其數八萬六千六百八十六枚て、五層の版架に毎層縱に二列に配列し、中央の版架及壁際に設けたる大なる版架は、猶ほ前後左右から排列すると、恰も洋風の書架に洋書の排列してある様だと云ふ事だ。ナゼ此海印寺に如此大事業が起り、且今に至る迄遺存されたかと云ふに、之れにも理由がある。事實海印寺は朝廷の寺の一で、朝廷の墓もあり、大切なる文書もあると云ふ様な譯合で、殆んど支那にも超絶する位の事が出來たのである。文祿の役には、彼地の寺院等は、大概荒らされたけれども、此寺丈は幸にして免かれた。ト云ふものは、山奥に在つたから見逃した譯だ、本寺は前にも述べた通り火災の爲れに燒失し、從て種々なる文書も消滅したが、經藏丈滿足であつた爲め經版は、七八百年以來現存して居たのは、實に喜ぶべきヿである、統監府でも近來調査の上、韓國の國寶にしたい意嚮だそうだが、之れは是非そうして欲しいと思ふ。兎も角韓國へ漫遊する人は必らず一回は觀覽すべきヿである。

英薬ニ而を吟味し主而を撰ぶこと理あるが如し 荻野
台州彦根侯ニ徴れたる時 其方ハ蒲医と同藥なる
とも水ハ選ハさる可らず 貞井 此地の水ハ悪し 京地ハ水
よく殊ニ我吉の水主なれバ取寄せらるべしと云く

へり時（此人を水医者と称し後又江府の医員となり）井
家昔ハ和気の英侯と称し家に住せしが庭
前ニ名井ありて其井を以合ニ仕切りしハ 藥室
也ハ日用とせられける由 其後の人其の名を
呼ハず半井と称しが 其井ハ今も三室に施
藥研の庭前ニ存なりと

藥氣を散せざる用意とし包又紙ニ特殊のよ
あることを説きたる中ニ云く 方今海内の医士薬室
の薬紙を用て藥袋と為る 世人多く之来彼の紙
ハ土佐侯の紙出て鉄砲の火薬を包て氣の
不漏為めなりとする者ある夫れ如何なるも国ち帝の人の手ま田
口を拙なるより因て他国へ出すを禁めたし 世間に存る
紙ハ偽物甚多し 其人主ニ偽せを醸定するも紙の論を
を附て試むべし 三つ抱き紙を蒲ニて艾不減
偽物ハ火忽ニ減ずる 本紙を東地の心ある医ハ田舎の医と
遠い本土佐出の紙と素紙を以て此背に貼し其紙の
方を裏にして素紙の方を表とする外へ不捐れ
藥氣不漏を要とする也 支那にてハ錫紙を用ひ
藥ニ一貼二貼といふも藥氣を漏さぬ為め包紙
を糊封しあらん

○先年東京の北畝国民新報社が出版に頼
山陽の書簡集を発行するにつき徳富から依頼を
受けて、其集の手紙の写し書ばかりの整理を
しておると、かねて来訪手紙の内容につきいろいろ論し
此中に聊か記載を欠くことがある。石井豊洲と
いふは春水の門人で山陽の友人である。此人が山陽
脱走の時、杏坪春風の命をも受けて蹤跡
をしらべ種々苦心をしたのである。一旦京都へ出ての
ち、又逃してしまつた。菅茶山は春風が抜考の衛生
寄つれ擬え信せられてあるが、其れは指図役で、実地
足を運けたのは、此豊洲は山陽と相の友達

でもあつたから、此友人と共にして山陽の出奔ことをい
ろく窮迫時代の実情や其他人に公言し得ない
ことなどを露骨に言つてゐるのであるひへ、高明
の山陽を知るの唯一の材料であるのである。此文
い、事実豊洲の手には多く山陽から寄の
せられた書簡があつたとみえるが、此の人は注意
深い人であつたとみえて、自分の世上にあらはれ
人柄を恐れて、死する前に遺命をして悉く
て手紙全部を棺に納めしめたといふこ
とである。随つて石井宛の書状は無いといふこ
とだ。山陽の手紙は去経に拘らず今九章
る書画価があるが、それは不思議なるかな、山陽の

生前既に手紙が珍重がられたと云ふ丈ハ知れても
ゐるが既に手紙間に相当の價があつたと多くの
ハ初耳である。小竹の手紙の中に此す事が
あるさうだ。山陽の室梨影を云ふ初から正室
として迎へられたらしく云つてゐるが夫れハ見え来すへ初
めハ妾として迎へ後に正室としたのであることがわか
つて来た。それも山陽のある人に與へた手紙の中に
梨影を朝雲ことゝ呼んでゐる。朝雲ハ東坡
が誰れかの妾である。夫れを擬していふたのであるこ
とハ云ふまでもない。マサカ妻をさうとしたことはあるまいし
ニ云ふまい、尚ほ梨影を(嘉和の頃)正室として迎へたあ
るから、母に隠くしても置くまいが、訓を見ると事

初の内ハ母にも知らさずに居つたので梅颸の日記に
どこにも其の見へるのが数年の後である。梨影
ハ十八の春に山陽の妾となつたことゝもてうれ
十九といふハ誤りである。梅花等で書いてあるハ、山陽から嘗め
でた書簡の何にも(四十両)位あるといふ。皆前の
を弟子まなびの疑文であると云ふが、中に一両
山陽が利弥を囲ふた為に若干の金を与へた
堂を以てあることを借しつけた者かトウく
ファイナないことがあつて山陽の気叙に障した
消息を伝へられたことがあるといふ。山陽ハ婦人金
の利弥を囲ふまでの損目がうつれたことハ初めて
知ることで、もすへが、橋本ニもまた頼んでコレをやつ

酔中語

補遺

翠原道人

（其一）　獄中酒を飲む、舊時絶無の例にあらず、唯だ今日の獄制下に飲酒絶對不可能とす、余往年筆禍の爲め獄に下り、寫眞を以つて日課とす、暗室に入る毎に、「アルコール」を水に和し傾けて悶を遣る、如斯くすること月餘、「アルコール」既に先ち早く盡く、獄司怪しみ、一日暗室に在る余の動靜を知らんと欲し、戸を開かんとす、余叱して曰く休めよ戸を開かば藥劑皆効を失はんと、獄司遂に戸を開く能はず、想ふに獄中酒の馳走を受けたる者、天下余唯一人ある耳、

（其二）　古來酒に別腸ありと云ふ、一升の水を飲むを難んずるもの、斗酒を辭せざる者あり、然れども酒量ある人多くは淺酌の人なり、余の先考酒豪を以つて知らる、幕末峰岡藩主に招かれ、其酒席に侍す、藩主一升を盛る巨觥を捧げ來り、先考に屬して、曰く、卿酒量ありと聞く、小杯は恐らく煩に耐ざらんと、先考曰く、小杯百千を辭せず大杯は甚だ厭ふと、藩主更らに侍者に命じ、小杯幾十を三寶に載せ來らしめ、更らに之れを屬して一擧に飲まんことを求む、先考歸來家人に語つて曰く、殿樣の飲には赴く可らず彼れが如く困殺の事はあらず、渠は酒の趣味を解せず、

（其三）　余往年大患に罹り爾來酒を斷つこと十有餘年、偶々事を辨ずる爲め備中の富豪野崎武吉郎を味野村に訪ふ、主人殊量あり、客を遇すること厚し、當日招かれて其別業に到る、主人盛膳を設けて待つ、坐に侍するの人此家の眷族にして皆酒豪なり、余竊かに思へらく、斯の如き歡待に對し、客酒を辭さば、主人必らず不快を感ぜん、然れども十年守る所を破るは余の重大事なり、漫に主人の意に迎合す可らず、宜しく心事を告白して而る後應ずべしと、意を決して主人に告るに實を以てし初めて杯を擧ぐ、主人大いに喜こび、余の坐前に來り慇懃に謝す、之れを余が解禁の式となす、此夜野崎氏に宿し、翌朝發するに臨み、齎らす所の用務忽ち辨ず、酒客の同感俗事に及びたる者か、當夜主人歡喜の狀今尚髣髴目にあるを覺ゆ、

以上いふは初耳である、當時春水は其に此一通の書状
をの人房子を戒むる書状がある、其れには自分の父の
喪に服して三年の間、房子を慮し、其が為め
身体の健康を害へたと吹聴し、君も知る通り
さかんに書を世に示して居る、三年の禁房も
アテにならん、これ許りは事實の調査が不可
能ぢやから、山陽崇拝者は眞實とするであらう

醉中語

補遺

翠原道人

（其四）余も亦酒の失あり、抱腹すべき一事を擧ぐ、徃年橫濱に赴き友人の家に就て飲み、夜に入り酣醉酊して人車に上り、神奈川に抵らんとす、途中懷裏に小貨の無きに想到し、乾苔を賣るの店に車を寄せ、若干の海苔を購はんとして十圓紙幣を投ず、實は海苔を要するにあらず、紙幣を小貨に換へんと欲するのみ、半上待つこと久しきも剰錢を辨せず終に睡氣を催し、早く車を寄せたる所以を忘れ、車夫が叱して曰く何んぞ速かに去らざると、店主剰錢を云々するも自ら覺らず、放言して曰く些の釣錢論せずして可なりと、海苔を抱き九圓餘の剰錢を抛棄して去る、神奈川に着して後漸やく覺るも晩し、車夫既に去り醉中亦曩きの一店を訪ふが懶うくして已む、

（其五）賴山陽、晩年肺患に罹り血を吐く、戯れに長篇を作つて曰く國難に方つて血痕を大地に留むべき者を、太平の世に血を失ひたるは惜むべしと、又曰く、史を編して姦雄を筆誅せし天罰遁れ難く、遂に此厄ありと、溺死の酒客亦語する所、如此し、而して終に深秘を掩ふ能はず侍僮の言に藉り來りて曰く、先生言ぞ休めよ、劍菱劍のごとく五臟六腑を割き流漿となつて溢出し、以て饕餮者流を戒むるにあらずやと、山陽終に本音を吐く、余も徃年酒の爲めに血を吐く、後、偶々鷄血石數十顆を得たり、思へらく此血失ふ所を補ふて餘りありと、友人五峰兄、余の爲めに長篇を作り、此意を取つて壽を爲す、此詩題して鷄血石の歌と云ふ、實に五峰集中の雄篇也、但だ五峰兄余を揚げて長吉に比し喀血を國事に致したる努力に歸す、是れ山陽の本意とする所にして余の敢て當らざる所、五峰兄何んぞ末段に陽の故智に傚らひ、揶揄一番、「酒」の一字を省き、余に代つて本音を吐かざる、余之れを遺憾とす（完）

赤化の意義

露西亞の革命このかた、全世界が所謂赤化運動を恐るゝこと、猛虎よりも甚だしいが、一體赤の字は何を示すものであるか。漢語に赤族といふ字がある。是れは血を流して三族を戮すといふ風に解せられて居るけれども、大に誤まつた解釋で、實は赤字は物の無いことを示し、赤族とは其族を無にすることを意味するものである。赤地千里といひ、赤貧といひ、或は赤裸々といふが如き、皆な此の例である。露國に於ける赤化の語源は、もとより過激派の旗の色から來たものであるが、革命の結果は農業を初め國内のあらゆる生産事業を荒廢に歸せしめ、千里無物の觀を呈しつゝある。それが偶然支那に於ける赤字の解釋に歸結して居るのは面白い。

大隈邸の杓子

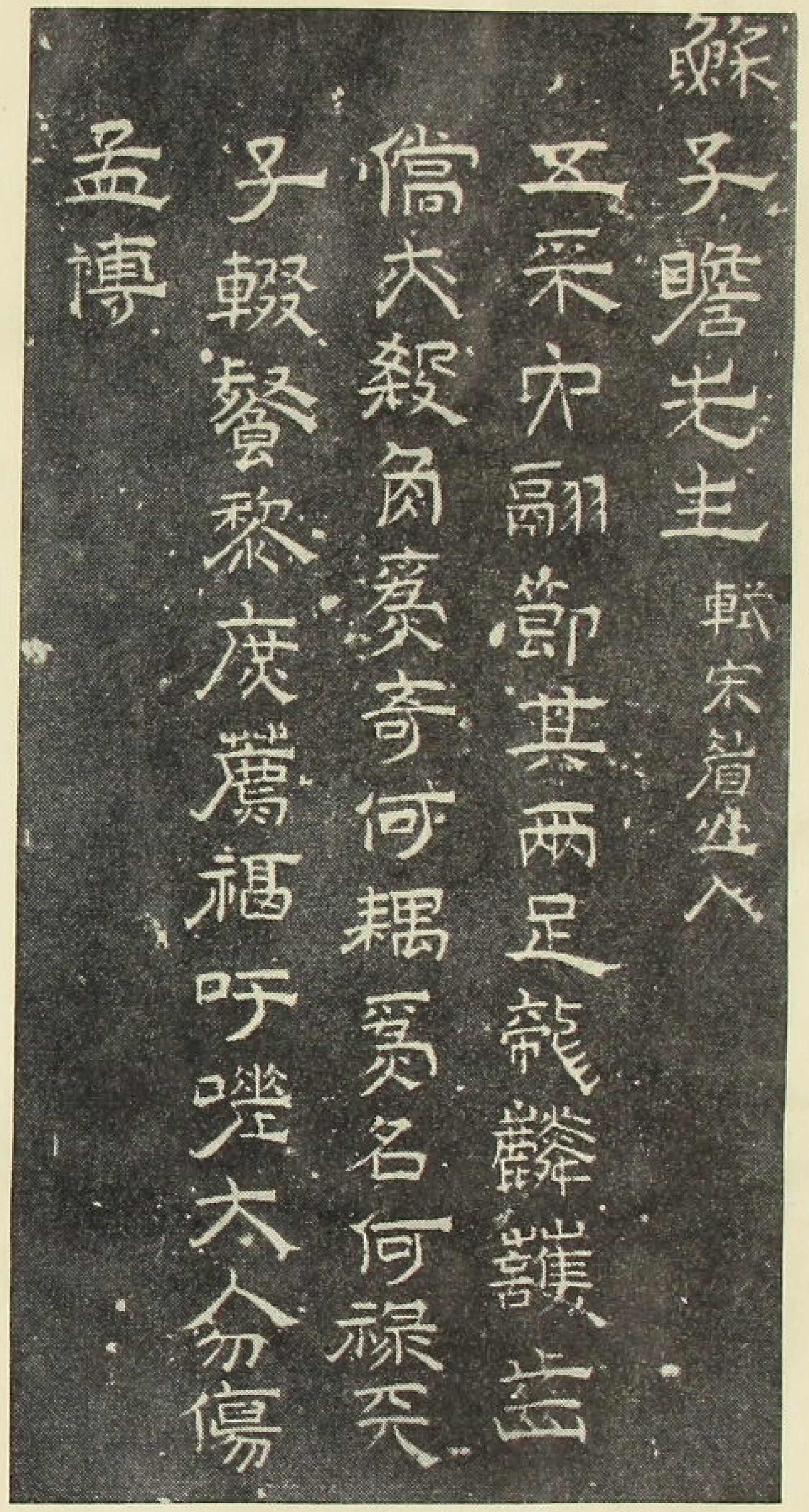
早稲田の故大隈侯邸の表玄關を入つた者は大抵の人が氣がつくであらうが、例の仁王の立つて居る所を入つて右の方の壁に頗る巨大な杓子がぶら下つて居る。それは飯を盛るやうになつて居る大きい所の幅が一尺二三寸もあつて、長さが一尺程もある。其の幅の廣い所に細かな彫刻がしてあり、それをよく見ると直ちに嚴島の風景であることが理解される。それから考へて嚴島は昔から杓子が一種の名産となつて居るから、此の杓子も同地で作られたものだといふ事は何人にも首肯かれるが、扨て何故に斯樣の杓子が老侯の家の飾りになつて居るか。たゞ其の大きい點から、大隈侯は大きいもの好きだから、杓子までが大きいのだらう位の事より外には誰も判じ得ない。此の事について思ひ起すことがある。故侯爵は嘗て人に向つて戯れに杓子の解釋を下された。それは杓子といふものは飯をすくふ道具である、すくふといふことは即ち『救ふ』であつて、單に飯を盛る爲といふのみで無く、人の飢餓を救ふ働きを爲すものである、其れ故杓子といふものは實に大切なものであつて、ひとり個人の飢餓を救ふのみならず、廣く國民を救ひ、更に大にしては天下國家を救ふのも亦此の器であると、例の老侯一流の大風呂敷の解釋を下されたが、其時偶々座に居合せた廣島出身の早稲田校友が、それを面白く聞いて、幸ひ自分の郷國の嚴島は杓子を名産として居るからとて、歸國早々特別に大きい杓子を作らせ、之を侯爵に献じた。老侯は大に喜び、是は宜しく玄關に掲ぐべきであると笑つて家從に吩咐けられたが、成程天下國家を救ふ人の看板とも見らるる寓意があつて、今になつて老侯の事が偲ばれ、興味を感ずる。此の杓子を裏返して見ると、柄の所に廣島縣校友會といふ字が刻されてあつて、廣島の校友連が献じたことが明らかになつて居る。

舞臺裝置の變遷

詩僊圖像序

余甫百十六七歲奉事
東埜大禮君不幾不久兮猶見兮
京城于關左于駿府

石川丈山之書



黃石齋之書

踊塵（一）（關西みやげ）

市嶋謙吉氏談

先般大隈伯に隨ひ關西地方に旅行せし市島氏に、旅中の感想を聞く處ありしに、氏は隨分新聞にも出て居つたが、併しまだ他の知らぬ面白い話が一つ二つないでもないと云つて談られたものを踊塵と題した次第である。……記者識

◎旅中の大隈伯

大隈伯が旅行されると云ふ場合には、自分も大概隨伴するのが例で、殊に關西方面は自分が屢々出掛けて種々な關係がある爲めに、關西旅行には殊に隨伴する事となつて居る。昨年も二週間計り本年も前から關西へ行つて居つて、伯の來られるのを待受けて、宿を同ふし所を離れず隨伴して居つた。全体伯に隨伴すると云ふ事は非常に骨が折れる事である。自分は侍從長と云はんか三太夫長と云はんか殆んど凡ゆる事を引受け、伯が出掛けられると聞くや否や、諸方から演說講話、臨場招待の注文依賴、湧くが如くに起つて來るのを、自分が一切之れを取捨撰擇して應ずべきは應じ斷はるべきは斷はり、時間割をなし、然る後に伯に紹介すると云ふ繁劇は、恐らく侍從長、三太夫長とか云ふ者の中の役目の內で、最も繁劇なる役目であつたらう。故に自分は之れが爲め殆んど朝の六時から夜の十二時に及び、動もすれば一二時に及ぶ事さへあつて、丸で陣中にて事を處する爲体であつた。斯樣な譯であるから非常の骨折であるが、割合に身体も疲勞せず却て愉快に感ずると云ふは不思議な位で、之れは要するに、伯が陽氣で愛嬌に富むだ人で、且つ氣六ケ敷い事もなく遠慮もない人であるから非常の繁劇を極めながら、忙中一種の興味を感じて疲勞を忘れしむる事である。殊に伯や高齡七十を超え、しかも猶綽々として壯者も及ばざる氣魄を以て、旅中は恰も戰場に臨むが如く、幾んど旅宿に五分も一分も安息する事のない程活動せらるゝ事を思へば、若い者もつひ庇古垂れる譯に行かず、我と我心を鞭韃する氣になると云ふのも、疲勞を感ぜざる一つの原因であらう。

◎人氣の加はる伯

伯が昨年の關西旅行に博された人氣は實に大したもので、恐らく空前の事であらうと思ふ。自分は當時隨件して其衝に當り萬端の事を處理して居たが、其の人氣を博した原因は、維新の元勳追々凋落して剩す處幾何もなきと、伯が黨派に關係なく官民等しく親む事、伯が古稀以上の高齡なるにも拘はらず國家の爲めに常に活動せらるゝ事、伯が多方面にして何れに向つても親切なる事抔が幾分の原因をなしたるものなるべきも、如何にも盛んなる歡迎であつた爲め、僅か一年未滿の今日に再び同じい地方へ赴かるゝ事は何うか。佛の面も三度と云ふが如く、之れを數次すれば人に疎まるゝは世上の習ひであるから、折角の人氣を落す樣な事があつては面白くないがと、自分は私に懸念して居た。然るに驚かるゝのは、今回の旅行は昨年に比して毫も人氣の衰へざるのみならず、或意味に於ては寧ろ甚しく人氣を增した位で、此人ならば何度來ても宜しいと云ふ大人氣であつた。相變らず諸方からの招待講話の請求雲の如く僅か二日計りの大坂滯在中、如何に時間割を極めても到底落付かない有樣で、其衝に當つて居る自分も大に困却した。實に伯の人氣は偉いもので、例へば大阪市中の有樣に就て見るも、恰かも帝者の通行に對する待設けの如く、伯が突然の通過でも何うして知れるものか、市街の兩側は堵を爲す人を以て築かれ、眼に一丁字なき車夫馬丁に至る迄脫帽敬禮する有樣である。以て伯に對する人氣が愈よ出て愈よ熾んなる一端を知るに足るものである。

踊塵（二）（關西みやげ）

市嶋謙吉氏談

◎多方面の大隈伯

伯の身体は實に多方面である。今回の旅行は伯自身も教育旅行だと言はるゝが、成程それに違ひない。併し其帶びられて居るお荷物は實に澤山のものである。曰く早稻田大學、曰く女子大學、曰く同仁會、曰く軍人後援會、曰く南極探檢後援會、曰く平和協會、曰く國民講習、曰く新日本、曰く何、曰く何、數へ來れば殆んど一車に積み切れぬ程で、之れが到る先々伯の仕事となるのである、或所に於ては、伯は一場の演說中是等の悉くを網羅した演說をされた事もあつた、此一事既に伯の多方面にして且つ多事なるを想像する事が出來る。

◎大隈伯の感化力

伯は人に對して一種の感化力を有す、而して此感化力は全く伯の同情心慈愛心の結果に外ならぬ。伯は常に人に接する毎に一種他人の企及すべからざる態度を有して居る、即ち如何なる階級の人に向つてもそれに相當する同情、平たく言へば思遣りを以て對せらるゝ。如此は伯の天性之れを然らしむる譯であらうが、また伯が永く野に在りて逆境に處し、多方面の人に接して世の辛酸を嘗められたる結果とも見られる。實に此思遣りが凡ての人心を制する所以で、如何なる英雄豪傑と雖も、此最大要素を欠いては到底人心を制する事は出來ない。況んや人格の養成を以て主とする教育の如きは、形式一遍の教授、殆んど型に嵌り切つた道理位で、目的を達し得るものではない。即ち其方面に對する同情同感、大人には大人の思遣り、小兒には小兒の思遣り、乃至學者でも職工でも皆其階級に相當する同情同感がなければ、如何に其態度が立派でも、其說く所が高尚でも、其勢力が盛でも、人を威服せしむるは或はあらむ、未だ以て人を感化するには足らないのである。しかるに伯や渠が如き天下第一の能力と才辯と、渠が如き閱歷と識見とを有し、其上最も暖き慈愛心、同情心、思遣りを以つて居る。斯心以て王たるに足る、伯が一場の演說にも、幾千の聽衆に對して深甚の印象を殘さしめ、終世忘るゝ能はざる概あらしむる、また怪むを須ゐざる處である。試みに一二の例を擧げて見やう。

◎慈愛の老翁

例へば中學校に於て講話等の場合學生が皆な整列して迎ひて居ると、伯は例の不自由なる足を運んで、ニコ〳〵として兩

早稻田大學圖書館

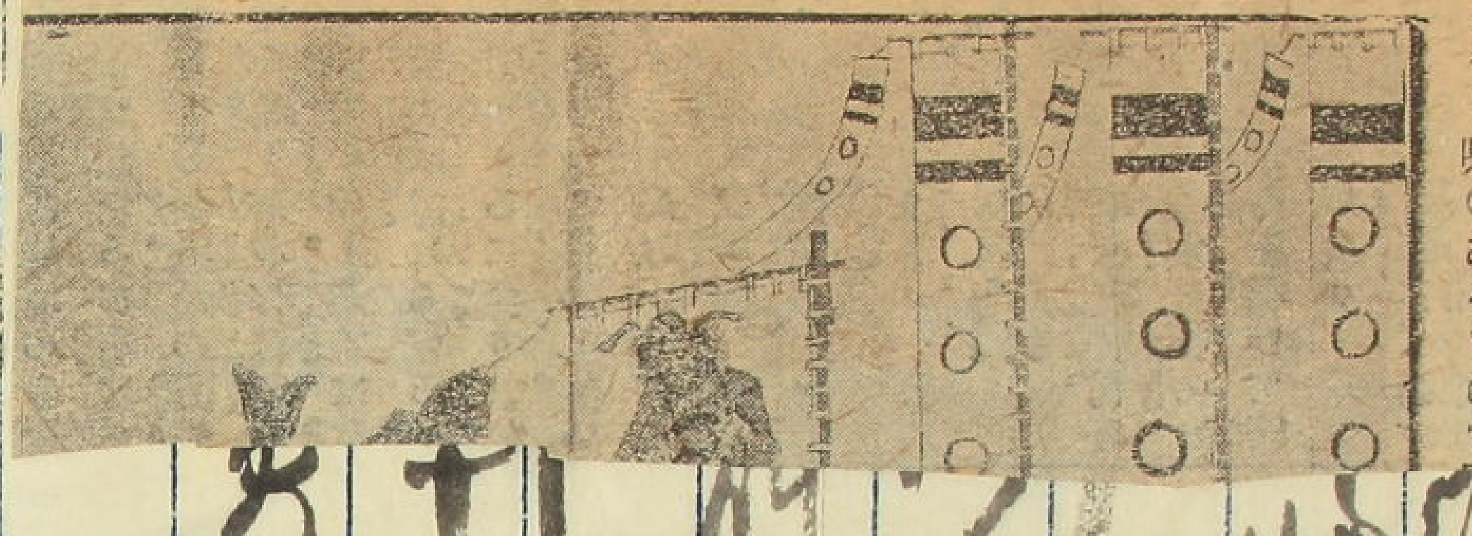
に、之と反對なる事、即ち他人に物を與へる事、尊敬に酬ゆる事となると、絶對に欠けて居る。如何にアノ人は平民的だの怜悧だのと云つても、必らず此點に於て欠けて居るものが多い。唯だ伯に於ては然らず、伯はもとより一代華族ではあるが、其昔は爵こそなけれ貴族相應のものであつたから、本來ならば貴族通有の欠點を見るべき筈であるに、之と反對に何事に依らず痒い處に手の届く迄行渡ると云ふのは、全く思遣りの深い爲めで普通華冑の長袖者流と大に類を異にして居る處である。

◎伯の演説と聲量

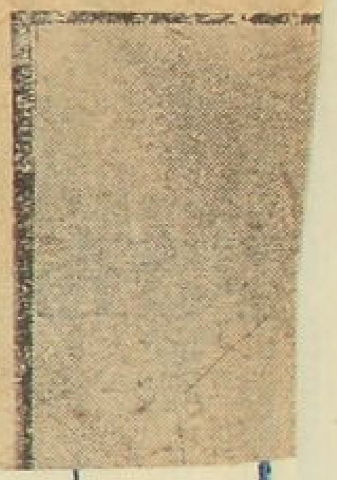
伯の演説の月旦は世自から定評あり、一辭の之に加ふるを要せざる處である。併し一日五六回、一週間に亘れば平均三十回以上と云ふ譯であるのに、只の一回も同一の演説を繰返された事のないには驚くの外はない、例へば中學校の如き、學生の程度は何れの學校も同一であるから同一の演説で差支はない筈なのに、一校毎に違ふ、全く人と場所とに依て異つて居る。而して之が豫め考へられて居るでもなく、只演壇に立てば何等か油然として腦裡に湧いて來ると云ふ有樣で、キッチリ箝まると云ふ處が敬服に堪へない。殊に專門の場所に於ても專門の話が湧くが如くに出づるは、伯の能力の如何に偉大なるかに驚く。醫學校に到れば伯は醫學者の如く、神社佛閣へ到れば、古典學者佛教學者の如く、工場に到れば伯は嘗て職工たりし事ありしやと疑はるゝ迄に其實地に對する智識と材料の豐富なるには驚くの外はない、加ふるに伯の聲量がまた頗る豐富である。伯は昨年旅行の時も氣候の變化にて風邪をひかれたが、本年も同樣で、音聲が段々嗄れて來た、殊に倉敷に於て五千の大衆を控へて演説せらるゝ時の如きは非常に嗄れて居た。然も伯は一時間以上の大演説を試み、五千の大衆に隈なく撤したといふは、實に非凡の事と云はねばならぬ、之より伯に隨件中、ポツ／＼起つた事で稍や興味ある事を話して見やう。

側の學生を不公平なく見て歩きながら、是は仲々壯健な小兒だとか、非常に元氣があるとか、怜悧だとか云ふて通る。一体此種の辭令は多く、イヤ味のあるものであるが、伯の如き閲歷人格態度を以て、我身の不自由を忘れて興に入るの感じを顯はさるゝ爲め、學生は皆な深甚なる印象を與へられ、講話を聽かざる前既に一種の親みが起つて居るので、伯が一場の訓話も猶且つ講堂十年

舊幕時代の長岡



の感化に勝るもの萬々なる所以聽て他日再び途上に伯と會するに、ニコ／＼してお辭儀する樣になつて來る、是全く慈愛の結果に外ならぬ。また伯は孤兒院養育院の樣な處へ二度も行かれたが、此時も五つ六つの小兒しかも何處の馬の骨だか分らぬと云ふ樣なものに、あなた方と呼び、簡單ながら傍で聞いて居てさへ涙の出さうな慈愛深い話をされ、眞にお祖父さんが愛孫に對すると同樣の態度を以て接するが如き、眞に暖き思遣りがなくては出來るものではない。伯は斯樣な處では必ず自から幾何かの金を包むで敎師に渡し、之れでお父さんから欲しいものを買つて貰ひなさいと云ふ。茲に至ると白頭の老翁、紅顏の小兒、祖父か孫か、唯夫れ親むべき慈愛の大隈翁あるを見るのみ、曾て白眼一世を罵倒し天下人の舌頭を挫斷する底の警拔なる態度の人とは夢にも想ひ及ばさる程である。



蹄塵（關西みやげ）

（三）

◎氣のつく大隈伯　市島謙吉氏談

大隈伯は大臣の禮遇を賜ふの人である、故に伯の旅行には警部や巡査が警衛をやる、是れ固より國家の公職として當然の事である、由來斯る場合、當然の事であるから、警部や巡査に對しては一瞥も與へぬものが多い。然るに大隈伯に限つては、一々鄭寧に挨拶せらるゝのみならず、必らず自分の位置相當の謝儀を贈る。又招待の宴會に於ても、賓客の身でありながら藝妓抔に對して位置相當の纒頭を與へる。世人動もすれば大隈伯を以て豪奢を衒ふものと誤解するかも知れぬが、是れ皆思遣りの上から起る事で、實際苦勞した人でなければ分らぬ事である。元來世の中に於て、位置の高い、就中貴族と稱せらるゝ人達は、他人から始終物を貰ふ側になつて居る事と、始終尊敬を受ける側になつて居る事とに依て、習ひ終に性となり、之を當然の事としてある代り

蹄塵（六）

（關西みやげ） 市嶋謙吉氏談

◎津田永忠の事蹟

岡山と云へば何人も熊澤蕃山を聯想す、而して世人は芳烈公時代の岡山の經營、即ち教育、財政、土木、水利其他藩政諸般の經營は、凡て蕃山熊澤了介の事蹟なりとして他を顧さるのである。處が、實地に就て見るに、天下に喧傳されたる蕃山よりも、他の隱れたる一人が偉大であつた事が感ぜらるゝ。之は岡山藩士津田永忠其人であつて、其事蹟の一端は近來池田侯が公園中に建てられた豊碑に記されて居るものでも分かる譯である。後樂園を作つたのも、有名なる閑谷黌を經營したのも、領内に水利土木を起したのも、備荒貯蓄の方法を定めたのも、要するに世人が見て以て蕃山の經營に係るものと信じて居る偉業は、事實上概ね此人が經營したものである。此人は寛永十七年に生れたと云ふから、此人の十八歳の時、年輩の上から熊澤了介は致仕した譯で、見るも津田が蕃山の指揮を奉じて實行したものとも思はれない。或は蕃山が創業時代に大体の事を定めて置いたかも知れないが、實際は此津田が一手にやつたに相違なく、岡山に於ける大業は殆んで此人の關與せさるものはない。然るに天下の人が、唯蕃山あるを知て蕃山以上の津田あるを知ぬと云ふは遺憾の事である。

蹄塵（八）

（關西みやげ） 市嶋謙吉氏談

◎櫻井驛址を訪ふ

大阪から京都へ行く途中滊車で四十分高槻と云ふ處がある、此で女子大學の敷地を撰定すると云ふ處から、大隈伯及一行が出掛けた序に、土地の有志家が切りに櫻井の驛の舊蹟を訪ふて呉れとの懇望で端なく訪ふ事となつた。櫻井の驛は嘗て山陽が、驛門立馬臨路岐、遺訓丁寧垂髫兒、從騎粛聽皆含涙、兒伏不去叱起之と吟ぜし楠公訣兒の舊蹟にて、我々日本人としては、何人の頭惱にも深く印象されて居る所である。處が親しく其境に臨むで見ると、茫々たる平原離々たる野叢の裡に、僅に新らしい碑が一基建てられてあるに過ぎない。碑は自然石で、其表に『楠公訣兒之處』と刻してあるが、之は渡邊昇が大阪府知事の當時書いたものだそうな。碑の傍には大きな松樹がある、併しあると云ふも名ばかり、枝は枯れ皮は剝がれ、皮なしの幹が一丈計り存して居るのみで、風雨七百有餘年、只僅に懷古弔昔のよすがとなるべき松樹さへ此通りであるから、如何に寂寞を極むる光景なるかを知るべしである。そこで此碑は有志家でも建てたものかと考へて、後へ廻つて見ると、豈圖らんや日本人にあらずして、英公使パークスに依て建てられたものである事を發見した。

A trebnte by a foreigner
to the ronalty of
the faithful retainer
Kusunoki Masashige
who parted from his son
Masatsura
at the spot before the
battle of the
Minatogawa A. D. 1336
Harry S. Parkes
British Minister
to Japan.
nov. 1876

即ち斯樣に書いてある。是程の名所、殊に忠孝に關する有數の名蹟を、日本人が表彰する事を爲さずして却て外國人に先んぜられて居るとは、實に汗顏千萬の事であると云つて一行は慨嘆した。此日村の老幼男女相群集して、平原に天幕を張りて伯を迎へ、伯は請に依つて、忠臣の遺蹟に生息する人民が立憲國に處するの道に就て有益なる一場の講話を試み、村民に多大の感動を與へられたが、恐らく如此境に如此人を迎へたのは之が嚆矢であらう。此遺蹟も將來何等かの方法が立て表彰せらるゝであらうと思ふ。

蹄塵（十）

（關西みやげ） 市嶋謙吉氏談

蹄塵（十一）

（關西みやげ）　市嶋謙吉氏談

◎伯と越後の老媼

大隈伯は京都へ行く度には必らず兩本願寺を訪はるゝのが例で、此度も日を異にして訪問、種々歓待を受けられた。東本願寺訪問の時、越後の三條邊の或婦人が二三の眞宗熱心の老媼を伴ひ來て、是非伯の随行をさせて活佛を拜ませて呉れと頼むと、無頓著の伯は宜しいついて來いと承諾される。座にありし我輩が戯れにお前達は活佛を拜ませて呉れと頼むが、全体本願寺は御維新の際既に潰れやうとしたのを、大隈伯が立朝の際に助けられた爲め、今日に及んだのである、故に若し本願寺の法主を活佛として拜むには、其前に其活佛が存在する樣にしてやつた大隈伯を拜まなければなるまいと云ふと婦人共大に驚いて珠數を取出して恭しく拜むだのも一興である。

◎東本願寺訪問

東本願寺は今回大遠忌に當つて、前面正門を初め勅使門其他三四の門は悉く新に作られ、白木作りに金の金具を打ちたる壯麗眼を驚かす計りである。それから寺中へ這入て見ると、黒書院、白書院の二大書院も新に作られ、伯一行の案内された處は白書院であつた。是等の書院並に門は皆關西の熱心家に、夫々一手に引受けて作つたものであると云ふ事を考へると、本願寺が貧乏になつたとか、負債があるとか云ふけれども、法燈容易に消ゆるものにあらざるを感ぜしむる。法主は自から伯を方々へ案内されたが、伯は『此祖師堂本堂等へ導かれた時に、棟上があつて自分は其時恰も西下して居つたので、招待を受け、假橋にて屋根の絶頂迄登つた事がある』と言はれた。其時は伯も無論壯健であつた。それから廊下に堆き毛綱が横つて居る、之れは棟上の節用ひたもので、新潟市の信徒の寄附したもので、重さ百貫目と稱せらるゝものである。寺の人の語る處に依つて、越後から獻じた毛綱は此他に二十幾筋あると云ふ事を聞いて、一行頗る驚嘆したから、越後出身の自分は、是れ即ち越後の信仰の塊りである、此巨大なる塊りを見ても如何に越後に本願寺の歸依者が多いかを知るに足るではないかと言ふた。

蹄塵（十二）

（關西みやげ）　市嶋謙吉氏談

◎京都の校友會

伯の旅行さるゝとなると到る處多數の校友之を迎へ次で校友會が開かれるが、伯は旅行中此校友を見、校友會に臨む事が娯樂の一つである。其上早稻田大學の校友は大市に於ては二三百を數ふると云ふ多數で、殊に伯が臨まるゝとなると非常に多くの來會者があるのであるが、伯が之に臨まるゝ態度は、全く他郷に於て同郷人に逢ふが如く、一家族を集めたる席に臨むが如く、如何にも寛いで打解けらるゝ有樣は、父翁が兒孫に對するが如きものである。今回の旅行にも到る處校友會が開かれたが、就中伯の最も感興を惹かれたは京都の校友會である。元來京都の地は、維新の頃伯が久しく遊ばれた處だけ、其感興を動かすべき古跡に富み、伯は非常に京都を愛して居る。斯る因縁のある處で家族同樣の校友會が開かれ、殊に其會場に充てられた處は、京都名流の別莊中最も趣味ありと聞こえたる大丸の主人下村正太郎氏の別莊であつたから猶更である。此別莊は小松谷と云ふ處にあるが、丸で高尾の如き形勢の地で、山巓蓬々の雲、澗底淙々の水、凡て自然の景物を用ゐ、特に全山他樹を交へず唯楓林の鬱蒼を見るのみなるに、其間或は高く或は低くゝ、瀟洒たる茅屋を具合よくあちらこちらに點綴してあつて、凡て茶室がかりの別莊である。元來此別莊は頗る由緒のあるものである。昔小早川隆景が此に茶室を建て、後鷹司家に歸し、鷹司家が紫野の大德寺に縁故があると云ふ關係から、何時の頃か大德寺へ寄附したものが轉じて大丸の隆盛時代に下村家の手に入つたと云ふ來歷で、言ふ迄もなく大德寺は昔から茶道の方では宗となるべき寺であるから、其手にあつたと云ふ丈け既に非凡のものである。且つ京都名園多しと雖も、多くは人工を加へたものであるのに、之ばかりは殆んど自然の儘を取りて人爲の加工を加へず、一体の結構高尾に比して規摸小なれども、錯綜せる山に一杯に楓樹の叢生する狀態は決して高尾に後を取らぬ趣がある。伯は此山莊へ來て頗る自然美に感じて、幾度か激賞せられ、我々が危險だからと止めるをもきかず、從者に擁せられ、雨餘のぬかり易い山阪を上下し、庭中隈なく逍遥せられた。軈て開會となるや伯は例に依て校友に對して趣味饒き慈愛深き一場の話があつた。此日餘興として大原女を

七八人連れて來て、物を賣る有樣を見せたのは頗る面白く覺えた。大原女が例の服裝で頭の上に箱を載せて山坂を上り下りして伯の坐所近く老幼の婦人七八人相携へて皆銘々一種の『へぎ』に物を入れて賣りに來たのを、伯はみんな買つてやると云ひ、且つ『へぎ』が面白いから東京の土產にとて買はれ、更らに伯から大原女に對していろ〳〵の問答があつて、遂に伯の所望に依り大原あたりに特有の盆踊りを演ぜしめた。處が婦人共は伯の前だと云ふので恥かしがつて歌を謠はぬのを斯くては面白くないと云ふので、漸くすゝめて老女に音頭を取らせ歌ひ且つ踊らせたが、斯る幽靜の地に斯る古風の盆踊を見るのであるから、全く大原へ行つた樣な趣がありて、成程京都あたりの校友會は京都式で面白いとは、伯のみにあらず一同の感興であつた。まあ今度の土產話は恁んなものであつた。(完)

嘘の名人

昔し徳川期の遊戯時代に、嘘のつき合ひといふことが流行し、巧みに本當らしい嘘をついて戯れたものである。此の嘘をつくのに、名人と云はれるやうなものも少からずあつたが、中にも齋藤文次といふ者が著名であつた。是れは虚月爺次郎と呼ばれて、馬琴の随筆中などにも載つて居る。其の嘘をつく方法は、或は口上でするこ ともあり、又之れを筆にすることもある。口上にてする一例をいへば、何月何日、自分の處で面白い會を催すから來いといふ宣傳をする。何しろ滑稽の人物の催しだからといふので、何れも面白半分に其の時刻に訪ねてみると、主人不在だといふ。卽ち會の事は全く嘘であつたのに、中には之を悟らずして、折角約束しながら、其の時刻に不在とは聞えぬなどいふて、腕まくりするやうのものもあつた。斯様にたゞ口上丈けの嘘は、其時限りで消えてしまひ、一向罪の無いものであるが、之を文筆に載せるといふ段になると、中々込入つて來る。今日でいへば、丁度新聞のやうなものを發行して、奇々怪々の事實や、世間の噂などを集めて、之を版にする。何分悠長の時代であるから、人は爭ふて其の讀賣を買つてみるが、注意して見ると、頭の字を皆んな集めてみれば、是は全く嘘だと讀めるやうな趣向を考へてある。又、昔はよくあつたことであるが、大食會といふものが、折々方々で催ほされた。それを利用して、左も誠しやかに、何處其處に大食會を開かれたが、其の大略を報道するといふ調子で、丸きり跡方も無い事を、如何にも本當らしく、出席者の名前から、其の住所、職業などを書き立て、扨て何某が鮨を二十八前食つたとか、蕎麥を三十人前平らげたとかいふ風に、專ら誇大の報道をした。當時の人々は、

動もすれば之に騙されて、それが眞實あつた事かの如く考へ、自分の随筆の中に書留めたり、又珍談錄などゝ稱して、漢文に書いたりする者もあつた。吉原の花魁が三つ兒を生んだなどゝ報じた爲めに、蜀山人が之を眞に受けて、其の狂歌を詠んだこともある。從て後世になつて、うつかりすると、さういふ嘘を事實と考へ、それに一杯食はされることが少なくない。此段は、其時分の俗説談などを讀む場合に、よほど注意せねばならぬことである。

△旅中の大隈伯（一）

雙魚堂主人談

◎先月大隈伯の旅行には我輩も途中から陪從したから、今日は伯旅中の話をやらう。伯の旅行は毎も大規摸のもので所謂大名行列の態度だ、殊に今回は夫人も同伴された爲め愈よ規摸大なるものであつた。元來が伯自身も大名行列と云ふ事を一種の道樂として居らるゝ。大坂で或會の席で、伯は其左右を取圍んで居る近親の連中を顧みて、『俺は貧乏ではあるが出掛けると毎も大名行列をやる、之は實に面白い。兎角金持は金はあつても使ひ方を知らぬ、凡て四疊半かなにかの流義だから不可ない』と云ひ更に同席の藤田傳三郎氏の息平太郎氏を顧みて、君等もその組であらう、と云つて笑はれた樣な譯て、伯の大名行列は全く伯の道樂である。

◎併し此行列仲々に金が要かる。今回の如きも高野山へ登らるゝ時、伯夫婦に對しては特に金剛峰寺から乘物を出したが、之に附從ふものが初めの程は十六七人であつたのに、追々に馳せ加はり遂に四十人計りとなり、イザ勘定となると皆伯の手から無差別に支拂はれるので、往復の駕籠賃丈でも二百五六十圓にも上つて居る如此伯の旅行は仲々王公貴人の態度で、腕車ならば百臺、駕籠なら三四十丁となるので、其費用の莫大なるは驚くべきである。が之は伯が故と道樂らるゝのではなく、自然とそう云ふ成行に至るのである、同時に其一行は頗る多方面にも中には學者も政治家も僧侶も藝人も貴夫人もあり、あらゆる方面の人々が加はる譯だから、宛も一幅の社會の縮圖とも云ふべく、頗る多趣味である。

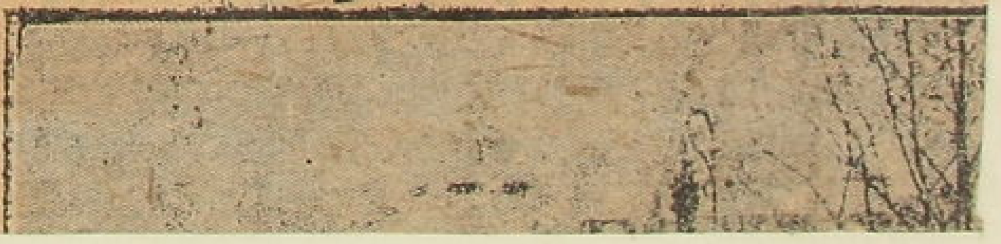
◎斯る大規摸の行列に元氣の旺盛なる伯が中心點となり、到る處非常なる歡迎を受けるのであるから、我々伯隨從

日

エフイ

博覽會畫報

國大奏樂所附近の雜踏



△旅中の大隈伯（二）

◎今回の旅行に就ては、伯自ら謂はれた通り、苟も時間さへ許せば二十分でも十分でも人の需に應ずる、折角來たものに其望を叶へさせてやらねば氣の毒だ。時間係さへ承諾すれば何處へでも行くと云ふ譯で、朝の八時から夜の九時迄殆ど十分間の休憩もなく、甲の會を了り馬車を促して乙に到り、更に丙丁と段々巡回して寸暇を得ぬと云ふ運動が二週間繼續されたのである。演說は大概日に五回乃至七回に亘り、突嗟に其場合相當の雄辯を奮はれ東京を發する當日から、激烈なる寒冒に罹り聲も能く出ぬのに、一向頓着なく殆ど半日の休みもなく、豫定を少しも變更せず、旅行を完結せられたるは通常人の企て及ぶ處てはない。特に之が齡七十有餘の人であると云ふに至ては、誰か其精力の絶倫なるに驚かざるものあらんやてある。

◎事實我輩は途中から伯の時間係をも引受けたので、時として隨分氣の毒に思ふこともあつた。乍併之を氣の毒と思ふは大の間違てある。元來伯の道樂は其精力の在らん限りを盡すに存するもので、十分間でも二十分間でも何等爲す所なく旅館杯で安閑たるが如きは不愉快の極で、寸分の時なき程活動さるゝのが愉快なのであるから、決して普通の人を以て律すべきものではない。從て斯樣の場合何等斟酌の必要なく若し斟酌すれば却て不興を招く。

◎伯今日の精力の點から遡つて三十年前位の伯を想ひ起し、即ち足等の健全なる時代を考ふべき一つの話がある。恰も大坂の或會に招かれた時、曾て新潟縣にも在任したとのある渡邊義郎氏が、現今税務の勅任官として大坂に居つて折節當日の會に出席し、我輩と隣り合せとなつて居たが、我輩に語るに

雙魚堂主人談

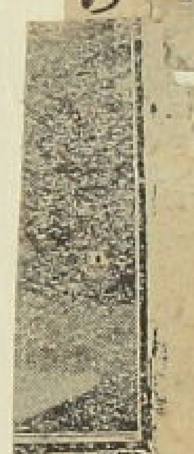
の面々は頗る陽氣で愉快措く能はざるものではあるが、併乍伯に一週間乃至十日間も隨從すると云ふとは非常に骨の折れるとてある。成程伯と一所に居る間は陽氣であるが、一朝伯と離れるとガッカリして二日位は休まねば用が足らぬ位に勞れる。處が御本人の伯は何うか、伯の精力絶倫なるは普く人の知る處てあるけれども、特に老て益々甚しいもので、家從等の言に依れば、今より四五年前迄は、譬へば時間が迫つて來ても急ぐには及ばぬと云つて居られたが、今度は時間前から伯の方から急がるゝと云ふ譯て、隨從のものは何れも奔命に勞るゝ爲体てあつた。

は『伯の精力には恐入つたものだ、先年大藏省に伯を大臣に戴き屬官たりし時自分は伯に隨行して靜岡縣の茶業撿査に出張したことがある。當時未だ交通不便にて時には乘物を降りて徒歩の已なき個所もありて、我々は草鞋穿きて隨從したが、伯は仲々の健脚にて、我々の方は大に面目を失したことがある』と云つたので、我輩に隣りの正席に居らるゝ伯に此話をすると、伯も大に笑はれた。伯が今の精力を以てすれば、當時凡ての點に於ても想ひ起されるのである。

▲旅中の大隈伯(三)

雙魚堂主人談

◎伯の昔に就て猶一つ面白い話がある。伯が比叡へ登られた時に、根本中堂の事務所に於て午餐の饗應を受けられた室に、杉聽雨先生自畫贊の幅が懸けられてあつた。之は一幅の狂畫で偉大なる巨漢が山に攀登するを、強力が丁字形の腰押しと云ふ一種の機械を以て巨漢を押して行く圖てある。伯一見、之は俺の圖だ、と云つて語らるゝ處に依れば、明治十一年御巡幸の際、伯も扈從され勅命に依て叡山へ登られた折、戲に其時の實景を描いたものだと云ふ事てある。今回伯の登山に就て寺の坊サンが紀念の爲め茲に懸けた譯であるが、今は管長の輿で登られたけれども、其昔健脚を以て登攀された俤が偲はれるので、伯も勘からぬ感興を催された。伯曰く『何うだ、此時分は隨分きかぬ氣のものであつたらう』



◎伯は傳敎大師の遺跡を訪ふと共に更に弘法大師の遺跡を訪はれ、即ち日本第一の名山なる

比叡、高野の二山を一股にかけ、兩方に於ける態度は、確に傳敎。弘法以上の歡迎を受けられた。高野山の管長の如きは仲々威嚴の高いものであつて決して或る部分以外に人を迎へる等と云ふことはないのに、今回伯の登山の折には其規定を脱して遠く迎へた如きは管長として空前の事で、從て其歡待の有樣を見るに祖師を遇するが如き態度であつた。

◎伯が高野へ行かれた時、講中のものが伯登山と聞て逸早くも馳上り、途に伯を擁して拜み初めた。餘り雜踏する爲に警護の巡査が制止すると伯は却て巡査を制し、折角の事だからと云ふので駕籠から降りて群集に向ひ、一々握手を與へられ、折節一行に加はりたる寫眞班員が伯登山の光景を撮影する時にも、伯は群集に、お前達も一所に寫せと云はれる。是等の仕振は群衆に非常なる感動を與へ、群衆は又熱誠を以て伯を遇した。群衆の中には餘りの事に感涙に咽ぶもあり、特に伯より握手を受けた手は郷國への大切なお土産だからとて、新しい絹手巾を以て其手を卷たものさへあり、一同祖師の再來だと云つて隨喜した。隨て伯は金剛峰寺へ行かれては、弘法大師の高座に坐し、座下に列する管長以下一山の僧侶に對して、一場の講話を試みられた。また其講話迄が、坊樣達が專門て研究しても知り得ぬ佛法の蘊奥を說かれた如きを見るに、二山に於て伯を歡待するに祖師と同一なる擧措に出てたるは、決して偶然ではない。元來伯は一種の傳道師に違ひない、宗敎を主としたものではないが、社會の凡ゆる方面に向て先導者としての勢力、位置はたゞ一世を風靡する聲望は、當時の傳敎、弘法に比して決して遜色あるべきものではない、從て伯に對する此種の歡待は不思議とするに足らぬと思ふ。

▲旅中の大隈伯(四)

雙魚堂主人談

◎伯の關西に於て到る處受けられたる盛なる歡迎を以て、之を歐洲の例に譬ふれば英の故政治家グラッドストンを想起せざるを得ない。グ氏の聲望は恐らく伯の今回の歡待を受けられた如くてあつたらうと思ふ。元來伯とグ氏とは其性格に著しい一致の點がある、偉大なる人格を有する點に於て、力ある雄辯家なる點に於て、大政治家たる點に於て、數理に長し、就中多くの場合に於て數字を用ゐた演說は聽衆をして倦ましむるものなるにも拘はらず、巧に數字を操縱して愉快に人に聞かしむる非凡の辯才を有する點に於て、頗る相似て居る。而して老而益々盛に、其晩節を全ふし、一世の聲望を一身に集中せしめた點迄よく似て居る。蓋し伯旅行中の關西の人氣は、未だ曾て見ざる處て、伯通過の節は道路に立つて居る人々が擧つて脫帽する、車夫の輩に至る迄そうだ。また到る處花輪を贈られ、伯の歸らるゝ時には、滊車若くは電車は花が充ち滿つると云ふ譯て、是等の盛況から考ふれば、グ氏との比較は益々適切に感ぜらるゝ。併し靜に考ふれば、伯はグ氏に比して幾分超絕して居る樣に思ふ。何となれば、伯は多面である。語を換て言へば、グ氏より融通が利くと云ふとて、此點に就てグ

氏は譲らざるを得ない。伯が如何なる方面に於ても相當の說を立て、人をして、恍として崇拜措く能はざらしむる手腕は、確にグ氏よりかも一段上のやうである。

▲旅中の大隈伯（五）

雙魚堂主人談

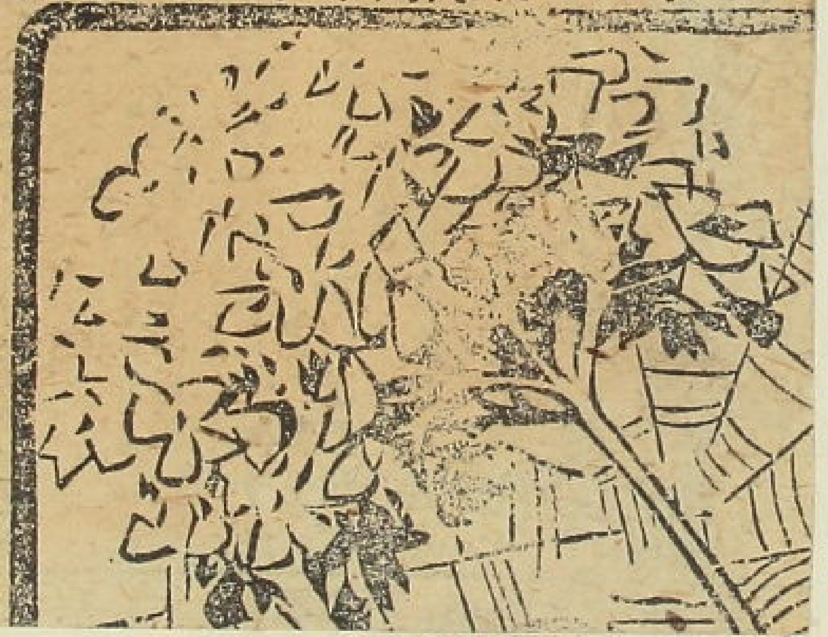
◎伯の演說に就て、教育、政治、經濟方面に至ては素より伯の本領なれば、敢て不思議とするに足らぬが、株式米穀取引所に到るも、宗教の本山に到るも、黒人が聞て恥しからざる說を立て、否寧ろ其道の人の考へ到らぬことを謂はれて敬服せしめらるゝ。卒爾の言論が黒人以上であると云ふは全く敬服の外はない。一例を擧て見ると、伯は化粧品組合員の大會に招待され、突嗟に一場の演說を試みられたが、よくコンな方面に迄も一種の說あるに驚いた。今其要領を摘んで云へば斯うだ。人間が萬物の靈たる所以は何？、是には種々なる理由もあるが、人為的の化粧をすることも有力なる一つである、獸類其他の動物は決して化粧をせぬ、されば文明の進むに從ひ化粧の技術もます〳〵進んで來る、化粧は、禮節にも關係あり、また心の美を助くるにも關係がある、印度などは化粧をすることを知らないから亡國の不幸に陥つた、併し心の化粧は外觀の化粧よりも大切であるから、決して忽諸に附してはならぬ、と云ふ樣な論旨である。咄嗟の思付なか〳〵面白く、且つ其言葉に人をして興奮せしむる點に絶倫の力がある。以て其一端を窺ふに足るものである。

▲旅中の大隈伯（六）

雙魚堂主人談

◎世或は伯の滾々盡きざる底の說あるを見て、伯の近傍には偉大なる學者を多く集めてあるから、內實それらに調べさせて自己藥籠中のものに化するのであらうと思ふて居るものが多いが、之は絶對に否定せざるを得ない。先般神戸で催された伯招待會の席上、服部知事の挨拶に、伯は教育上に趣味を持たれて早稲田大學の如き偉大なる學校を創設經營せられたるは、國家の利益頗る大なる處にして大に謝すべきである、併し伯自身も此大學の為に尠からぬ利益を得られたと思ふ、伯は現代稀有の雄辯家にて一度口を開けば名論卓說湧くが如き有樣あるて、是一に伯天才の然らしむる處ならむも、又一面其扶植せられたる背後の偉大なる機關より得らるべき利益であらう、と云つた樣の事で、大に其成功を祝福した、之は單り服部知事のみならず、普通恁う推測するのが當然だ。處が深く伯の實際を知れる左右の者から云へば、伯の為に一言辯したい位である。成る程伯が教育上に力を傾注して偉大なる成功を収められたは知事の云ふ如くであるが、其結果伯の智識がそこから得らるゝと云ふ如きは絶對にない。近傍の學者に說を作らしむると云ふが如きは斷じて見ざる處で、全く伯自身の胸臆に蘊蓄せらるゝものである。此點に就ては世間で考ふる如きものではない。

◎伯は這回の旅行に就ては、實に空前の人氣を以て歡迎を受けられたが、之には何か原因があるか、と。それは確に種々なる原因がある。第一維新の元勳追々凋謝して幾許も殘らぬ樣になつた事。第二に伯に政黨の關係なき事。第三伯は如何なる招待にも人嫌ひされぬ事。第四伯は長く野に在り不遇の位置にありながら遠大の志を以つて間接に國家の大援助をなしつゝあることなどである。此外に一つ大原因がある。伯は人も知る如く言論に鋒芒を顯はすことが特色で、動もすれば要路の大臣に向つても果し状さへ附け兼ねぬ程の峻烈なる態度が特色であつた。之れ伯が世上より尊ばれる有力なる條件ではあるがまた人の恐るゝ處も此點で、從來役人の如きは政府若くは長官の手前として



伯の演說には避けたものである。然るに近來伯の演說は、殆ど老熟の域に達し、其說に力あるは今も變らぬが、露骨の角がとれて、同時に熱烈の中にも謙遜の態度を維持せらるゝに至つたにも大關係がある。兎も角伯這回の歡迎は實に空前の盛況であつた。

走馬燈

雙魚堂主人
（禁轉載）

△前嶋密男と語る（一）

◎江戸遷都の建議

維新の初年、まだ世人が何等の注意もしなかつた時分に、第一に**江戸遷都の議**を唱道した**見識家**が**前嶋男**であつたと云ふ事は、知らねん人が多いやうだ。余は嘗て男に問ふに此事を以てし、初めて事情を詳らかにするを得た。明治元年正月大久保公の浪華遷都の奏議あるや、男は之を讀み、直に遷都の地は浪華にあらず江戸なりと痛論して一書を公に送つた。當時は江戸の情勢平穩ならず、人心頗る激昻の折柄なれば、氏は深く之れを秘して人に語らず、只フトした事から仙臺の岡千仭に其草稿を見せた丈であつた。が其後間もなく、朝廷に於て江戸遷都の議は決せられた。

◎九年目に分かる

明治九年の春、或日の事、當時內務少輔たる男は、內務卿たる大久保公と共に東京朱引內改正、即ち市區改正の事を協議の際、**大久保公懷舊の情**に堪へざる面地にて『維新の初年予が奏議したる浪華遷都の策を痛く反駁して、遷都の地は江戸に如くものなしと論して、予の所へ一書を投じた江戸人があつた、そこで其者の姓は確か君と同一の前嶋であつたが名は來輔と云つたかの樣に覺えて居る、其事に就ては史に錄し其人に對しては大に謝すべき筈であるが、惜しい哉其書を紛失して、誰であると云ふ事が明瞭分らぬ』と云つて、切りに讃歎して居られた。其時前島男は、アノ通り謙遜の人であるから、默つて居らうかと思つたものゝ、**餘りに快意の制し難くて**、『其來輔こそ只今此處に在る前嶋密であります』と云つた處が、公はヂット前嶋の面を注視して居られたが、軈て肅然其身を起し、卓を打つて『吁嗟君であつたか、自分は實に迂濶であつた、君恕して呉れ、幸に君の手許に其草稿があるなら、寫しを與へて呉れ』と謂はれたそうである。但し此書の寫しは、男より大久保公へやられぬ中に、公は不幸兇刃に斃れられたが、恐らく此一齣は**男の一生中、最も會心の事**たるは勿論、歴史上の大事實として記憶すべきことであらう。因に男は幕臣當時は前嶋來輔といつて居られた。

走馬燈

雙魚堂主人
（禁轉載）

△前嶋密男と語る（二）

◎遷都を論ずる書（上）

今試みに、嘗て前島男より示された遷都に關する草稿を抄錄して見やう。

大久保市藏君座下 頃日先生遷都の御奏議を傳ふる者有之、拜讀仕候、御見識の卓越にして、御議論の盛大なる實に拍按讃歎仕候、乍去、遷都の地は浪華に如かずとの事に於ては、甚感服不得候、願くは尙一段の御英斷を以て、遷都の地は江戸に御修正相成度希望仕候、遷都の地は江戸に如かずと御立議不相成ば、或は關東奥羽は今日も猶王政を施し難き地とも御思惟被成候には無之哉、若し然りとせば殊に感服不仕候、目下江戸に於ける士輩の擾々たるも、關東奥羽諸藩の紛々たるも、皆貴藩又は長州藩の其名を王師に藉りて虎狼の慾を肆にするに非るかと疑ふに因由するに他ならずと存候、是故に彼等をして眞誠に王政維新の大業を被擧候廟謨なるを明了せしめ候はゞ、孰れか敢て王師に抗し可申や、遷都の地を江戸に定めらるの大英斷有之、鳳輦東下の大令一下せば忽ち關東奥羽の山巒は霜雪を消融して春風和氣を發すべく、群生歡呼、萬歲聲裡に鳳輦を迎へ奉る準備に取掛可申候、即ち是、先生の所謂、天下悚動する所の大基礎を建て、皇威を洽の內外に輝すものにして、且東北萬生の苦難を按撫し、併せて維新の治を速ならしむるの善政大策と奉存候、今の時に方りて、江戸遷都の議を建る如きは、或は輕擧なりとの非難可有之歟、然れども是等は俗論なるのみ、但其俗論を避けんと欲せば、暫く其截定の日を待て遷都すとせば然るべし、遷都は國の大事なり、深廣審討內治外交最良にして萬世不拔の地を選擇するは實に肝要と奉存候、而して江戸遷都の事は其截定の一上策可有之候、因て尙左に江戸遷都の利有りて、浪華の利無き要項を副陳し、御參照に供候、謹言

明治元年三月十日

江戸寒士 前嶋 來輔

走馬燈

雙魚堂主人
（禁轉載）

△前嶋密男と語る（三）

◎遷都を論ずる書（下）

前嶋男の、遷都の地を江戸に定むべしといふ意見は、本文に依りて委曲を盡して居るが、此外に本文に添へた副陳書といふがある、それは左の如し、

副陳書

一、太政府所在の帝都は帝國中央の地ならんを要す、蓋し蝦夷地を開拓の後は江戸を以て帝國の中央とせん、而して蝦夷地の開拓は急ならざる可らず、且此開拓の事務を管理するは江戸を以て便なりとす、浪華は甚だ便ならず

二、浪華は運輸便利の地と稱す、然ども是和形小船の日にして稱するを得べし、今は西戎大艦の時となる、運輸の便とは之を容れ及び之を修理するの便有る地を謂ふなり、而して

浪華は之を容るべき安全港を築造し難し、又修繕の便無し、之に反して江戸の海たる已築の砲臺を利用して容易に安全港を造り得べし以て大艦巨舶を繋ぐべし、又横須賀は近きに在り、修繕の工も容易なり

三、浪華は市外四通の道路狹隘にして郊野宏大ならず、將來の大帝都を置くべき地にあらず、江戸の地たる八道の道路は廣濶にして四顧の雲山曠遠なり、地勢の豪壯なる風景の雄大なる、實に大帝都を建置するに必適の地なり

四、浪華の市街は狹小にして、車馬馳逐の用に適せず、王公又は軍隊の往來織るが如きを容るべき設に非るなり、之を改築せんか經費の大なる、民役の多き測るべからず、江戸の市街は彼に異なり、一の工事を起す無くして可なりとす

五、浪華に遷さば宮闕、官衙、第邸、學校皆新築を爲さゞるべからず、江戸に在りては官衙備り學校大なり、諸侯の藩邸、有司の第宅、一工を興さず皆是れ已に具足せり、宮闕の如きも目下特に新築を爲さゞるも少しく修繕を江戸城に施さば、以て充つるに足るべきならん歟、今の時に際しては、國費民役最も愼慮を要せざるべからず

六、浪華は帝都とならざるも何等の衰退を憂る事無く、依然本邦の大市なり、江戸は帝都と爲さゞれば市民四方に離散して寥々東海の寒市とならん、江戸は世界の大都に列す、此大都を以て荒涼吊古の一寒市となす、甚だ痛惜に勝さるなり、幸に帝都を玆に遷さば、内は百萬の市民を安堵し、外は世界著名の大都を保存し、皇謨の偉大を表示す、國際上及び經濟上の觀察に於て、是亦輕々に附すべき問題に非るなり

走馬燈

雙魚堂主人

（禁轉載）

▲前嶋密男と語る（四）

◎邸宅賣却の失敗

余去卅四年四月前嶋男と共に旅行し、一夜旅窓の徒然なる儘、男と共に長時間に亘つて種々の談話を試みた事がある。其時第一話頭に上つたのが男の邸宅賣却の失敗談であつた。男曰く、自分は邸宅を賣るには隨分度々失敗をした。最初九段附近の番町に居た頃、深川へ移轉せんとて家を賣らうと思ふて居た折、後に千里軒のギヤタ馬車屋を開業した男が、其前から宮内省の第一御者とならうと云ふので、外國へ修行に行き歸る匆々家が焼けた爲め住宅に苦しみ、フト自分に遇ふた時切りに訴へるから、それは面白い、自分の宅を五百圓なら賣るかと云つた……此時自分は五百圓の金が入用であつたのだ……すると彼れは是非お願ひすると云ふ事で、賣買を取極めたは良かつたが、扨て仲々金を渡さぬ、段々聞いて見ると、ヤツは買うと直に二千五百圓の抵當に入れて置いたには驚いた、遂に永い間に漸く四百圓許り取つたと云ふ馬鹿氣た仕事である。

◎乱臣賊子呼はりをさる

それから永田町（今岩倉公の邸）の宅である。**改進黨創立**の時分には、**政府**よりは**亂臣賊子**など云はれて、**學校へ通學**させて置く**娘**どもゝ學校で朋輩になぶらるゝので、時には泣いて來る樣の事もあつた。それも其筈永田町は役人の住宅が多數を占めて居るから、學校の朋輩も多數は亂臣呼ばはりをする連中の子供てある。そこで聞く度毎に癪に障つたので、何處へか移轉する心持になつた。

◎統計思想

その時胸中に描いた案、所謂其時分の統計思想と云ふものは實におかしい、其時分に**勅任官は五十人**位さへない、高等官と云ふても知れた數である、然るに此連中は何れも邸宅を持つて居る、そこで考へたのには、ナンデも價などを待て賣らうと云ふてもなかなかに賣れない、**先づ自分の生計**より割り出して見て一ト通りの生計を營み得ればそれにて滿足する外はない、價もそれより割出すより外はないと云ふので、先づ差當り膝を容るゝに足るの家を借り、これに一ヶ年要する經費の元金として三千圓、それから當時は改進黨の遊説時代で、義理にも外へ出歩かなければならぬ、名山大川を相手に一ヶ年を送る經費が物價の廉き頃であるから月五十圓として一ヶ年六百圓、此元金六千圓とし、己れの邸宅を九千圓に賣ればよいと云ふ斷案を得た。

走馬燈

雙魚堂主人

（禁轉載）

▲前嶋密男と語る（五）

◎岩倉公購ふ

然るに當時岩倉具視は重病にて、聖上より御見舞金一萬圓を賜はつたが、岩倉は、成るべく赤坂御所近き處に居つて、時々宮中へ伺候したいと云ふ意志て、附近に適當の家あらば恩賜金を以て購はんとて、肥田濱五郎が奔走中であつた、偶ま肥田が自分の宅へ來た時自分は邸宅も九千圓ならば賣却すると云ふ事と、九千圓必要なる理由とを語つた處が、肥田は直ちに承諾し、遂に賣却の事に取極めた、扨て愈よ引越に臨んで更に精査を遂げて見ると、九千圓丈では引越の入費がない。そこで恩ふには岩倉は一万圓の恩賜金があつたと云ふから、殘金千圓をも申受けやうと云ふので、更に肥田に談じ、其結果移轉料として五百圓を追加せしめた。然るに具視公は遂に移るに至らずして薨去され、**自分の賣つた邸**は**今の價格**は（卅四年）**十五萬圓**位だと云ふ事だ、實に馬鹿氣な事をしたものさ、アハヽヽ

◎井上侯悔む

此話の序に男は語る。此頃大隈井上の二氏と益田孝に招かれた時（偶々伊藤内閣繰延一件に付大惱みのときなりし

かば世人は井隈會見には重大の意味ありと噂させり）、いろ／＼の昔し話しも出たが、井上の云ふには、今考へて見れば實に馬鹿なことをした、當時の宅を政府へ返上するのではなかつた、今では百萬圓の價があると云ふた。仔細を聞いて見ると、**井上**は**當時**

今の兜町に居つたが、當時は實に草深い處で、鎧橋のあたりは**鎧の渡**と云ふて、蘆茅の深きと云ふ計りなく今の海運橋は**海賊橋**と云ひ

あの邊一萬坪位は一ト邸て、今の**株式取引所**邊には**大池**があつたので、井上も常にコボシて居つたが遂に政府に返納した。政府は其の後

三井に拂ひ下げ、今現に三井の所有となり、鎧橋と云ふ關係から兜町と云ふ名も起り、東京第一の繁華となつたので、井上が大に悔やむのであるが、併し三井が持つたればこそ、兜町にもなり百萬圓の價にもなつた譯であると云つて一笑された。

▲前嶋密男と語る（五）

雙魚堂主人（禁轉載）

◎故關口隆吉の話

何かのことから故關口隆吉の話が出た。男曰く、幕末の當時、洋學などして居るものは、攘夷家に忌まれ、何時暗殺に遭ふか幾んど旦夕をはかり難き有樣

て、自分の如きも度々危險に遭たが、幸に助かつたのは關口のお蔭である。又幕府に用ひられたのも關口與つて力あつた譯である。關口は漢學そだちの精神家で、西洋風の思想のあつた譯ではないが、經驗の上より一種の考を有して居つた。それは一國の大局に當るに就ては、**是非外交**の衝に當らざるを得ない。それにしてはナントしても**洋學の心得**が無くてはならぬ、と云ふ考へであるから、表面は激烈の攘夷家であるが、なか／＼面白い味があつたので、始終余を庇護して呉れて危難を免れたとも度々ある。此の關口は實に感服の男で、それに就て逸事がある。

◎切腹の覺悟

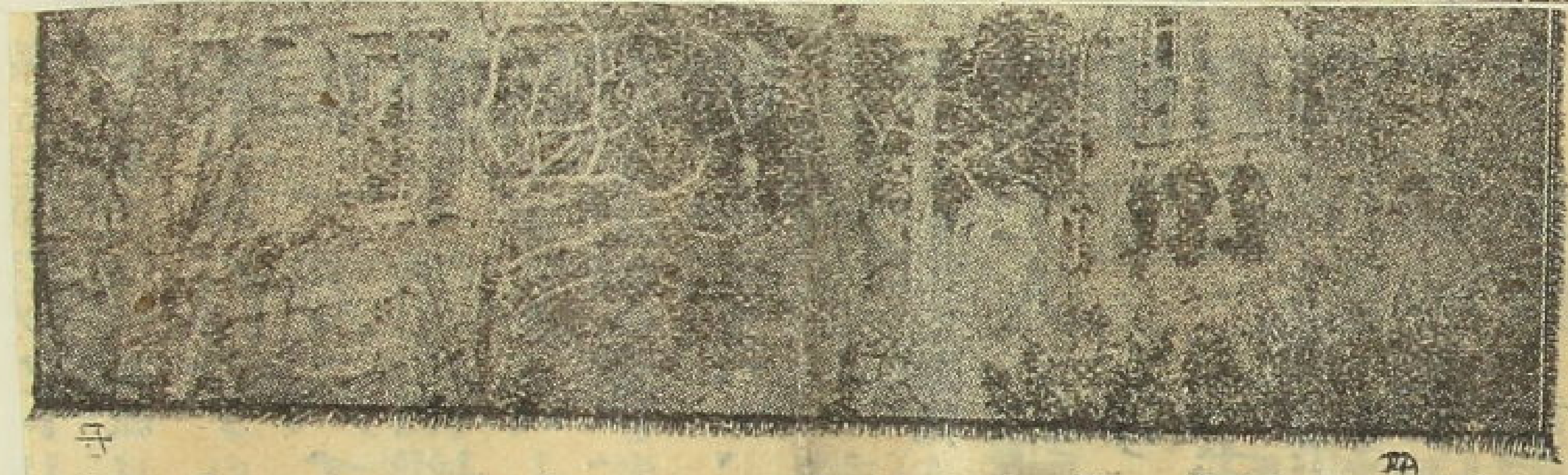
徳川氏が版籍を奉還した當時、刻下の事並に善後を策する爲め、**集議院**を開成所に開いて大いに討議すべしとの議論神田孝平、津田仙、加藤弘之等の間に起り、余も相談を受けた。余はこれに不同意であつたが、此事を關口に告ぐると、關口は偶々親の喪に居り、殊に自身は、激烈の感冒に罹り、或は生命にも關する程の重体であつたのに、之れを聞くとそれは一大事と直ちに牀をはね起き、**月代**を剃り沐浴して**頭髮**には**香**を**薫**し籠め

匆惶開成所へ出かけた。其意若し衆議恭順に反する説に決しもせば、自ら君前に其の不可を鳴らし**切腹の覺悟**を、早く此時に決したのだ。

◎「イヤイ」を習ふ

關口は隨分血を嗜む男で、彼れが殺させたものは決して少くない、併し自分の覺悟もなか／＼立派なものであつた。余は斯る男と交つて居つたから、其の

覺悟は勢ひ之れに倣はざるを得ない。そこで余は擊劍の術に拙ないから、到底人と互角に戰ふことが出來ない所から、『イヤイ』を習つて、**長刀**を**拔**く法を覺へ



組合

波平某の作つた圖外れの長刀を常に帶びて居つた。拔き合ふ時には此方が寸尺が長いから刺し違ふには確に對手より一段便宜と云ふから選むだので、曾て此刀を帶びて保坂貞吉を訪ふたとき『アナタはこれが拔けますか』などひやかされた事もある。又當時は余のみならず、武士は皆な

に骨を折つたものである。それは何故かと云ふに、切腹のときに成る丈苦痛を感ぜぬには、**切れ味**のよい**身**を要するからであつた。

▲前嶋密男と語る（六）

雙魚堂主人（禁轉載）

◎大書院で競賣

前嶋老曰く、維新匆々隨分奇談もあるが、萬事紛々の折柄とて、今から考へると幾んど馬鹿々々しい事が澤山ある、朝廷にて鐵砲三千挺を要すると云ふので、獨逸の商人に注文した、其價が一万五千圓である。然るになか／＼金が辨じないので、三分の一を金で渡し、殘金は品物で渡すと云ふ窮策を行つた。

其品物とは何んぞと云ふに、徳川氏の什器である。當時は城内に澤山あつたが、數千點の品物を

大書院に陳列

して、サアこれを一萬圓の方に引取れと云ふ事で、商人も承知したが、余も一見した、イヤなか／＼澤山の品數で、蒔繪ものや陶器や書畫や寶に目を驚かす程のもので、今日より見れば一品で一萬や二萬の價する品が澤山あつた樣に思はれる、實に惜しい事をしたものである。併し陳列品の中に

刀劍類は一もなかつた。

當時刀劍のみ獨り價を有して居つた事が分かる。

◎三たび泣く

前嶋氏が徳川龜之助氏を伴ふて今の宮城、即ち徳川氏の居城に參内し、啼泣三度に及んだと云ふ話しは一二度聞えたこともあるが、今度は委しく聞くことを得た。龜之助氏は今の徳川家達公で、此時は俗に數へ年の七歳であるから滿六歳にもならない小兒である。今も奇麗な人だが當時はまことに愛らしい小供であつた。

聖上に謁見

の爲め登城することになつたに付、此生父田安中納言と公用人なる余は附き添へ、左右の手をひき今の二重橋の[illegible]り登城したが、小兒の頑是なき曾ては己れが家なりしことも知らで、田安中納言をかへりみ『おとつさんこゝはどこ』と尋ねられし時のむごたらしさ、

腸九回の思ひ

ありて、落涙を禁し得なかつた。

◎玩具を賜ふ

それよりも胸間に往來して心配に堪へなかつたは、朝廷の此の小兒に對する待遇如何と云ふ點である。そこで大玄關の處へ行くと、坊城大納言出て迎へられ、式壇を下り、莞爾として龜之助氏を抱き上げ、其儘奥へ伴はれたので其の光景にて先づ一ト安心した時も流石に泣いた。扨て御前の御覺えは如何と、其場へ伺候する事の出來ぬ身の、誠に心配に堪えなかつたが、暫くして龜之助氏は機嫌よく出て來られた。こ れもその筈

陛下より大なる折敷に犬張子、鳥などの玩具

を山の如く積むで賜つたので小供心に喜ぶも道理である、これを見た余の喜び喩ふるにものなく、三度泣いたと前島老は説き終りて懷舊の情に堪えざる如く、鼻紙を取出して鼻をかまれた。前嶋翁の話は隨分澤山あるが今回はこれ丈として、更に他日を期して紹介しやう。(完)

反故趣味

いふ話になつて、氏は突嗟の間に二三時に亘つて色々所藏品なども出し示して語られたが流石通趣饒かである。か[illegible]其の大要を筆録する。

△反故趣味は貧乏趣味　全体反故趣味は貧乏趣味である。兎角金持の堂に入らぬものを、貧乏人が痩我慢に、弄むで、此方に却つて趣味があるなど云ふて强て理窟をつけ、金持と對抗を試みんとするは馬鹿の沙汰のやうにも思はれる。金持の弄ぶ高價のものに無論趣味なしとも言はぬ、而しそれと同時に反故とすべて一顧の價なしとして紙屑とすべきでない。否、吾輩も反故になか／＼の趣味あることを主張する。但しすべての反故に趣味があるとも云はぬ。反故の性質によりて趣味があると云ふわけであるから誤解しては困る。

△反故の範圍　併し反故と云ふてもなか／＼範圍が廣ろい。半切に無意味な事を樂書きした切りはじでも、經文の切れたものでも、手紙の樣なもの、板におしたもの、草稿の類のごときもの、皆な反故と云へる。實はこんな具合で、反故であるとないとの經界を定むるは一寸一言で言ふわけにゆかぬが、先づザット云ふと裝して幅となし額となし卷となし帖となし若くは冊子となすことの出來ないものや裝飾にならぬものを反故と呼んだらおよその見當がつくであらう。尤も斯樣に云つても反故で表裝されて居るものもいくらかある。例へば手鑑類のごときものは名家の斷簡零墨を集めて帖としたものである。又此の部類の斷簡零墨を取つて幅などにしたものも無いでもないから、無論取りぬけてあるに相違ないが、大体の處幅にもならず額にも作れない、本にも卷物にもならないものは先づ反故として取扱はれて居る。縱へ表具なぞしてあつても一定の床にはまらず、たゞ保存のために、そうしてあるものと、大体反故と見做して論ぜんとするのである。

△反故は鷄肋の如し　反故は大体斯樣のものとして、さて反故にはどんな趣味があるぞと云ふに平たく喩ふれば鷄肋の樣なものである。魚のアラ煮の樣なものである。鳥や魚のよい處も引離した後であるから其の殘つた骨は惜むに足らない樣なものゝ、さて骨にからむで居る幾許の肉がなか／＼棄て兼る味を有して居る。寧ろ身おろし立派に料理をする其の部分よりも佳味を有して居る。但し此の部分を喰ふにも小笠原式に上品に喰ふことが出來ぬ。時には体裁搆はず、指で手傳つてカブリ付くにあらざれば味はひ兼ぬるが味つて見ると實にうまいので、喰道樂の通人などは寧ろ此の骨付を愛するのである。反故の趣味と云ふは大体こんなものである。

[illegible]泡録（三）

（市島謙吉氏談）

△反故趣味（二）

△天眞流露の趣味　全体書にしても、畫にしても、天眞流露の處に一種云ふべからざる味の存するものである。此の天眞流露の味は筆者が身搆へをしないで興到り筆隨ふ時でなければ起らぬ者である。人に見せる爲めに書くものになると、どうも人情として身搆へをする。人の批評

を見や角案ずると、興到つて書くにしても、どうも天眞流露の味が無くなるものである。そこになると反故として見做さるべきものゝ方が天眞流露の味をよく發揮して居る。根が人に見せる爲めに書くのでないから、勝手氣儘に思ふ存分に書くから、全く赤裸ゝである。即ち草稿や下書の方がよく出來て、清書の方が却つてわるいと云ふ例の時ゝ起るのも此のわけである。支那などでは天子へ奉る奏議の本書に往ゝ抹殺したり側らに直したりなどしてあるものが墨帖に存して居るこれなども清書の方よりは草稿の時の書の方がよい時分に草稿の方を呈するからである。士大夫が衣冠束帶して朝堂に立つ其有さまを見ると言語を苟くもせざるは勿論、咳嗽をも忽かせにせぬ、如何にも其の態度は高崇で一種の美觀には相違ないが、さて趣はどうかと云ふと寧ろ私弟に平服の儘、氣儘に坐臥し勝手に談笑し、天眞を赤裸ゝに發露する時の方が誰れが見ても趣味を感ずる。書畫なども恰かもこれと同じく、立派に表裝して床に掲ぐる書畫は堂々として居るには相違ないが、矢張裃つきでどうも趣味を缺くものが少なくない、反故部類を私宅で足を投げ出し顏を崩して笑ふと云ふ具合に遠慮會釋なく秘密でも何んでも思ふ存分さらけ出して書くから少しも衒氣と云ふものがない、全く其人の面目を躍如として現はすから隨つて、趣味を深く感ずる事になる。

▲春畝公の畫蒼海伯の今様　全体反故と云ふものは、扨それ自身反故たる運命をもつて居るものばかりではない。所有者がそれを重んじないから反故となるものがいくらもある。たとへば懇意同士の間に往復する書簡、若くは詩歌の應酬、或は朋友に書き示した書のごとき類は對手が友人であるから、重く思はぬ。隨つて一見の後委棄することが多い。局外者から見ると珍重すべきものが其中に必らずいくらもあるに相違ない。殊に同人間の往復應酬などには最も天眞流露の味の存するものであるから、無論油斷のならぬ反故が多い此の方面に存する。懇意同士の間に行はるゝ應酬には、其人が其の位置見識の上から表向きあらはすことを欲せざるものをもあらはす。これが同人間の情誼より生ずる一現象であつて、往ゝ其人の秘密が暴露される。これがまことに趣味の深いものである。所謂る秘密と云ふのは他人の知らないその人の事實例へば謹嚴の人と思ひの外女色を好むとか、花柳病を患へて居るとか云ふ事實の秘密ばかりではない。畫など書けぬ人と思ひの外畫を書くとか、漢詩の外出來ぬ人と思ひの外しやれた僞歌迄出來るとか其の人の本領とせざる秘密までもあらはるゝのは全く同人間の交際上から來るので、局外者から見ると實に趣味ある珍物であるが、さて朋友同士も互ひに重んじないから、終に反故として葬られ了るものがいくらもある。伊藤春畝侯の詩書はいくらもあるが、富士其他の畫を求めるとなると待合茶屋でも尋ねないと無い副嶋蒼海伯の六朝風の漢詩や漢語の幅や額もいくらもあるが、同人の間を漁らないと今様などを書き散らしたものは見當らぬ、さて此の春畝侯の畫や蒼海伯の今様は餘りうまくはないが、なか〳〵棄て兼ぬる趣味はある。

早稻田大學圖書館

蟹泡録 (十四)

△反故趣味 (三)

(市島謙吉氏談)

▲反故に潛める秘密　どうも人には隱れた事を見たがり、秘したるを知りたがり、稀れなるしなを欲しがる癖がある。而して此の欲望はいろ〳〵の場合に於て反故により充たさるゝと云ふわけは、此般の者の多くは反故中に存するからである。これも亦反故に趣味ある所以である。例へば世に公然と現はれない性質の書類の一二を擧げて見れば、密書は其の性質上世に公けにさるべき者でないとは言ふまでもない。女流の筆も概して世に公けにされない。紫式部のごとき才學高き女流の筆の跡が世に傳はつたならば、頗る趣味あるものであらうが殆んど一つも傳はつて無い樣である。淀君の書などですら、時代がそんなに隔たつて居らぬのに餘り多く殘つて居らぬ。夫婦間の書牘を始めとして、すべて家書は一家の私に屬するものであるから、これも其家に埋沒して終に反故となつて仕舞ふ運命を有するが、名門の家書には隨分珍とすべきものがあるは論を要せぬ。例へば冷泉家の反故の中には定家の書があるに相違なく乾山と光琳とは兄弟であるから、乾山家の屏風の下張などを撿索したら光琳の書が一枚や二枚は出て來る筈である。賴家の反故の中には春水や山陽の書があるに相違ない。情夫と情人との間の往復書のごときは、秘密書の部類であるは論を要せぬが、これは趣味のあるものだ。而して其の人物が偉人であると一層趣味が深い。前年高山彥九郎が情婦に與へた書簡がその情婦の返書と共に一軸となつて居るのを見たことがある。高山のごとき木强漢の艷書であるから愈ゝ趣味を深く感ずる。すべて夭折の人の書は多く世に傳はらない。而して稀れに存するものは反故として存するのであるが、此類に於ても稀覯のものたけに、なか〳〵深く趣味を感ずる者がある。自分の所藏に就て一例を擧れば、眞淵門下の三才媛の隨一と云はれた油谷倭文子の書簡や、詠學のごときは、其の家に僅かに傳はつたもので、外を尋ねても無い。(これを見よとて一卷を出し示さる)。これも其家の紙屑籠に入れられんとするのを、ヤツト助けて貰つたものであるが、實は倭文子の書の確かなものとては、これより外に殆んど無い位なものだ。何んにしても歌も書も大家を凌ぐ腕前はあるが僅かに二十歳位で歿した婦人であるから、其の筆の跡が外に流布する筈は無いわけた。さてまた不遇の人の筆蹟なども、前同様で世に持て囃されない、爲めに、矢張り反故たるの不幸を免かれないが、此等の人の内には却つて超絕した人物が少なくない。隨つて其作品にも超凡の趣味があるが、これも反故より捜がし出すより外に詮方がないのた。扨又忌諱に觸れた人、刑辟に觸れた人、籍歿などに遭つた人の墨蹟も多く傳はらないと云ふわけは、繫累を恐れて所持して居る者も、故らに棄るもあり、籍歿などになると家産と共に取り上げられて仕舞ふのであるから、此類の人の墨蹟は傳はらないも道理である。

蟹泡錄（十五）

△反故趣味（四）

（市島謙吉氏談）

▲竹内式部の墨蹟　さて刑辟に觸れた人と云ふても必ずしも常事犯に限らない。別して徳川時代などでは國政を是非した爲めに刑を受け、或は豪奢を極めた廉などで籍歿を受けた人なども少なくないから、其人の墨蹟に趣味のあるのも無理は無い。殊に筆者が數奇に罹つた事跡が手傳つて一層の趣味を添へるものである。一例を擧ると竹内式部のごとき大人物の墨蹟は珍とすべきであるがさて其の物が極めて稀れであると云ふも畢竟累を恐れて當時棄てたからである。最後に尚ほ一つ擧ぐべきものがある。それは禁忌書である。これは前のと違つて物それ自身が公けにすることの出來ない法度のものである。例へば時の權貴を嘲つた詩文とか、刺諷刺畵などの類或は風俗を壞亂する類の書畵の如きは皆な此の部類に屬するものであるが、此等は無論趣味のあるものである。しかし概して反故と見なすべきものゝ内に存する。

▲日本外史の草稿　反故中に尤も多數を占むるものは草稿であらう。草稿と云ふても書の草稿ばかりでない。畵稿をも包含する。粉本のごときも矢張り畵稿と同樣に見てよからう。數が多いから無趣味のものも澤山あるに相違ないが、面白いものも草稿類に尤も澤山ある筈だ。全体筆者の眞面目は尤も草稿に就て見るべきであること、前に云つた通りであるが、こゝには今少しく委しく云ふて見よう。例へば著述などに就て云ふと作者の苦心の跡や、思想の經路は、尤も分明に此の草稿で見らるゝものである。それが實に面白くつて堪らぬ味があるものだ。山陽の日本外史の草稿などを見ると兵數などがいろ／＼に書き改められて居る。最初三千騎など書いてあるのを五千騎と改めたり、晝の戰ひとして書いたのを、夜戰と改めたり、文字もキツチリ箝まる字を得るまで二回も三回も改めた痕跡が存して居る。さてこれを見ると山陽が宛がら畵を描く樣に、此の塲合は夜戰でなければ趣きがない。幾千と云ふ數では工合がわるいと云ふ塩梅に、種々苦心して意匠を凝らしたことが眼前にほのめき、版本の日本外史を讀むより、遙かに興味を感ずる。

▲万葉略解の草稿　又こゝに千蔭の反故の大巻物となつて一巻ある。（出し示さる）。これは千蔭の縁に感心の心がけのあるものがあつて祖父のあらゆる反故の廢紙とならんことを恐れた一巻に表装したものであるが、此の中に名高い万葉略解の序文の草稿が載つて居る。版本の序を讀むで見ると苦もなく書いたものとも見ゆべきが實は此通り苦心の餘に成つたものである。これを見給へ此通り一行に三四ケ所位づゝ眞黒に直してある。幾んど全稿完膚なしと云ふ有樣た。これをよく／＼稽査すると、千蔭の思想の經路が分明に知れてなか／＼に興があるが、また外に話もあるから、こればかり細かに研究することをやめて他に畵稿の例を擧げよう。

▲光琳の粉本　昨年の秋頃上野の美術協會の展覽會に參考品として小林某の藏品で光琳の扇面屏風が出て居つた。それに伴ふて光琳の粉本一巻が陳列されてあつた此の粉本は光琳が此の屏風を書かんとて宗達の畵をあつめた稿本で抱一が藏したものと傳へて居る。恰度屏風にある圖が此の粉本中に載つて居つて彼是對照することが出來てヒドク面白く感じたが、粉本から本圖になるまでに、光琳が種々工風を凝らした工合を見るには實に此の粉本が非常の助をなして居る成る程本圖の方が流石に工風が届いて居る樣に見受けたが、併し粉本には粉本相應の趣味があつて、本圖よりも又よい處がある樣に覺へた。どうも極彩色などを施すと骨法が多く沒却されて仕舞ふものであるが、粉本には骨がありありと見へて居るから本圖よりも却つて面白い處がある。

蟹泡錄（十六）

△反故趣味（五）

（市島謙吉氏談）

▲五百羅漢の稿本　これに就て思ひ出したことがある。世に存する尤も大なる粉本は東福寺の國寶となつて居る兆殿司の五百羅漢の稿本であらう。これは表装を施して三十餘幅になつて立派な箱に入つて居るから、反故とは云ひ兼ねるが寺では今まで餘り重んぜず、人にも示さず、反故の樣に考へて居つた樣たから、反故論の材料に持出しても強ち差支はあるまいが、一昨年の夏寺に懇請して初めて全部を一覧したが實に敬服した、これは粉本とは云ひながら、塗抹など加へた所はなく、彩色こそなけれ實に立派なものである。これを見て金碧燦爛たる本圖を見るよりも、一段面白く感ずるのは、雄健なる筆意が赤裸々に見へる點であつて、筆者の技倆がいかにもよくわかる點に存する。本圖は金碧燦爛で目が眩せられ、それに塗料に骨法や筆意が沒却されて居るから、われ／＼ごとき凡眼では却つて妙處を辯じ兼ぬるが、此粉本を見ると其の大手腕が知れ、羅漢の面目が一段生氣ある樣に感じた。反故と云ふて輕んずるの非は申すまでもないが、こんな例を擧ぐると誰でもうなづくであらうと思ふ。畵家の粉本ばかりでなく、工藝家の圖案委しく云へば佛師金工陶工蒔繪師などの下圖の類も、無論草稿と見るべきもので其の味ふべき趣は畵家の稿本と別にかはりがないからくどく云ふにも及ぶまい。併し工藝家は概ね筆を弄ばないものである。唯た其の筆の跡の存するは此等下繪に止まる位なものであるから、其の稀れなる點に於て、名工の下繪は味ふべき趣もあり、珍とすべき價もあるものである。

▲蒹葭堂肖像の扮本　又此に文晁が、浪花の蒹葭堂の肖像を寫したものがある。（出し示さる）。これは白河樂翁公が、此の當時の有名な人物の肖像を畵にして、それを後世に傳へたりといふ處から、文晁に寫さしめたものである。自分の藏してゐるのは、蒹葭堂の顏を見て、直ちに寫した其の寫實の扮本である。さうして椿山が表装して、建部綾足が蒹葭堂を詠

早稲田大學圖書館

じに万葉流の名高い歌を、矢張り椿山が書いてゐる。兼葭堂の肖像として樂翁公の書かせた物は、今現に博物館にある。併し版本の蒹葭堂雜錄の卷頭にもある。後者は潤色のあるもので、眞面目のものでない。樂翁公の書かせたものも、若干の潤色を免かれぬ。それよりは却つて其時のスケッチを取つた此の粗畫の方が、少しも潤色がなくて、蒹葭堂の本當の面目がいかにもよく現はれて居るのである。

蟹泡録（七）

（市島謙吉氏談）

△反故趣味（六）

▲光琳の借用証文　反故趣味の範圍を更に擴大して云へば古帳面、古証文の樣のものに至るまで、皆な包羅することになる。此等は本來無趣味のものであるけれども、其の筆者により、又其の時代によりては、必ずしも無趣味でない、例へば証文に就て云へば（自分は其寫しを所持して居るが）尾形光琳が茶器を抵當に入れて金を借りた借用証文のごとき、其の本書は確かに趣味がある。尤もなくとも時代がひどく古くなると、古文書として種々學術上の參考となるばかりでなく記事におかしみがあるとか、聯想上趣があるとか色々な點に於て趣味の存在するものである。國寶となつて居る東寺の百合文書（百合と云ふは申すまでもなく百箱の意である、昔し加州の前田松雲侯が普ねく古書を捜索した折東寺からバラバラの文書を特に借覽して返禮にそれを卷に表裝し箱まで作つて返却に及んだ、夫から百合文書の名がつくことになつた）のごとき、實に貴重の物で、多くは天平寶龜頃の筆で、一紙と雖も忽かせに出來ぬものであるが實に證文や手紙のごとき反故に過ぎないのである。之等は史料として有益であるばかりでない、書を味つて見ても文章を味つて見ても紙や印など味はつて見てもそれぞれ趣味のある者である。則ち時代から趣味の生ずることがまゝある。

▲古帝都と反故趣味　斯く考へて見ると古帝都の反故と云ふものは滅多に棄つべきものでない。自分の知人で或る鑑識ある老人は京都の街頭を散歩中或る商家の前に小僧が一冊の古寫本を解いて行李に紙を貼つて居るのを見て、何心なく立止まつて其の反故を見ると、實に貴重なものであつたので、驚いて其の反故を買ひ受けて歸つたと云ふ話がある。東京のごとき比較的新らしい都市には時代反故などが紙屑籠から出る筈はない。寧ろ東京人は太腹で氣風が粗豪であるから、兎もすると包金を紙屑籠にほうり込む事もないでは無いから、金は見つかることもあるが貴重の反故はない。京都人はどんなに間違つても、金を紙屑籠にほうり込むことは無いが、反故で具眼者が見ると惜むべきものを時々刻々紙屑籠にほうり込むで居ることは必らずあるであらうと思はれる。これは實に惜むべきである。

蟹泡録（八）

（市島謙吉氏談）

△反故趣味（七）

▲禰宜譜の裏に六朝の玉篇　古來貴重の反故や趣味ある反故が無意識の間にいくばく失せたものか實に數知れぬほど夥しきものなるは言ふまでもない。唯だ幸ひとも云ふべきはいくばくの貴重の反故や趣味ある反故は二ツの理由から眞に僅かばかり保たれて居る。二ツの理由の一は昔しは紙が餘り廉價に得られなひ結果として、大いに重んぜられ、反故と雖ども二度の務をさせぬ内は棄てなかつた。則ち一面に何か書いてある紙を利用し必らず裏に何か書いたものである。例を取つて云へば反故裏に具注歷を書くとか、何か寫しものをするとか、草稿に用ゆると云ふ鹽梅に、二度の務をさせて居るために、表裏兩面の内何れか一方に必要の書きものがある。そのために辛ふじて存して居るものが少なくない。伊勢で發見した禰宜譜のごときよく見ると六朝の玉篇を千年も前に寫した反故裏を利用して譜が認められてあつたので、具眼者は裏打の紙を苦辛してさがして、玉篇の斷簡を世に出した。禰宜譜は格別のものでないが此の玉篇の斷簡が千金の價を有するこれはホンの一例に過ぎぬが、一行でも今でも相當の價ある天平經の裏若くは經書を寫した卷子の裏などに何か書きつけたもので今日其の貴重の書たることを發見する塲合が少なくないが、皆な紙が稀れであつた當時、儉約のために偶然後世に殘つたと云ふに外ならぬのである。

▲定家と西行と光悦　今一つの原因は茶人がわびた趣味よりきらびやかなる書畫を排し草庵の床に調和を取るため、反故中より風韻のあるものをさがし出して、珍重することが長らく行はれた。これが又反故の幾許か現存して居る原因である古るい手紙などの割合に殘つて居るのは全く茶人が助けたお蔭と云ふてよろしいのである。去年大坂に游むだ折、大坂朝日新聞社の上野氏から貴重の反故をいろいろ示された其内に、面白ろく感じたのは冷泉家から出た反故で、西行法師の詠草の裏に定家の筆で例の明月記が書いてある。西行は定家の門人であるから、個樣の反故は定家の家にある筈で、今日となつては定家も西行も實に貴といものであるが、前にも言つた通り師弟の間であるから定家は一向に西行の書を貴ばぬ處から、終に反故に葬られた。而してそれが何故今日迄存在したかと云ふと全く茶人に助けられたのである。此の一幅の箱を見ると本阿彌光悦が箱書をして自家の珍藏であることを註して居る。藏者の光悦は云ふまでもなく茶趣味からこれを珍藏したに相違ない。古今の三名人が一所に集まつて居るなどは實に類ひの稀れなる例であるが、兎に角茶人がわびた趣味を主とする所から棄らるべき反故を助けて今日迄傳へた事は爭ふ可らざる事實である。

蟹泡録（九）

（市島謙吉氏談）

△反故趣味（八）

▲銅の價で純金を賣る　貴重なる反故、

早稲田大學圖書館

趣味ある反故が以上のごとき原因により幾許か今日まで傳はつて居るが、さて失せたものはどれほどあるか、實にはかり知れぬほどある。其の失せた中にも一種の趣味眼や歴史眼を以つて見たならば一紙何千圓と云ふ程のものも實に澤山あつたことであらう。然るに伯樂に遇はぬ爲めに還魂紙料となり終つたものゝ夥しいことを考へると、實に惜しむでも餘りある事である。某鑛山博士が曾つて慨歎したことがある。日本の銅鑛の古來海外に輸出された高は實に夥しいものであるが、今こそ分析の術も進み銅に含有する金は及ぶべく分解して、混合せぬ樣にして居るけれども、分拆などを知らなかつた時代に、銅と合はせて輸出した純金の高を積算して見たならば、實に何千何億万圓に上る位であらう。コンな巨額な純金を銅のお伴として銅の價で、メチヤ〳〵に海外に出したと思ふと殘念で堪らぬと語つたが、自分は反故に就ても全く某鑛山博士と感を同ふする。換言すれば金と銅とを識別する智識が無つた爲め、

非常な損をしたと同様に、反故を鑑識する明が無つた爲め、アタラ貴重のものを皆な亡ぼして仕舞つたので、實に惜むで餘りある事である。

璽泡録（二十）

△反故趣味（九）

（市島謙吉氏談）

△西本願寺法主の反故狩　我輩の反故趣味を喋々するのは、好事の故で無い。前のごとき悔を再びせざらんことを警戒する爲めである。あたら寶を無意識の間に失はざらんことを注意するのである。書畫趣味を世間一般が或る形式を標準として、それを經界とし、疆域として居る。それを擴大して更らに趣味界を恢弘せんと欲するのである。これに就き近來會心の事は西本願寺の法主が支那の西域に大遠征を試みた一事である。これは西本願寺のごとき有力者で無ければ出來兼ぬる企てゞある。支那の西域は軍隊の警衛が無ければ一寸入り兼ぬる危險の處である。

無論何万圓と云ふ旅費を要する事であるが、此遠征の目的は何であるかと云ふにいくつも目的があつたろうが反故あさりも確かに其の目的の一であつて、而して此點に於て成功した。自分は幸ひに其の齎らし歸つた夥多の反故を閲覽することを得たが、實に貴重のものである。それは六朝より唐代に渉る文書で書もあり畫もあり一片紙一斷絹と雖ども、幾んど支那にも日本にも匹敵の無い程のものである。佛蘭西では政府の力で支那の敦煌石室から古文書を發見した。それが支那でも類の少ないものと云はれて居るが、西本願寺の發見したものは概してそれより以上のものである。全体六朝代の書などは支那本國に於ても金石の上にのみ傳はつて居るものであるが、法主の發見したものは幾百通皆な肉書であつて、斷簡もあるが完璧のものも少なくない。誰れも知つて居る通り、書と云へば王羲之を第一に推すが羲之の肉筆は日本に無いは勿論（どこ〳〵にあるなど云ふ人もあるかは知らぬがそれは雙鈎本を以つて正筆と思つて居るのである、皇室の王羲之も矢張り雙鈎本である）支那にも無い。然るに今度法主の發見した内に羲之は無かつたが羲之と同時代の人、寧ろ其の先輩の書が出て來た（先輩と云ふは年齡の上から云ふのである）。それは李柏と云ふ武將の書であつて、此人は晋書に明かに名前の出て居る人である。此人は羲之のごとき能書ではないが、晋代の肉書の面目が初めて世界の人に知れるのであつて、實に貴重のものと謂はざるを得ない。此他六朝代の寫經が幾十本とあり、唐代の彩色を施たる佛畫の類が實に夥しくある。扨て此等が學術界に將た趣味界に今後研究に連れてそれほどの利益と快娯を與ふるか、實に測りがたきものあるに相違ないが、此等貴重のものは實は皆な反故であるのだ。西本願寺の法主は幾万の金を散じ危難を冐して反故狩を遣つたのである。幾万圓の金を立派な表裝をした一幅の書畫に投ずる人はあるが、反故と云へば振り向きもしないと云ふ世の中に、斯る破天荒とも云ふべき遠征を試みたのは實に反故のために虹の如き氣焔を吐いた者として愉快に堪へぬ感じがする。

璽泡録（二十一）

△反故趣味（十）

（市島謙吉氏談）

△反故はなぜ不人氣か　立派な表裝をして幅となし額となし帖となし卷となし得るの書畫は、裝飾となるから、誰れでも賞翫するが、反故となると極めて不人氣のものである。今不人氣であるわけを分拆して見ると、其の原因が凡そ七個條あると思ふ。第一反故として閑却さるゝ位なものであるから美麗でない。第二完璧を闕いて居る場合が多くある、一ト口に云へば纏まつて居らぬ。第三幅にも額にも帖にも卷にもなし兼ぬる格好のものが多くある。一ト口に云へば格好がよろしく無い第四反故の類は多く落欵を闕いて居る、無論印章などが捺して無い。第五裏に何か書きつけてあつたりなどして概して穢ない。第六草稿などになるとあちらこちら塗抹してみぐるしい。第七あちらこちらに虫食などがある、或は保存を粗略にした結果汚ごれたり切れたりして居る。また考へたら此外にもいろ〳〵あるも知れぬが兎に角反故の不人氣であるは此等の理由によることゝ論ずるまでもない。併しこゝに斷つて置くが前にも云ふ通り反故の範圍もなか〳〵廣汎であるから、すべて反故は必らずしも以上列擧したごとき性質であるとは云へぬ。中にも落欵もあり紙も滿足で塗抹もなく格好もよいもので尚ほ且つ反故として取扱はれて居るものがいくらもある。以上は特に際立つた資質を擧げたものと了解して貰ひたい。

△趣味の問題と價の問題　さて反故は斯のごとく不人氣のもので概して裝飾用となり兼ぬるものであるから、或る例外の場合を除けば（例へば空海の書が一字何百圓定家や行成の書が二三行で何百圓と云ふごとき例もある）大体反故は滿足な書畫に較べると價は實に廉いものであることは云ふまでもない。併し價の有無と趣味の有無とは全く根抵を異にして居る趣味があつても價の廉いものもある。價がいくら貴くとも趣味が無いものもあるこれは全然區別して考へねばならぬ事であるが、實際に於ていつも價の問題がか

らんで、兎もすれば價が高いから趣味がある様に考へられたり價が廉いから趣味も亦薄い様に思はれたりする間違が世間に甚た廣く行はれて居る。別して金力に富むでも鑑定力を闕いて居る藏幅家に、この病のあることは誰れも知る所であらう。吾輩が反故趣味を主張するのは決して反故の價を非反故の價と同等たらしめんとし、若くはそれ以上たらしめんとするのでは無い。そんな事は全く別な事で自分の主眼は反故趣味を發揮するに在つて價の如何は關する所でない。

蠹泡錄（廿三）

（市島謙吉氏談）

△反故趣味（十二）

▲反故趣味と鑑賞力　反故などを弄する者を目して好事家の業として排斥する者がある。然れども反故にも實用を爲すものがいくらもある。即ち修史のために材料として集むる文書、博物館や圖書館に於て研究資料として蒐むる文書のごとき皆な實用の上から一紙何百圓を拂ふを意とせざる塲合が少なくない。眞逆かに誰れも之れを好事と云ふて排斥する譯にもゆくまい。而してひとり趣味のために、反故イジリをする者のみを排する謂はれあるべきや。趣味を感ずると云ふもツマリ美を感ずるのである。反故で美を感ずるがわるいならばすべて美を感ずることがわるいことになる。恐らく個樣の道理はあるまい。吾輩を以つて言はしむれば反故趣味はさびた趣味であるとジミな趣味であるとクスンだ趣味である爲めに一寸其の趣味が感じにくい。それがために一概に反故なんどはと排斥し去つて之れを弄ぶものを貶するのではあるまいかと思ふ。そも〳〵きらびやかにして眼を眩ずるなどの装飾的書畵は凡眼でも其の美を感ずる。併しジミなる、サビたる、全く装飾を闕く反故になると、其趣味を感ずるにはそう無雜作な譯にはゆかぬ。少なくとも相當の鑑識を要する。落欵が無くとも筆者を判ずるの力が無くてはならぬ。年號は闕けてあつても、其時代を判ずるの明を要する。種〻の聯想より趣味を喚起するは時に反故の塲合に多くあることであるが、これが爲めには相當の智識を要する。又時代や人物を味ふことも前と全じく反故の塲合に尤も多くあることであるが、之れが爲めにも又相當の智識を要する。而して種〻の考証から隱れたる趣味を發揮するのは愈〻充分の學力が無ければならぬ事であるから、反故趣味は貧乏趣味とは云ふが、實は一段高尙なる趣味とも云へる。其の多數に人氣なく頗る受けのわるいと云ふもつまり力がなければ翫味が出來ぬからである。元來前にしば〳〵云ふた天眞流露の味は反故趣味の特色であるが、これを味ふと云ふことは自然を味ふと全じく、高尙の事であるから、反故趣味を俗衆に皷吹するは實は無理な注文である。故に吾輩は誰れにもこれを味はへとは云はぬ。唯だ多數の書畵趣味を有する人が此の方面を全く閑却するを如何にも遺憾に思ひ、何故趣味の方面を一層擴大し、此の沃野を開拓せざるやを不審とし、こゝに反故の爲めに寃を雪ぎ、且つ其隱れたる趣味を聊か發揮したのである。（完）

閑雁餘談（二）

市島春城氏談

温泉場の變遷（上）

今の湯治場は昔と比べて甚だしい變遷を示してゐる。その昔は湯治場といへば療痾を第一の目的とした。あるひは山水勝を有するものなどが、普通の旅館に宿るよりは少しく驛路を離れた温泉場で落ち着いた氣分に浸らうとして特に滯在することもあつたが全然今の狀態とは趣を異にしてゐる。

温泉場といへば諸國のものが入込んでをり、無聊な男女が雜居してゐる間に、ツイ妙なロマンスが起つたりしたとは、今も昔と敢て違はぬ。温泉場が小說家に材料を與へたとは三馬や一九や京山などの著した戯作を見てもよくわかるこの場所で意外の人と懇意になつたり、思ひがけもなき舊識に邂逅したりなどすることは、場所柄として、ありがちのことで、古來この場所には倶樂部的の意味が存してゐたに違ひないが、しかし昔の温泉場は多くは邊僻の地に在つて交通が容易でなかつたから、ノッピキならぬ場合でなければ遠くから行くものはなかつた。即ち療痾が重で今よりも温泉の効驗が遙に過大に信ぜられたものである。

かうはいふものゝ、勿論温泉場附近のものは單に遊びを目的に行つたであらう、自分なども書生時代に信州遊歷中、松本の知れる醫師を訪問した時、附近の淺間温泉へ直に案內されたことがある。こんな意味からいふ時は、温泉場は宿屋でもあれば料理屋でもあり遊び場でもある、併し何といふても昔は單純のものであつた。しかるに今のやうに交通が充分に開け、温泉場といへばどんなところでも餘り骨折らずに行けて、行けば相當の設備もあり、大抵な贅澤も出來るやうになつて見ると、療痾は必ずしも重なる目的ではなくなりいろ〳〵と新たな目的も當然加はつて來る譯で、寒氣には避寒、暑中には避暑に行く。これ等も療痾

川ホテル

閣議の席上

きさつ

撮影したのは昨

年四月中旬(小川

法相時代)

待週間始まる

雅俗相半録（五）

市島春城

逍遥君の藝術に熱心なること

坪内逍遥君の藝術に熱心なる事も、眞に驚く可きものがある。數月前熱海の別荘に重患に罹つて、其の生死すら氣遣はれた時、別荘の病室から、低い聲ではあるが、三味線の聲が聞えたので、人は之れを奇とした。しかし實際は、三味線ばかりで無く、其の病室にて、踊の稽古が行はれて居たのである。丁度其の數日後に熱海線が開通するといふので、豫て逍遥君が其爲にものした『熱海の榮』といふ唄を、開通祝賀會に、藝妓が歌ひ且つ踊るといふ段取になつて居た。君は恰かも其の場合病に臥したのであつて、それが氣になつて堪らぬ。そこで生死も測られぬ病床に、一二の藝妓を招き、踊の振を授けることにした。幸ひ踊の道に熟達の聞えある坪内士行君が見舞に來て居た爲め、それが君の意を承けて、枕頭に練習を試みた。其の三絃と舞踊の聲が、室外に聞えたのであつた。

序でにいふべきは、同じ熱海の、有名なる梅林の片隅に、古い祠があつて、欝然天を摩する大老樹が其の傍らにある。嘗て君が役行者の脚本を書く時、身自ら劇中の人物になつて、其の老木に攀ぢ登り、實地の試しをやつて見たことがある。此頃君を熱海の別荘に訪ふた時、うす暗い壁間に、一面の寫眞が掲げられてある。之れを熟視すると、身體は痩せて居るが、白髯長く垂れた、白衣の行者らしき者が、端然として座して居る。之れが其の折の記念として寫されたものであつて、逍遥君に、白衣迄着けて木に登るとは、なか〳〵凝つたものだといふと、それはさうでは無い、よく見たまへといふので、更に見直すと、成程、白衣と思つたのは、羽織を裏返しにして、白い羽二重の裏が現はれて居るのであつたので、思はず一笑を催はした。

◎次に坪内逍遥だ。實は此頃同君と熱海へ出掛けた。元來君は文學者の常として夜分不眠であるので、睡眠劑を携帶して行つた。處で二晩許り其藥を服したけれども驗がないと云ふので、我輩に向て『熱海へ來て藥が乘らぬで困る』と零す。處が例の君のそゝつかしさで、間違て寒冒藥を持て來たとが分り、果は大笑となつた。此んなとから睡眠の話が出た。すると逍遥の曰く『僕は藥の力を假らずして睡眠し得るのは一ケ月中僅に三四回に過ぎぬから、始終氣分が悪い、同時に薬を用ゐずして睡眠を得た翌日は非常に爽快の感がある。故に人若僕に最大なる愉快は問はゞ、それは藥力を假らずして睡眠し得た翌日だと答へん』と云ふ。文人には得て斯う云ふとがあるものだ。

◎坪内逍遥は常に『何うも僕は刻苦して作をやるが、それを版にすると云ふ間は愉快だけれども、愈よ了つて公刊する時は既に感興の盡くる時だ、夫迄は前途のホープがあるが、玆に至れば全く興味索然で、見返すとさへ厭だ』と云つて、自作の著を名けて皆『舊惡全書』だと云つて居る。此の如く君が心血を濺いだ作物は、版になりさへすれば『舊惡全書』の中へ編入される譯だが、此舊惡全書は大したものになつて居る。

◎君の如き筆致縦横なる人は何時でも書けるものと思ふが、之は大の間違で

全く天來の感興を待て書く、換言すれば狐に憑かれる時でなければならぬ。狐に憑かれる、即ちインスピレーシュンの動く時、感興の發する時で。偶爾之を得れば倏忽想浮び筆從ひ、我識らず一瀉千里の勢を以て書き、平時に於ては言へ得ぬと迄云ふ。同時に之を得ざれば全く書けぬ。故に間々君に原稿の催促なぞすると『何うもいかぬ』と云ふから、我輩は『君の狐はまだ憑かぬかネ』と云ふと、君は眞面目に『狐が來ないで困る』と云ふ。それで時に我輩が『まあ〳〵狐が憑かぬとも坪内雄藏で澤山だから』と云ふとがあつても先生斷乎として承知せぬ。

◎一體藝術の大家、殊に詩人に斯う云ふ例のあるのは、東西相一致して居る處だ。彼のゲーテーの如きは、其神興一度動くや眞夜中でも暗黒でも、乃至紙でも何にでも、またそれが曲つて居らうとも委細構はず書きつけるので、其際聊かにても準備らしい動作、假令ば出つた紙を直とか何とかすれば興感忽ちにして失せると云つて居るから、單り我逍遙君許りではない。

趣味談叢

雙魚堂主人談
（禁轉載）

◎嘗て坪内君は我輩と二人連で散歩したとがある。其時君はとある風景に觸れて切りに其美を賛嘆し、「何うも此具合がよい」と謂ふ。其場所は全くの片田舍で道傍も汚くまた破屋なぞもあるが、自然の山水には捨て難き眺めがあつた。此時君は風景美を取て、沙翁の文章と比較して曰く、歐洲近世の大家の文章は、事が餘りに整頓と片付いて、謂はゞ格に入過て居るので面白くない。其處へ行くと沙翁の如きは一向片付いて居らぬ。時には汚いものがあつたり不整頓の處もあつたりして、一見散漫の樣ではあるが、其彫琢を加へざる所に趣味があつて、全体の結構に於て醜所を美化して居る。風景に於てもそうだ。取繕はぬ、片付かぬ處に自然の趣味が饒い」と云ふ。我輩は此時手を拍つて同感であると嘆した。

◎逍遙君は文章美風景美に就て云つたのであるが、我輩は單に是等計りでなく、書畫、工藝、美術等に於ても、趣は片付いたものより片付かぬ處にあると思ふ。畵の如きは近世の技術は進んだもので、纎細の微に亘り巧緻を極むるとは古人の壘を摩しては居るが、趣味風韻は自ら異つて居る全体何方かと云へば巧なればなる程趣は薄らぐもので、古人雪舟、雪村乃至其他の名家は概して片付かぬ處に趣がある。骨董に於ても日本のものより支那のものは風韻あり、特に明代若くば其以前のものに面白味があつて、それは全く片付かぬ處に存する。日本人は一つの函を作にも仲々精巧で、尺杯にも決して間違はないが、之を取て行届かざる支那物に比べて見ると、乍遺憾風致が欠けて居所詮眼目に於て相違があるからである。

◎また大きな建築物でもそうだ、日本のものを見ると、例へば日光の廟抔は目の見えない處へ持て來て、籠彫の左甚五郎の作等があり、其他屋根の如きも、天井の上の構造迄、木組から何から寸尺も違はぬ樣に出來て居る、處が支那に於ては天井の木組や彫刻の如き粗大にして、たる木抔もずぼらで、寸尺の如き彼是言つては居らぬ。然るにイザ出來上るとなると支那の方に趣がある。元來何十丈も上の處に纎巧の事をやつても見える譯のものでなく、却て粗大の方が目につくものだ。要するに建築に就ても、日本は片付過ぎ、支那は片付かぬ處に趣がある。所詮趣味は片付かぬ處に多くあるもので、其味を感ずるものにあらざれば、共に趣味を談ずるに足らぬと思ふ。

以下全て
白　　　紙